
俺、練成されたんだ。

おろろー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺、練成されたんだ。

【Nコード】

N1381J

【作者名】

おろろー

【あらすじ】

人体練成された誰かががんばるお話。わりと適当にがんばってます。

第0話：読む前に目を通して下さい

この作品は私の思い付きです。
以下注意事項。

- ・オリジナル主人公ががんばります。
- ・多分転生です。
- ・オリジナルキャラクターも出る予定であります。
- ・時系列が狂っています。

・原作キャラが一部壊れている場合があります。

・原作キャラの年齢は基本忠実に反映しますが、歳を取っている人が出てきます。その逆は俺のログには無い予定であります。

・ご都合主義が蔓延っております

・中二病とは上手く付き合って行けると名作が出来上がると信じています。

・敵キャラが良い人だったり下僕になったり、部下になったりするかもしれません。

・死ななかつた人が死んだり、死んだ人が生きてたりするかもしれません。

・オリヴィエ・ミラ・アームストロング少将はかつこよすぎるんだ。

以上です。

書き忘れがあったらその度に書き足していくのであしからず。

書き忘れを下に追記。

・独自解釈した設定が出てきます。

・作者は単行本の「鋼の錬金術師」しか知りません。

1話：人体練成されるらしい。

よし。

今起こった事を説明しよう。

俺は朝起きて、歯を磨いて、顔洗って、飯くって、よしっ仕事がんばるぞっと。

てな感じにいつもの日常を謳歌しようとしていた所だった。

そんな日常だったんだが、どうやら非日常になった。

なんせ俺の目の前にはデカイ門があるんだ。

自宅の扉を開ければ、あら不思議。そこにはもう一つ門がありました。

それなんて不思議なんだろう。

この世は摩訶不思議奇想天外ですね。

珍しい体験したなー、とスルーしようとしたんだが。

突然門が開いてなんかウネウネした手に掴まれた。

抵抗らしい抵抗もしないままに俺は門の中に入った訳なんだが。

「よう。さすがのお前でもこの事態には……びっくりしてなーな」

門の中には、生意気に話す人型が居る。

形なんて人っぽいつてだけで、人じゃない。

むしろ影って感じだ。

「まあ、いいか。所でちょっとした提案があるんだが、いいか」

影は頭を掻きながらさも面倒そうに話しかけてくる。

「まあ、聞くだけなら」

俺も面倒だったので適当に返した。

しかし、あの仕草はどこかで見た事ある気がする。

「そうか。大した事じゃねーんだがな、とある別世界でお前を人体練成しようとした人間がいるんだが練成されてもらっちゃくれんか」

なんだよとある別世界って。

しかも召喚じゃなくて練成ってなんだよ。

中途半端にファンタジーしてんじゃねーよ。

「だが断る」

とりあえず言ってみたかった事を言ってみた。

「へえ。理由はなんでだ」

「すまん。ちよつと言ってみたかった」

「まあ、お前ならそんな所だろうな」

なんか、こいつム力つくんですけど……。

さもお前の事は解ってたんだぜ、って言い草が腹立つんだが。

「で、本音は？」

変わらぬ面倒そうな仕草で促す影。

まあ、俺もあれだ、中二病というのにかかった時期もあった事か

ら、このような事態は興味があるんだが……。
当事者にはなりたくない。
故に。

「中途半端にファンタジーなのが嫌だ」

……とりあえず遠まわしに断つといた。

「ふーむ。なかなか面倒な理由だな」

「でもな召喚じゃなくて練成なんだぞ。テンションガク落ちしてし
やーあんめー」

「つまり召喚されるならOKなんだな？」

「ばっか。仮に召喚されてもその世界が中途半端にファンタジーじ
や意味ないだろ」

「ならお前限定でファンタジーにしてやる。だから練成されてくれ」
こいつ俺の話聞いてるんだろうか。

「はあ？ お前俺の話聞いてる？ 世界がファンタジーじゃなきや
嫌だっつってんでしょ」

「ならそう言う事で、練成されてくれ」

「ちよっ、おまッ」

突如感じる脱力感。

ほんじゃな。と手をブラブラと振る仕草は如何ともしがたく俺に
似ている。

「ちなみに、お前のファンタジー能力は“ありとあらゆる物と契約
出来る程度の能力”だから」

ついでとばかりに言われたセリフにはちょっとニヤケそうになったが、ツハと気付く。

「東方に練成されんのかー！？」

「そんな訳ないだろ間抜け」

そんな声と共に俺の意識は途切れた。

そんで目を覚ませば目の前には、どこかで見た事のある超絶美女。なんか血反吐吐きながら微笑んでくれています。

「ほぎゃー！ー！ふえ（こえええええええええええええええええ？）」

「ああ…シルバ師よ、感謝します」

匍匐前進してくる美女と、ビククリして叫ぶ俺。

美女は俺を抱きかかえると感無量とでも言うべき表情をして気を失った。

気を失う間際。

「シグ、もう一人の私の子。ごめん」

なんて声が聞こえた。

そしてボタンツてな感じで吹き飛ばされる扉とその先に立つ野獣。練成だか召喚だかされて即効死ぬのか…そんな事を思いつつ俺は気を失った。

2話：美女と野獣とオレとネコ

やあ、前回中途半端にファンタジーな世界に飛ばされた俺だ。
現在3歳児やってます。

と言つても場面飛びすぎだから適当にこれまでの一生を振り返つてみるよ。

あの後駆けつけてきた野獣はどうやらあの美女の旦那だったらしい。

ちなみに両親です。

母の名はイズミ・カーティス19歳。

父の名はシグ・カーティス20歳。

病によって子供を流産した事から母イズミがその子を練成しようとして俺を練成したらしい。

しかし、死者を練成すると言う発想はイカレてると思うんだ。

普通悲しんで悲しんで乗り越えて。

それが普通だ。

なまじ頭が良く、それを可能とするほどの力量を持っていたのが不幸だった。

俺を練成した代償として、彼女は内臓を失った。

3年見てきたが、母が一日の内で血を吐かない日は無い。

そのつど親父殿が暴走して「イ〜〜〜ズ〜〜〜ミ〜〜〜死ぬな〜！〜」って吠えるんだ。五月蠅くて仕方がないヨ。

でもまあ、この二人は凄く愛し合っていると云うのは解る。

毎晩毎晩お盛んですね。冗談じゃねー。なんでもあのサイズのアレが入るんだ。お袋凄すぎるよ。

ちなみに俺への愛も天元突破しているのは言うまでも無いだろう。お袋も親父も俺を溺愛している。

そりゃもうコトの最中にも離さないくらいだ。本当に冗談にしてください。

ちなみに俺の事は一日中母がずっと抱っこしている。

包丁を掴ませて「これを使う日があるのかにゃー」なんてユルユルの笑顔で聞いてきたり。

「男は強くならなきゃならん。いいな。でも、余り危ない事は…いや、それでも千尋の谷に突き落とすのが父の務め！！いや、しかしなあ」なんて俺を抱きながら野獣が言ってるが凄く有難迷惑です。

そんな感じで三年間ぐらし、ようやくコトに及ぶ際に俺の目に付かない所でしてくれるようになったくらいだ。

ちなみにお袋を見た時に感じたデジャブーは俺の母の事だった。

えーあっちと言つか練成される前のね。

ドレッドとかされてるとわからねーよ。

しかも後数年でこの超絶美女がああのおぼっちゃり系に変貌するのと思うと、時の残酷さを感じるね。

後、初めての言葉は「おかあちゃん」にしといた。

舌が上手く使えないんだ。

ちなみにお袋は幸せが天元突破したようぶっ倒れた「ゴバブツ！？」えへ、えへへへへ。ああああ。し・あ・わ・せ」ってのが最後の言葉だ。血を吐いてたのがシユールだったが、まあいつもの事だ。

親父は血の涙を流しながら床を撲殺してた「うおおおっ！！お

とおしゃんじやないのかっ!? うおーっ!!」って感じで、それから数日たって「おとーさん」って読んだら野獣に絞め殺される所だった。

すぐさまお袋に救助され、親父は哀れボロ雑巾に……めちやくちや喜んでたが。

んでだ。そろそろ“ありとあらゆる物と契約できる程度”の能力とやらを検証してみたいんだ。錬金術はね、あれは学問なんだ。東大を主席卒業出来るくらいの頭がないと無理なんだ。それにさ邪道だと思っのよね。

べ、別に俺の頭が悪いわけじゃないんだからねっ!!

……

……

……

一回目の契約は黒ネコにした。

家でひき肉にされるブタにしようかとも思ったんだが、それは微妙だったから止めた。英断だと思っんだがどうだろう。

まあ、なんで黒ネコかって言うと、お袋と散歩に出かける道でよく見かける野良ネコなんだけど、俺の好みにジャストヒットしたのよね。

と言っ訳でレツツトライだ。

「うあ〜う。ニャンコー」

「ん〜? ああ、あのネコは良く見かけるね〜。遊びたいのかい?」

コクコクと頷くと、お袋は慈母と見まがう笑顔でネコのそばに下ろしてくれた。

俺は慎重にネコに近づくと、あっちも頻繁に見かけているからか、それとも餌付けされているのか、逃げる事なく俺を凝視している。フラフラと歩き、ネコの前に座った俺はそいつを抱き上げる。フニャツ！? と何やら泣き声をあげたが何のその。俺はそのニヤンコの目を凝視する。凝視して凝視して凝視して。

そこでやっと俺はどうすれば契約出来るのか知らない事に気付いた。

「あゝう」

思わず声をあげてしまうが、母はそれでも表情を崩さない。

いや、もはや崩れきつていると言ってもいいのだが、そこからは崩れない。

そうして数分。

ニヤンコが辛抱しきれなかったのか、俺の頬を引っかいた。

もちろん血が出た。

そして鬼が具現した。

その名はイズミ。主婦と自称する天才錬金術師だ。

「ほっほう。この野良ネコは命がいらないようだ。何今晚のシチュ―にしてやるから安心しな、シグモネコシチューは食べた事ないだろうからね、私が今晚その美味さを教えてあげなくちゃ。そうそう、この世には傷つけちゃならない者ってのが存在するんだ。来世ではそのへんよ――理解して生きてくんだよ
ノラネコが――っ!」

……こわっ!?

と思つたのも束の間。

『……死なばもろとも。我が命にかけてうめを道連れにしてくれよう主婦よ』

なんてシブシブ声が聞こえてきた。

なん……だと……

と思わず思つてしまつても仕方がないだろう？
ちなみにそれは俺の腕の中にいるネコだった。

これは契約成立か！？と喜び、しかし、背後にいる鬼神から守る為、俺はネコを抱き寄せる。そしてお袋をジッと見つめる。
瞬時にお袋は顔を笑顔にして声をかけてくる。

「そのドラネコはね。危ないからおかーさんに渡しなさい。今日の晩御飯だからね」

『戯けめ。うめこそ我が夕餉の一つになるがよからう』

……どっちも怖いが、とりあえず抱きしめ首を振る。

「え、ええ！？まさか、飼いたいのかい？」

コクコクと頷く俺に困惑顔のお袋。

「でもねえ」

うーんと唸るお袋を見つめる。
と、そこで思わぬ援護が来た。

『なんと、童よ我を助けようとしておるのか……なんたる慈悲の心

よ。童に抱かれる心地も悪くなし……傷つけた者を庇う仁の心、なるほど、よかるう。私はうぬの配下となるうぞ』

とかなんとか、ネコが感動して俺の傷口をペロペロ舐めてきたんだ。

それを見たお袋はダメージを負ったのか血を吐いて膝を突いた。

「なんて……なんて…これ、なんてアヴァロン？」

が今回の最後の言葉だった。

俺を好きなのはもうとっくに知ってるから。お袋ネコ派だったんだな。

そんな感じで俺の契約者第一号が誕生した。

ちなみにこの後は俺が笛を吹いて親父を召喚した。

土煙を上げて爆走してくる猛獣は見た目恐ろしかったがもう慣れた。

ちなみに笛はお袋が倒れたら吹けと渡されている物だ。

これまでの使用回数は459回。

3話：地獄と愛とオレの決意

親父召喚回数が4桁の後半に入りそうな昨今、俺は10歳になった。

この頃になると俺も大分自由に走り回れるようになった。

それでもお袋が常に引っ付いていたり、親父が影から見守っていたり凄く愛されてる。

ちなみに契約者第一号となった黒ネコはニャンコと言つ名前になった。

俺がニャンコニャンコ連発していたからだが、ニャンコはそれでいいらしい。

曰く。

『それが我が名か…ふむ。ニャンコ。聞きなれぬ響きだが、どこか優雅な趣がある、気に入った』

らしい。こいつも対外おかしいが、俺と意思の疎通が取れている事をまだ気付いていない。笑えるので気付くまでほおって置くことにした。

「シングルドーご飯だよー」

いまさらだが、これが俺の名前。

実は、コイズミとシングルドで両親の骨肉の争いがあったのだが、親父ナイスファイトと言わざるをえない。お袋には悪いが、コイズミなんて名前になった日には絶望していたかもしれない。

まあ、ネーミングセンスは似たような物だからどうとも言えんが、少なくともコイズミよりは良い。お袋、ごめん。

「今行くっ!!! ニャンコ俺の胸にダイビング!!!」

バツと腕を広げる俺。

しかし、ニャンコは何故か飛びついてこない。

どこかモジモジとした動きをして非情に可愛いが、何この生き物。愛したい。

「しょんべんまだなんか？」

とりあえず聞いてみたが、

フシャーーツ。

髪を逆立てて威嚇された。

しかも、

『まったく主は何時までたってもでりかしーと言う物を覚えん。雌にそのような物言いではこの先、連れ合いを獲得するのにさぞや苦勞しよう…』

とか言われた。

ビキビキと青筋が立つが、ここは我慢だ。

俺は我慢できる男なんだ。

「シグーーツ！！ 早くしなーーツ！！！」

お袋の催促も激しくなってきた。

「はやくしろーっ。ニャンコーっ！！ お袋に怒られんだろーが」
『やれやれ、幼き頃の純粹で器の広い主はどこにいったのか、世も末じゃわ』

このクソドラネコがーーツ！！

可愛いからって何でも許して貰えると思うなっ！！
あと10分だからな！！

結局、20分まっても用を足さず。

俺はお袋に拳骨を貰った。

しかも、親父はそれを見てすげーいい笑顔でサムスアップしてた。
何が言いたいんだ親父。

俺の昼の生活はそんな感じで親に見守られ、いろいろな場所をニ
ヤンコと一緒に駆け回っている。

んで夜になると、地獄の修行が始まる。

「ほら。円が基本だよ、投げ受け斬り突き全て円軌道が軸になっ
てるんだ。もつとしっかり受け流すんだよ」

とか言われつつ親父にボコられるのだ。

ちなみに指導はお袋が、実践は親父が担当してくれている。

空を飛んだ回数は忘れた。壁に突き刺さった回数は確か238回
まで数えて止めた。地面に埋まったのは124回だったはず。

これを地獄と言わずしてなんとと言う……。

この地獄が始まったのは確か6歳の頃だったか。

唐突にお袋と親父が大事な話がある。とか言っつて真剣な表情で語
りだしたのだ。

「いいかシグルド。あんたはこの先、必ず危険な事に巻き込まれる。
理由はまだ話せないし、私の口から話すのは正直嫌だ。でもね、必

ず他の奴等が嗅ぎ付けてくる。その時の為の準備をしなきゃならぬ。これから毎晩シグルドを守るための技を教える。いいね」

って、お袋がめっちゃくちや真剣な表情で言ったのだ。

親父は目を瞑って腕を組んでるだけだった。

はじめの子供ボケた親父はなんだったんだと、言いたいくらい普段の親父は話さないのだ。

でまあ、俺も護身術くらいなら良いかなって気持ちで承諾した。んだがな。こんな地獄とは聞いてねーです。

むしろ、こんな地獄の特訓しなきゃ防げない危険ってなんだよ。

って言いたいね。

まあ、この真剣な態度とこれも愛の鞭だと解ってるので真面目に取り組んでいるが。

俺は他の事でも戦力増強をしていた。

それは俺の幻想卿的能力である。

あれって実は血とかいらねーの。はじめの契約で血が付いて出来たからそうなのかと思ってたが、そうでもなかったらしい。

契約における決まりは確認できているだけで3つ。

1・命の宿る者とは血を交わさなければならぬ。(一方的でも構わないがその場合の契約は繋がりのみとなる)

2・無機物との契約は手にとり念じるだけでOK。アポートの追加効果も付与される。

3・契約を交わした相手とは、その繋がりが深いほど干渉しあう。

1・2は別に構わないのだが、3はトンでもないのだ。

一時鳥と契約していたのが、意思の疎通から目の借用、行動の優先権など様々な恩恵があったが。

その鳥が狩られたんだ、その鳥は羽を打ち抜かれて死んだ。

するとだ、俺の右腕に突然穴が開いて血が噴出した。

しかも死んだ鳥の見た景色感じた想いなども俺の中に入ってきた。もちろん死の瞬間の想いもだ。

これには驚いたね。

食事中に行きなり腕から血が噴出して、嘔吐するのだ。

親父もお袋も半狂乱になってた。とくにお袋の取り乱し方は尋常ではなく、俺を抱きしめて泣き叫ぶのだ。

「やめろっ！！ この子は私の子だ！！ 例え世界と言えど奪う事

なんて許さん！！ 対価が欲しいなら私を持っていけ！！ どうした！？ 私はいらんか！？ 私で足りんなら夫もつけてやる！！

私達は絶対この子を奪わせない！！」

なんて天井を睨みながら言うのだ。

親父も親父で、覚悟を決めた表情で俺とお袋を抱きしめて辺りを見渡していた。

これが5歳の頃だ。

これ以降俺は生き物に対して契約を行ったことは無い。

現存しているのはニャンコのみだ。

他に契約しているのは主に武器系統と調理器具だ。

武器はサーベル・ロングソード・刀・槍・マスケット銃・ハンドガン・スナイパーライフル・火薬・弾丸など様々だ。

調理器具は基本的な物は一通り網羅してある。

ちなみにこれらは店で売ってたのや、道行く人に子供の純情を餌に一方的に契約した。

具体的には

例1

「すげー!!! その剣かっけー!!! 親父さん俺も握ってみてもいいか!?!」

「はは、ジュニアはいい目してんなっ!!! よっし。坊主だけ特別に持たせてやる!!! そうだシンから輸入した秘蔵品もあるんだ、序で見えてけ!!!」

「やった!!!」

「珍しい物が手に入ったらまた見せてやるかな」

「ありがとうーっ」

計画どおり…

例2

「お兄さん、その銃もしかして有名なアレなの!?!」

「おっ。解るかい? 君は技師の息子かなにかなのか?」

「違うけど良い物だったのは知ってるよ! すげー俺も持ってみたいなー」

「ははは、これは軍で優秀な戦績を残さないダメなんだが、そうだな君は見込みありそうだし持っただけならいいよ」

「ありがとう兄ちゃん!!!」

「はは、お安い御用さ。おっと弾は抜いてるけど気をつけるんだぞ」

「はーい」

ははは!!! 俺様、窃盗・強奪・大怪盗!!!

そんな感じだ。

無機物だからアポルト、引き寄せは可能だ。

行き成り剣や銃がなくなるんだ、店や軍人はさぞ困るだろう。

まあ、人事だが。

「他の考え事をするな!! あんた!!」
「おうよ!!」

腹部に衝撃。

そして空を舞う俺。

しかし、腹痛く無いんだ。親父の力量はどの辺にあるのか純粹に疑問だ。強すぎるもの。

「ひゃっふーっ!! たけーっ!!」

「喜んでる場合か!!」

「…息子よ。いつか俺を飛ばしてくれ」

「アーイ、キャーーン、フラーーイツ!!」

「受身!!」

「フンドツ!!」

「良くやった!!」

「さすが俺の息子……」

「だけど飛ばされて喜んでんじゃないよ!!」

「サーセン!!」

「ごめんなさい。だろ?」

「……ごめんなさい」

そんな感じで俺の一日は過ぎていく。

最近、お袋が血を吐く頻度が増えた。

怖い未来しか見えない俺の目を抉り出したくなる。

朗らかに笑う母と、無口で無愛想だけど愛だけは人一倍強い父。
たまにそれがセピア色をしているように見えて、俺は怖くてしよ
うがない。

これが崩れる時があるのかもしれない。

その可能性は濃厚であり。時間も少ないという事も、うすうすは
感じている。

4話：決意と俺と鉄拳と愛

そして、12歳の夏。
俺は決意した。

「母さん！！俺、軍学校にはいりたブヘツ!？」

「そこになおれバカ息子ーっ!!！」

そんな感じで俺の決意を母さんに告げた。

即効で鉄拳制裁されたわけだが。

「なんでそんなバカな事言い出した」

夕食時に言ったのがマズかったのか、ぶん殴られてテーブルの上の食べ物か吹き飛んだ。

その処理を終えて、家族会議中だ。

「いやね、軍に入れば錬金術師と懇意になれるだろ？それが目的で軍に入りたいんだ」

狙いは別にもあるが、このお母様、自分が錬金術師だって事をひた隠しにしている。

俺の目の届く所には錬金術のレの字もないのだ。

「馬鹿いつてんじゃない。錬金術なんてなくても私達が強くしてやる、だからそんな物習う必要なんてないんだ」

ゲンドウポーズでキツク話すお袋。

親父は銅像。

「そもそも、錬金術は大衆の為で在れと言われる技術だ。そんな私欲で手を出していいもんじゃないんだよ」

途中から俯き、顔を隠しながらお袋は話す。

だが、だ。俺はその錬金術にちよつとした希望を見出しているのだ。

「まあね。でも軍の狗さんは軍の為に研究してんだ、それから基礎を教わるくらいいいじゃんか」

「馬鹿たれが、そんな外道から習うなんて言語道断。どうしても習いたいなら大きくなって自分で教本を買えるようになってからにしろ」

ふーむ。これは理由を話さないとダメなのか？

ちなみにお袋が言っている教本とは円にすれば50万以上する。

一番安いので50万だ。

でかくなっても買うには相当な年月がいるだろう。

お袋は落とせないか……

「親父ーっ」

「…なんだ」

「頼むー!!」

「ダメだ」

「なんでだよっー!!」

「お前の為だ」

ムツツリしながらも拒絶の意思は固い、か。

でもなー。理由を話すのはちと恥ずかしいんだよな。

「ぬう」

「諦めな、それに軍なんかに入れば以前話した危険はより大きくなる。そんな所に息子を放り込む親がどこにいるって言うんだい」

「でも、俺は錬金術をならいたいんだよ!!」

「もつと大きくなってからにしながら言ってるだろう」

「それじゃ間に合わないからもしれねーだろ!？」

そこでお袋は顔を上げて眉を寄せる。

「なんだい。強くなる以外に目的があるのかい」

「っぐ。あるにはあるんだけど……」

「私的な事でしょう。なんにしても私は許可できないね」

「ぬっぐあ」

これほど強敵だとは……。

どうすりゃ良いんだ、まだ親の脛かじってる身分だから学費はらえねーんだが。

こっそりバイトして貯めるか？

いや、そうかアポートで荒稼ぎ出来るんじゃ。

「まあ、待てイズミ」

「あんた」

「シグルド。理由を話してみる、俺達も頭ごなしに息子の道を閉ざさせたいとは思ってない。だがな、軍つてのは本当に危ない所なんだ。そこに入る理由を聞いてみないと俺達も反対するしかないんだ。だから、話してみる」

「あんたっ!」

「イズミ。少しでいいから落ち着いて聞いてやれ」

「…っ」

なんか、親父が凄くカッコイイ……。でも理由か。マジで恥ずかしいんだが……。

「解ったよ。シグ、話しな。さもなけりやこの話はずっと平行線だよ」

「…むう」

「シグルド」

「はあ。解ったよ親父」

「うむ」

と言う事で赤裸々な俺の決意と言うか狙いというか希望を話すのだった。

「まあ、なんだ。その、つまりあれだよ。そうあれ、錬金術って言うのは等価交換の法則があるだろ？ だからあれが出来るんじゃないかと思っただ。うん。無い知恵絞って考えたんだが、やっぱりあれしか解決策がみつからねーんだよ。うん。そう、そうそう。がんばれ俺！！ って感じで」

グダグダだったか……

「ハッキリしなー！！」

キレたお袋の声に体がビクリと反応する。

うがー！ちくしょう！！ 逆ギレしていつてやるう！！

「だから！！ 母さんの体を治したいんだ！！」

「なっ！？ シ、グ？」

「母さんの体が悪い事ぐらい俺でも理解出来るんだよ！！ ガキの

頃から何回血を吐く所見たと思つてんだ！！ その度にどれだけ俺や親父が心配したか解つてんの！？ 母さん！！ このままじゃ俺の結婚する姿も、俺の子ども見せられないかも知れねー！！ そんな絶対嫌だ！！ 母さんが俺を産むために体を壊したつてんなら俺が直してやる！！ 俺はな！！ 絶対！！ 母さんを死なせねー！！！！ 大衆の為の技術！？ そんなもんいらねーよ！！ 俺は自己中心的で利己的でどんだけ汚く見られても絶対身内を優先する！ 俺は大衆よりも大好きな個人の方が大事だ！！」

ハアハアと息を荒げる俺は周囲が見えてなかった。
言いたい事を言い切つて、やべーぶつちやけ過ぎたかも。とか思つて視線を両親に向けると……

「…つ…つう……つくつう…ううううつ」

お袋号泣してた。

それでも声をあげるのに抵抗があるのか、肌むき出しの腕を噛み締めて声を抑えている。血が出てるから相当な力で噛んでるんだらう。

親父がそつとお袋の顎を捕まえ、自分の腕にお袋の口を移す。
毛むくじゃらで、噛みにくいだろうに、お袋は構わず親父の腕に噛み付いた。

すぐさま血が流れるが、親父は眉一つ動かさず、お袋を優しい目で見つめる。

それがスツと俺に移る。

その目はどこまでも優しげで、でも厳しいそんな厳格な眼差しで。

「お前の考えはわかった」

「あ…うん。まあ、そう言つ、わけ、なんだ…」

いつのまにか立ち上がっていた俺はボスンと椅子に座り、親父を見る。

「正直。イズミが泣いて無かったら俺も泣きたいくらいに嬉しい」

「じゃあ……」

「俺はな、イズミを治す事は出来ない。それがどれだけ悔しく辛く悲しいかお前以上に感じている」

「…だよ、な」

なんせ今でもラブラブなのだこの美女と野獣コンビは。

「その悔しさを息子のお前が晴らしてくれるかもしれない。俺にとつては願ってもない事だ」

「ああ」

「だが、それでも躊躇ってしまう程に、お前が行こうとしている所は危険だ」

親父が顔を歪ませ、心底忌々しそうにつぶやく。

俺はと言えば、それほどの危機があるとは自覚していなかったの
で、目を見張って親父の顔を凝視した。

「遠く離れたら俺達はお前を守ってやれない。近くにいても守れるか
かどうか解らない。それだけの危険地帯だ」

あの馬鹿強い親父が、それほどに警戒する場所、か。

「だから、お前に試練を課す」

俺は眉を寄せる。

「試練？」

「ああ」

「どんな？」

「お前を砂漠に叩き込む、そこで2ヶ月生き延びろ」

「装備は？」

「ナイフ一本と水筒1つ」

死ねと言ってるような物だ。

だが、親父がこれほどの条件をつけると言う事は、

「そんなに、危険なのか……」

「これでもまだ手加減してるくらいだ」

「……そっか」

俺はそれだけ希少価値が高いつて事か？

だが、一体何がだ？

“ありとあらゆる物と契約出来る程度の能力”は誰にも知られていないはず。

……人体練成成功例だからか？

でも、それを禁止するって事は成功例は他にも居るって事だ。

希少価値としては高いのかもしれないが、それほどの危機に瀕する程ではないと思うんだが。

解らんが、とてつもなく危ない所だつて事は解った。
でも行くしかないんだ。

「解った。それを受ける」

「……出発は3日後だ。それまでに準備を整えろ」

一瞬、躊躇したのは親心故だろう。

俺はそれに暖かい物を感じ、万感の想いと共に頷く。

「解った」

俺はすぐさま部屋に戻り、薬草関係の本を読み漁る。ついでに水の確保のしかた、砂漠での正しい衣服の着方など様々な本を頭に詰め込んだ。

そして3日後。

電車を乗り継いで砂漠と街の切れ目に到着した。

俺の服装は厚手の服と更にはローブも纏っている。

腰には30cmほどのナイフと水筒。

これから踏み入れる地獄に少し怖気づくが、背に受ける視線を感じ、決意と共に一歩踏み出す。

振り返る事なく、俺は声を張り上げる。

「行ってくる!!」

「おう」

「絶対死ぬんじゃないよ!!」

信じてくれている親父と心配性なお袋の声を背に手を高々とあげる。

「絶対、母さんを助けてやるかなー!!」
「う!!!」
待ってる大砂漠

後ろで号泣している声が聞こえるが、今は振りむかんど。
だって助けてくれと叫びそうなもの。

幕間：親と言つ事

イズミさんの場合

この前拾つて来た黒猫と駆け回る息子を見て思う。

この瞬間はもしや夢ではないのかと。

あの子が生まれてから今の今まで拭う事のできない懸念。

私はもしかしたら、あの人体練成に失敗し、死んでいるのではないかと。

それで今際の際に己の望む夢を見ているんじゃないかと。

ずっとずっとそれが不安だった。

夫に相談したし。

医者にも見てもらった。

何れも私の不安を解消する事はなかった。

私に現実を教えてくれるのは、息子の温もりと日々増えていく重さだった。

今では大分安定したが、あの子が生まれた当初の私は不安定で、あの子がいないと狂ってしまったかもしれない程に病んでいた。夫に抱きしめられ、少しの安定を見。

医者に薬を処方され、息子を抱きしめていなくても眠れるようになった。

そして安定してきた私の新しい懸念事項は、やはり息子。

私とシグの血の濃さをあらわすような鋭利な目元、黒の髪に黒の目。

母親の私が言うのはなんだが、将来凄い男前になるだろう。

しかし、そんな血を見れる息子だが。

あの子は“人体練成”で作った子供なのだ。今にして思う。

あの時の私は狂っていたと。

そしてより強く思う、よくぞ狂ったと。

狂っていなければあの子は生まれていない。

厳密に言えば、あの時流産した私の子供ではないのだろう。それは錬金術師としての私が保証している。

あの子は私の身籠った子供ではない。

だが、あの子は確かに私とシグの血を分けた息子であると。

あの子が生れ落ちてくれたのは天文学的確立の更に先の確立に他ならない。那由多の果ての果ての、そのまた果て。それくらいの確立だ。

だが、性交による妊娠も、人体練成による産みも、子供を授かると言う奇跡の前では確立などさほど変わらないのではないだろうか。科学者としての私は、あの子を世界で一番の希少価値だと訴える。母親としての私は、あの子を世界で一番愛せる息子だと叫ぶ。

私はあの子を愛する。その生まれなど関係なく。

よくぞ私の息子として生まれてくれたと。

よくぞ私の願いに答えてくれたと。

その対価が内臓の大半であつても惜しくはなかった。

こんなに幸せなのだから。

だが、そんな息子だからこそ、危ない。

他の錬金術師から見ればあの子は恰好の研究材料だろう。

これはシグにも話し謝った。

シグは何も言わず抱きしめてくれた。

「あの子はそれでも俺達の息子だ」そう言ってくれた。

日々大きくなる息子に、頬が落ちそうになるくらいにニヤケる私達は異常に見えていたかもしれないが、私はそれでも構わないほどに愛している。

だからこそ、下衆共の研究材料になんかさせない。

そう決意してから私達は話し合った。

如何にして息子を守るか。

私達を守るという事は前提条件だが、仕事の都合もあり、私達は交代である子の近辺で警護した。

次に10歳頃から私達の持つ武術の全てをあの子に注ぎ込む事にした。

その後は出来るだけ目立たない職種の素晴らしさを説く。あの子は武器が好きだからこれは重要だ。

軍部の者に知人などいないから、そっちの情報は近くにある組織から買う事にした。

そうして、あの子の将来を想像してニヤケ、孫を想像してはニヤケ。嫁を想像しては憤慨して。

脱線しつつ予定を組み上げていった。

それが根元から崩れ去ったのはシグルドが5歳の頃。

いつもの夕食時。

あの子が美味しい美味しいと笑っていて。私もそれをみて幸福を噛み締め、シグも目を細めて幸せそうに無愛想を装っている頃。

あの子が突然無表情になった。

そして弾かれたように天井を見つめ。

腕から血を噴出した。

次には嘔吐を繰り返し、腕を抱きしめて震えだした。

私といえばその時、瞬時に反応できなかった。

頭に出てきた単語は「代償」

体を感じるのは「対価」の支払い。

この幸せの対価は、むす、こ？

幸せを与えてくれる者を奪う事が対価？

顔にかかるあの子の血の温もりが。

鼻につく血独特の異臭が、全てが私のなくした子供を連想させた。

やっぱり夢だったのか？

こんな、こんな酷すぎる夢を見るために私は死んだのか？

一瞬、そう自問した。

次の瞬間、

「シグルドツ！！！！」

シグの泣きそうなほどの叫びを聞いて正気に戻った。

私はすぐさま力いっぱい息子を抱きしめた。

その暖かさに泣きそうになるが、その前に一喝してやった。
世界に対して、一で在り全で在る、全てに対して。私達は宣戦布告した。

この子はやらん、と。

それから1年。

私達はより綿密に護衛を勤めた。

しかしだ。私達の息子はヤンチャすぎる。

行動範囲は広いわ、行動力はあるわ、すぐに友達をつくるわ。

親としては誇らしくて仕方が無い。

流石私達の子供だと、シグと酒を飲みながらニヤケるのはもはや日課になっている。あんたは知らないだろうけど、あの時のシグルドは可愛かった。イズミは知らないだろうが、あの時のシグルドは漢だった。

自分達の護衛時のシグルドの姿を自慢しあつてなけば喧嘩腰にシグルドの良い所を言い合うのは本当に……感無量だ。

いや、そうではなく。

あの子の行動力が強すぎるのだ。

これではフォローしきれない。

それで6歳から武術を教え始めた。

そして発覚した素質は超一級品と言って差し支えない。私のセンスとシグの力、これらがバランス良く受け継がれている。

20を超えた頃には私達では勝てないくらいに強くなっているだろう。

まあ、経験の差で私達が負ける事は想像できないが。

それから6年。

メキメキと力を付けていく息子を見て叫びたくなる。

この子は私の息子なんだ、と。

この子は私と夫の愛の結晶なんだ、と。
それくらい私はこの子が誇らしい。

修練の際に見せる余裕も、ちよつと可笑しな事を口走る所も愛おしくて仕方が無い。

しかし、あの時ばかりは私は冷静ではいらなかった。

シグルドは事もあろうに士官学校に入りたいなどと言い出したのだ。

問答無用で殴り飛ばした。

しかも目的は錬金術。

確かに錬金術は攻撃手段としても優秀だ。だが、ソコには国家錬金術師がいるのだ。

反対しない理由がない。

それに私は恐れている。

シグが錬金術を扱う才を持っていたら……いや、間違いなく持っているはずだ。そしたら、もしかしたら自分の出生に気付くかもしれない。

それだけは嫌だった。

私を恨むかもしれない。私を罵るかもしれない。私を呪うかもしれない。

何せヒントは至る所にある。

私の体の事、地下の練成陣、近所の住人の噂話。

ちよつとした切欠で気付くかもしれない。

私があの子を愛する事にいささかの変化もないが、それでもあの子は傷付くかもしれない。

それと思うだけで私は体が震えて仕方が無い。

だが、息子の考えは私の予想を超えていた。

「母さんの体が悪い事ぐらい俺でも理解出来るんだよ！！ ガキの頃から何回血を吐く所見たと思っただよ！！ その度にどれだけ俺や親父が心配したか解ってんの！？ 母さん！！ このままじゃ俺の結婚する姿も、俺の子供も見せられないかも知れねー！！ そんな絶対嫌だ！！ 母さんが俺を産むために体を壊したっただよなら俺が直してやる！！ 俺はな！！ 絶対！！ 母さんを死なせねー！！ っ！！ 大衆の為の技術！？ そんなもんいらねーよ！！ 俺は自己中心的で利己的でどんだけ汚く見られても絶対身内を優先する！ 俺は大衆よりも大好きな個人の方が大事だ！！」

それは無理なんだと声を張り上げたい。

シグルドの所為で体の調子を崩してる訳じゃないんだ、と叫びたい。

だが、私の口からは嗚咽が漏れるだけだった。

心は歓喜している、幸福感で満ち溢れている、今こそ世界に言うてやりたい。私の息子を見てくれ、こんなに、こんなに立派な男なんだと。私達の最大の誇りなんだと。全世界の人々に聞かせてやりたい。

体は心に満たされる思いで言葉にならず。

心は息子の想いに満たされ、私もおまえの子を見たい、抱きたい、キスしたい。そう叫ぶ。

叫びだしそうな口を封じるために私は腕に噛み付く。

シグがそれを自分の腕に移してくれるのを見て、思い切り噛み付く。

シグも叫びたいのだ。自分の息子への想いを、誇りたいのだ、こ

の子は私達の息子だと。

だが、シグも私も、あの子の選ぶ道の険しさをあの子以上に理解している。

ある組織から渡された軍の裏側は、予想以上。

身の毛が立つ程の黒さを見せていた。人体実験など当たり前、自分達の都合の為なら一家すべてを惨殺するほどの冷酷さ、目的の為に町一つを焼け野原にする狂気の所業。

あんな所に息子を放り込むのは死んでも我慢ならない。

だから、シグの出した試験に口を挟まなかった。

心配で心配で堪らない。

私の雪山での試験も厳しかったが、北壁のお陰で物資には困らなかった。

しかし、この砂漠に中継地点はない。

オアシスも確認されている場所もかなりの距離がある。

クセルクセス遺跡はあるが、あそこに物資を期待するのは無理だろ。

私の試験より遥かに厳しい。

心配だ。

知人に試験管兼護衛を頼んでは居るが、心配で仕方がない。

「絶対、母さんを助けてやるかなー！ー！！ 待ってる大砂漠う！！！！」

これがその第一歩だと信じてやまないあの子。
嬉しくて仕方がない。

そばで肩を抱いてくれるシグに抱きついて、人目も憚らず私は号泣した。

絶対に2ヶ月生き延びろ、私の息子。

5話：砂漠と砂漠と砂漠と誰か

やってきました大砂漠。

いやー砂漠舐めてました！！

始まって一ヶ月ほどは結構余裕だったんよ、けどね、いけどもいけども砂漠だけ。

目に入るのは牛の白骨死体にハゲタカの群れ。
なによりも真っ白な砂砂砂。

気が狂うかと思ったね。

水の確保はサボテンと蒸留でゲットし続けてたんだが、体の前に精神が死にそうになるとは思っても見なかったヨ。

お袋が笑顔で夕飯を持ってきてくれる幻覚をなんと見た事か……
親父が肉切り包丁片手に肉の切れ見をもって来てくれるのを何度見たことか。

肉体は万事無事なのに、精神がこの強烈な熱気と冷気、それに景色にやられ始めた。

そして精神が疲労したら肉体が疲弊していく。

動く事が億劫になり、独り言すら少なくなる。

衝動的にアポートで色々取り出したくなる、水をガブ飲みしたくなる。

腰にぶら下げたナイフと鳥肉にサボテンの皮。それらを全て投げ捨てたくなる事もある。

唐突に裸になりたくなる事なんて日常茶飯事だ。

たまに砂に埋まって眠ってみようかと思ったりもした。

そうすればここには居なくてもいいのだから。

しかし、それじゃあお袋は死んじまう。

俺が死ぬ事〃お袋の死だ。

俺はそう思っている。

俺があの人に練成されたのは、或いはその為なんじゃないかとすら思いだしている。

そんな事をつらつら考えながら歩くこと数日。

俺の目の前には見た事もない大遺跡があった。

確かこれは、

「クセルクセス大遺跡、か」

何年前に滅んだのか忘れたが、国民の全てが一夜にして死に絶えたと言う国。

呪いだなんだと騒がれているが、まあ、そんな非現実的な物はないだろう。

なんせこの世界で唯一ファンタジーの要素を兼ねているのは俺のみなものだから。

「探検しよ」

砂漠にいたら狂いそうだしね。

そうして探索した旧王都。

その風景は惨状と言って差し支えないだろう。

白骨死体なんてデフォルトでどこにでもある、家の中に入れば小さい羽虫が一杯だ。

気持ち悪いったらないな。
とりあえず使えそうな器具を貰いながら進んでいく。

王城を探検する事に決めて、都市の中央に見える宮殿に乗り込んだ。

これは大きな造りの建物ではなかったが、設計には目を見張る物がある。

床の下を流れる水。壁を伝う水。これは恐らく温度調節の為に工夫なんだろうが、一体どれほどの天才によって作られた物なのか想像も出来ない。

その発想が常人には到底出来ない事だ。

そして、玉座の間へと続く一本道。

全盛期であれば白亜の輝きを放っていたと思われる柱、壁、その他もろもろ。

これは見る価値アリの一品だ。

美しさを際立たせ、尚且つ敵の侵入にそなえた美しい廊下。

そこを抜ければ、玉座。

玉座の背後には壮大な壁画があり、欠けてはいるが、何かの陣だと言っのがわかる。

地面にも陣が描かれており、位置的に中途半端に真ん中を逸れているので、なんとも微妙な感じだ。

もっともそんな中で最も気になった物は、天井を見た時に目に入った物だ。

地面に描かれた陣と対極の位置、そこには赤い模様の陣が描かれており、その中心には片刃の軍刀が刺さっている。

刀心は剥き出しで柄がない。

てかあれはサーベルと言うよりも刀だろう。

めちやくちや欲しいんだが。

RPGで言う所のあれって封印じゃね？

と思わなくもなく、ちょっとビビル。

でも、まあ、いいか。

そう適当に流し、屈伸してジャンプの姿勢を取る。

「一番、シグルド・カーティス。いきまー「やめとけ」スっ!？」

貯めていた力を解き放って、声とは反対側へと飛びのく。

すぐさま、腰のナイフを抜き、左手を地面について、姿勢を低く身構える。

「おうおう。いい反応だな」

そう言っつて飄々と現れたのは可笑しな恰好をした人間だった。

なにせ黒いズボンに白いタンクトップ、その上にはファアの付いたジャケットだ。

少なくともこの砂漠においてはイカれていると思っつても仕方がない姿。

「何者だ」

「あーそう言っつのがいいねー。俺も一度名乗りつてのをやっつてみたかっつんだ」

「御託はいらない」

「ノリの悪い野郎だ」

肩を竦める男。

その一挙一動に細心の注意を払う。あんな軽装でここに居られる

わけないのだ、それなのに存在している。その異常、警戒してもし足りないと言う事はないだろう。

「俺の名はグリード！！ この世のありとあらゆる物を求める強欲の権化様だ！！」

これが俺と強欲のグリードとの発対面。

5話：砂漠と砂漠と砂漠と誰か（後書き）

文章量が少ないとの指摘があり、増量しようとしたんですが…失敗しました！！

一回書ききった物を長くするのは難しいですね……

短くするのは得意なんです、長くするのは苦手のようです。
力及ばず申し訳ない。

6話：強欲と俺と敗北と刀

グリードと名乗った男は大きく手を広げ、肉食獣のように目をぎらつかせる。

「七つの大罪？」

「へえ、ガキの癖に良く知ってやがる。流石と言った所か？」

こいつが何をして流石と言ってるのか解らんが、危険な奴つてのは理解した。

雰囲気はチンピラのようなのだが、隙が見当たらない。

拘束するにしても、飛び掛ればそのまま俺が拘束される姿しか想像できない。

それくらいの強者の臭いがする。

「何故止めた」

故に、俺はとりあえず会話をする事にした。
ラブ&ピースって素晴らしいヨネ。

「ま、気になるわな」

「当たり前だ」

「あれは封印つつつかゴミだ」

訳解らん。

あの剣がゴミな分けない。遠目での鑑定だから自信はないが、武器屋でお目にかかれないような名刀だ。

て事は、陣がゴミって事か？

錬金術については少ししか知識がないが、あそこにゴミを入れる

為の陣を引いたって事か？

いや、それならあんな位置には作らないだろ……

「意味が解らん」

「だわな」

「話せ。俺はあまり頭良くないぞ」

「そりゃ知ってるぜ。良く聞かせて貰ったからな」

……そこになおれクソヤンキー……！！！！

天誅してやんよ……！！

「ま、落ち着けや」

「てんめーゴラー……ッ！！ 俺は馬鹿じゃね……！！」

「それも知ってるぜ」

「……………」

んじゃコイツは……

気味が悪いな。

「まあ、んな馬鹿な事いつつ警戒とかねーわ、常にこっち殺す気で狙ってるわと、まあ、合格だろ。精神面は不安だがガキにしては強い方だ。生存に対する意地も見れた、俺は十分だと思っぜ」

あー、なんか話が見えてきましたよ。

つまりあれか、お袋と親父には帰ってから泣きつこう。ありがとうってな。

だが……

「証拠をだせよ、グリードさん。持ってたんだろ」

「カッカッカ。マジであの二人のガキなだけはあるぜ」

そう言って取り出したのは一枚のメモ。

シグルドへ

この手紙を読んでるって事は、まんまと俺の罠にひっかかりやがったな間抜け！！

グリード

正面から飛んでくるナイフを指で挟んで止める、そのまま、側面にいるグリードに投げ返し声をかける。

「ばーか。今ね俺の神経ビンビンなの警戒してるし、裏にかかると思ってたんじゃないよ」

キンツと手の平で受けたとは思えない音を立ててナイフを防ぐグリードに僅かに目を細める。

「生意気な餓鬼だ。あと37個くれーだまくらかす策を貰ってたが、通用しねーか」

……どんだけ畏に嵌めるつもりだったんですか、お母様。

「戦闘者としてもこれを常に維持できりゃ全く問題ねーんだが、そのへんどうだ」

「そいつはまだチト厳しい。はっきりいって今の状態はあれだナチユラルハイ？ 極限状態で神経質になってる感じだから」

「ふーむ、俺様としちゃありだと思いが、あのおつかねえ二人はそれで満足するか微妙だな」

もやは戦闘する気は皆無なのか、ダル気にこっちに進んでくる。

俺ももう意味はないだろうと、最低限の警戒に落とす。

「あー両親については御免なさい。俺に付き合ってくれてありがとう」

「いや。かまわねーぜ、こっちにとつちやお得意様だ、これくらいのサービスはしてやる」

ケケケと笑いながら肩を竦めるのを見て、ため息を漏らす。

あの両親は何やってんすか……。

こんな如何にもな人とつるむなんて。

一応グリードの装備を確認し、俺を傷つけられるような物はないのを確認してからシャコンとナイフをしまい、コメカミを揉み解す。

「ただまあ、こんな化け物も世にはいるんだぜ」

目を開けた先には……

「まだまだ甘いな」

鉛色をした人型の何か。

頭部に鉄でぶん殴られたような衝撃を感じ、グリードの腕を掴み取って投げる。

「おっ。流石といった所か」

ドガンンって言う破砕音を聞きながら、俺の意識は落ちた。

パチパチと木が弾ける音を聞きながら俺は目を覚ました。

「起きたか」

上半身を起こしながら鈍痛のする頭を押さえる。

「てえ〜」

「それは我慢しろ、安い授業料だろーが」

声の方に視線を向ければ、無表情に火を眺めているグリードがいた。

そこで気付いたが、すでに夜になっていた。

「どんくらい気絶してた？」

「10時間って所か、軟弱者が」

「うへえ。否定できないのが辛い」

10時間気絶とか最長なんだが…情けなすぎる。

「あーもしかして失格か？」

「いや、聞いてたラインはとっくに超えてる、合格だ」
「さよか」

とりあえず安心した。

これだけががんばって失格だと親に顔みせらんねーわ。

「ほれ、ご所望の品だ」

そう言って投げ渡されたのは一枚の便箋。

合格だよ、馬鹿息子。

はやく帰ってきな。

それだけが書かれているどこにでもある便箋。
ただまあ、その筆跡は紛うことなくお袋の物で、なんとか、泣き
たくなかった。

「……………やっと、か」

ようやく、一歩踏み出せる。

そんな感じで、ちょっと感動してたんだが。

「お前な、他に聞きたい事ねーのか」

グリさんが空気を読まず訳の解らん事を聞いてきた。
どこか呆れた風に見てくるのに眉を寄せる。

「他になんかあったっけ？」

あーん？　なんか、あー刀の事か。

「お前な…俺の体の事とか気にならねーのか」

「は？　ああ、あの趣味の悪い変身機能の事か」

「変身…悪趣味……」

凄くダメージを受けたようだが、俺に言わせればそうとしか言えないんだが。

でもまあ、確かに気になるっちゃなるな。

「んで、なんであんな変体丸出しの機能手に入れたんっ!？」

ポヒュっとな俺の目の前をグリさんの手が通過した。

ちなみに中途半端に変身しておる。

「死にてー…らしー…な…ー…っ!!!」

「ま、まてっグリさん!!!　俺は変体でも大丈夫な人だっ!!!　偏見でみたりしないヨっ!!!　多分ねっ」

「死ねやコラー…っ!!!」

死闘という名の私刑を経て、俺とグリさんの間には友情が芽生えたんだ。多分ね。

「つまり、グリさんは人造人間だったんだヨ」

「ナ、ナンダッテ…!!!」

「一人で何いってやがる変人が」

疲れたようにボソツとつぶやくグリさんはキャラじゃねーな。もつと横暴な人かと思ってたヨ。だつて強欲だからな。

「でもそれなら俺も変身できんじゃね？」

「……あん？」

「いやね、俺もお袋に人体練成で産んで貰ったからさ、俺も変身できんじゃねーかと思つて」

「……つく。クハハハハハハハッ」

グリさんが大爆笑されております。

しばしお待ちください。

「ケヘツケヘツヘヘヘヘツ」

しばしお待ちください。

「ダハハハハハハハハハッ」

しばしお待ち……。

いつまでわらつとんじゃゴラッ！！

「いや、悪い悪い。カツカ、しかし最高だ、親の心子知らずとはこの事か？」

「ああ？ どう言つ事ですかねー」

「そりゃ自分で確かめな青二才が」

カチンツと来るが我慢だ。

答えを聞いてない。

「で？ 俺って変身出来るのか？」

「あ？ ああ、無理に決まってるんだろ」

「なん…だと……」

まあ、それほどショックでもないんだがね。
むしろ変身したくないお。

「なんだこの能力欲しかったのか坊主」

「いえ、全く」

なんだそりゃーって叫ぶグリさんは結構レアだと俺の感が告げている。全く当てにならない感なんだけどね。

「まあ、実際の話おめえに特殊な能力はねーな。俺等はホムンクルスと呼ばれるが、お前は人間だ、種の存続の為に子をなし、生きる為に知恵を振り絞る当たり前な人間だ。それは化け物の俺が保障してやるよ」

「おつ、そりゃありがたい。お袋も息子が化け物だと知ったら泣くかもしれないね」

「そんな玉かあれが」

「……そう言えば、お袋と親父にはどこで知り合っただ」

「ああ。あれは……」

そこからは聞くも涙、語るも涙のお話でした。

店を開いてたそうなんだが、そこに進入してくる獣と美女。手下を使って排除しようとするも全てを蹴散らしてグリさんの前まで行ってしまった。

そこからはグリさん vs 美女と野獣。

グリさんの隙を突いて殺すは殺す、合計19回も死んだらしい。そこで、両親から提案がありグリさんはそれを飲んで和解。それからは両親のノロケと俺の自慢話を聞いて今に至る、と。

俺は土下座したね。

謝りまくったね。

そしたらグリさんが言うんだ。

「かまわねーよ。俺も楽しかったぜ、俺の慢心と油断も消えた、今やれば5回には減らす自身があるぜ」

ちなみに5回って言うのは死ぬ回数だ。

家の両親はどんだけ化け物なのかと……

んで話が弾んで朝日が差し込んできた来た頃にグリさんが言い出した。

「そっぴやな。あの剣だが」

天井を見ながら切り出した言葉に釣られ、俺も天井にある刀を見る。

「諦めな」

「なんでだよ」

「ありゃーいい剣だが、抜いたら最後。親父殿の残りカスが襲ってくるぜ」

「親父殿の残りカス？」

「ああ。その辺の話はまた今度してやるが、あそこに捨てられてんのは、解りやすく言えば怨霊って奴だ」

「はあ？」

「この国全ての妄執だな、生き物に嫉妬する化け物だ」

「それがあそこに居ると」

「ああ、いつの時代だったか、シンから来た錬金術師がこの付近の地脈を整える為に、あそこに地脈を歪める全てを封じたのが始まりだったか、封じたはいいが、そいつは強大でな確か荒覇吐つつうあの剣を止め具にしてやつとつて話だ」

「アラハバキだとう！？」

シンってなんなのさ！？

中国系じゃないの！？

「おお、知ってんのか？」

「まーね」

しかし、しかしだ。そんな国籍とかいんだ。
目の前にある刀がアラハバキだとしたらだ。
俄然欲しくなった。

ヤトつこいつか！？

とか叫びたくなってきた。

まあ、ネタ的には知ってる人いないだろうし、アラハバキの形状もまったく違うんだが。

「よし。グリさんや」

「あん？」

「俺を死なせないでくれよ」

「はあ？ おめえ何言ってるん……」

「とつっ」

俺は飛んだ、凄くたからかにー！。

そして掴む。

ガシつとな。

ズツ、ズズツ

意外に長い刃に、あらまと思いつつ抜けるのを待つ。

キンツ

やつふー俺のアラハバキちゃん！

契約じゃー

「上手に抜けましたーっ！！」

落下中に叫んだんだが、どうやらグリさんの感に触ったらしい。

「こんのっクソガキがあああああああああっ！！！！」

思ったんだが、抜けてる最中に契約して、帰ってからアポトすれば良かったんじゃないかね。と落下しながら思った。

ああ、うん。ミスったな。

ゾゾゾゾゾツと練成陣から這い出てくる異形のなんかを見て
そう思ったね。

「グリさんがんばろうぜ」

「死ねよクソジャリ！！」

「それ無理！！」

「割にあわねーんだよー！！」

6話：強欲と俺と敗北と刀（後書き）

今更ですが題名はかなり適当です。

あと刀については試験編以降の活躍の場はないです。だつて、カーティスだもの。

7話：俺と強欲と夢と怪物

落下する俺と走りだすグリさん。

グリさんは俺を横抱きに跳躍して、玉座の前に着地、んで出てきた物を二人でみたわけだが。

「……グリさん」

「あん？」

「俺、逃げていいっすか」

「どうやらマジで死にてーらしい」

パツと手を離されて落下した。

姿勢整えて着地したが、本気で逃げ出したい。

「でもさ、あれ怨霊じゃねーよ。実態あるし」

「だから解りやすく言えば怨霊だっつたろうがクソガキ」

グチュンと生理的に受け付けない気持ちの悪い音を立てて、落下してきたのはもうなんて言うのかね。

あれだ、巨神兵の卵みたいな物だ。

アレの黒バージョンで、所々から人の手が生えてる。

卵の表面にはデスマスクがビツシリと張り巡らされており、その表面を目なのか歯なのかよく解らない切れ目が這い回ってる、正直お家に帰りた。怖いんだ。

「逃げるってのはどうでしょう」

「逃げきれると思ってたんなら逃げろ、俺は無理だと思っがね」

「……やっかいな」

「自殺するなら一人で死んでくれ、俺様はまだ死ねねーんだ」

「俺も野郎と死ぬのは御免ですね。お袋も助けてないし、奥さん欲しいし」

「つつたく、貧乏クジ引いたぜ」

「ま、がんばって生き残りましょい」

舌打ちしつつも変身していくグリさん。

俺もマントを破いてアラハバキと思われる刀の刀心に巻きつける。ちなみに刀心とはナカゴの事だ。

つかさ、これって刀って言うよりも太刀じゃね。

俺の身長の3分の2くらいあるしね。ちなみに現在165です

「で、なんか策があんだろうな」

「ああ、任せろ」

「クック、楽しみにしてるぜ」

「おう！！ では発表します、グリさん突撃せよ！！」

「おう！！ ってなんだと!?!」

胸倉つかんでガクガクされてます、なんでだ……

「ちょ、ちょーお待ちをなんでキレてんじゃー」

「てんめー逃げるつもりだろうが!?!」

「そんな、まさか……ボクが逃げるわけないでしょ!?!」

「…あからさまに怪しいぜ」

いや、マジで逃げる気はないんですけどね。

「狙いはなんだ」

「物理攻撃聞くのか試したいんですよね」

「なるほどな」

「その間に俺ちよつとした秘密兵器作つとくんぞ、物理攻撃効くよ
うならそのままガシガシ削つたつてくださいよ」
「ま、俺にはそれがあつてるか」

つて事で、グリさんが突撃していきました。

変身した状態で卵の表面をガリつと引掻いてる。

うん。攻撃通つてるみたいだ。
なんせ

ぐああああ

やら

やめてー

とか

この恨み聞き届けたり

とか

殺さないでー

とか

聞こえてくるんだ。頭壊れそうになるんだけど、その辺どうよ。

死者の分際で生意気すぎるよ。

生者に死者の想いを聞かせようとしてんじゃねーよ、半端物が。

死者は死者らしく灰となれ。

とまあ、そんな事はいいんだ。

秘密兵器つてのは言うまでもなくアラハバキなんだ。

それ以外考えてなかったんだ。ごめんよ。

でもまあ、これだけじゃ芸がないので、ちょっと工夫してみるよ。どれくらいの切れ味なのか、試す事も含めて柱を切り崩してみた。凄いな、豆腐みたいに斬れるんだ。

調子にのって7本くらい斬り崩したが、まあ、もういいや、後で試し切りするから。

とりあえず、柱を加工して即席の槍を数十本作り、全てと契約。

そしてだ、俺の夢であったあれが出来る舞台が整った。

俺は玉座に座り、頬杖を突いて叫ぶ。

「グリさん、王の力と言う物を見せてあげるよ!!」

王でも何でもないけどね、ちょっと試してみたかったんだ。

俺の姿を見たグリさんは青筋をビキビキたててキレてるが、次の瞬間には啞然とした表情で飛びのいた。

俺がやる事を瞬時に見抜くとは、なかなかやる。

「行け、俺の契約者達」
ゲイト・オヴ・ソロン

それはさながら砲撃。

空爆のような苛烈さと、一系乱れぬ脅威の進行。

俺の背後から射出されたのは、先ほど作った槍もどき。

その数、実に80本。

空間に波紋を波立たせ、牙を剥く白亜の槍は相当な恐怖だろう。それを20本ずつ2秒間隔で射出してやった。

第一波は殻を剥ぎ取り、その怨霊の中身を露出させ。

第二波は四散しようとする黒い人型を悉く縫いとめ殺し。

第三波は殻の内にあると思われる大本をその大地に縫いとめ。

第四波はその力の解放を妨害し、あわよくばそのまま止めを刺す。

しかし、卵の殻からでてきたのはもう醜い程の人人人。

動物とかも混じっていると違ってたが、あれらは自然の摂理には抗わないみたいだ。

自然を歪めるのは結局人だけみたいですね。

「止めを刺せ!!!」

グリさんの声を聞きながら俺は第四波と一緒にダツシユ。

大本となつているのは黒い人型。

俺をこの世に連れてきたアレと似たような形状、しかもあれだ、表面に付いてた目モドキがその体に付いてるって言うキモ設定。

まあ、砲撃の時に確認したけど、あれは模様のような物だ。攻撃

手段にならないし、もしかしたら視覚は有してるのかもしれないが、正直無駄設定だろ。

ぶつちやけ八つ当たりだが、恨みを晴らすつもりで斬り殺すヨ。

途中で跳躍し、刀を掲げる。

「超魔、いや、オリエ爆炎覇」

スパンツ

んな音はしないが、聞こえてきそうなくらい見事に刀が通過した。右の肩から左の腰への斜め斬り。自画自賛したいくらいのクリテイカルヒットだ。

ビシヤリと刀から血糊がすべり落ちる音を聞いて、俺は振り返る。

「グリさん！！ どうよ俺！！」

噛んだのはスルーする方向で行こうぜ。

「やれやれ……」

グリさんは肩を竦め、何時の間にも持っていたのか拳ほどの石を投擲して跳躍。

俺の背後にいるアレに命中。

俺は振り向きざまに斬り上げ、バックステップ。

次の瞬間。

空から降ってきたグリさんが人型を押し潰した。

それでもウネウネ動いている生命力にはもう脱帽だ。

「まだまだ詰めが甘いな」

ちよつとカツコイイ事言いながらグリさんは拳を振り上げ、更に殴る。

パキン。

何かが割れる音がして、化け物は砂のような粒子になって消えた。

「お、やつと終わったのかー」

「たつりめーだ。俺様が決めただからな」

「まあ、俺がお膳立てしたんですがね」

「止め刺せるほどの知識が無かった餓鬼が吠えてんじゃねーぞ」

「まあ、それでも俺のおかげですよ」

「ああ、そう言えばお前のおかげだったな」

「ですよねっ！」

「ああ、おかげで、こんな化け物と戦わなきゃならなくなった」
「…ですよね」

……
……
……

「死ねやクソガキがー！ー！！」
「御免蒙るー！！」

逃げる俺と追いかけるグリさん。
まあ、これで終われば結構いい終わり方なんだが……

ピシ、

「あん？」
「おろ？」

ピシピシピシピシッ

「あーおい、お前柱何本切った」
「えーとヒイフウミイヨ……フ本前後」
「馬鹿じゃねーのか」
「ですよね」

だって柱2、3本しか残ってないんだ。
支えられる訳ないよね。

「逃げるー！ー！っ」
「俺ー！！ イン・イー・ジョー・ンズになってるー！！」

「変人が！！ にげろってんだろ！！」
「おうさー！！」

崩れる王城を後にし、俺とグリさんは民家で休む事にした。
疲れた！。

自業自得のような気がしなくてもないが。

7話：俺と強欲と夢と怪物（後書き）

こんちわ。

次の更新は恐らく5日か6日くらいまでありません。

旅行に行かれる方、道中手慰みにも読んでいただければ満足です。運転される場合は飲酒運転・余所見はしないように気つけて下さい。

それでは実家に帰ってきます。

あでゅー

8話：小間使いと俺と失策と帰郷

あの後、俺とグリさんは一緒に行動している。

俺の幻想卿能力をバラしてみたり。

グリさんが作った組織の事を聞いてみたり。

グリさんに頼んで井戸を掘って貰ったり。

グリさんに頼んで食料集めて貰ったり。

グリさんに頼んで調理して貰ったり。

グリさんと一緒に墓荒らしの真似事してみたり。

有意義な共生生活を営んでいる。

グチグチとグリさんが五月蠅い時もあるんだが、煽って使ってた。

割といけるもんだった。

あと、俺の手に入れた太刀だが、あの後ポツキリと折れてしまったヨ。

もうね泣いた。グリさんが俺を気絶させるくらいウザく泣いた。

でもいいんだ、持ってたかえってリサイクルするから。

それに軍に入って苗字がカーティスなら槍を使えヨ。って天命が聞こえてきたんだ。

俺もそうしたいので槍を探すよ。

そんなこんなで残りの修行期間も終わり。

俺とグリさんは町を目指して砂漠横断している最中だ。

俺は来たときと同じで厚手の服にローブ。

替えのマントは刀を包むのに使っているので、もう使えないけど。あと、遺跡で見つけた宝石やらなんやらを、遺跡で見つけた布に包んで腰に下げてる。

これ売れば割と稼げると思うんだよね。

「しかし、後半はグリさんに助けて貰ったし、なんか微妙ですね」

「ああ？　んなもん合格基準に達してただ気にする事ねーだろ」

「まあ、そうなんですがね」

「それに隠し球もあるんだ、あのクソみたいな場所でも生きていけるんだろ」

ケケケと笑いながら言うてくるが、その隠し球とは燃費が悪いのだ。

まあ、言うまでもなく“契約”なんだが。

あの時したプチ英雄王ゴッコは本当燃費が悪い。

射出したといったが、あれは槍を待機させていた空間の更にもう一つ後ろの空間にスペースを作り、そこに火薬をコレでもかと詰め発射したのだ。

たぶん、いまごろタブリスの火気系店舗は壊滅的打撃を受けているんじゃないだろうか…

「お、町が見えてきたみたいだな」

帰って店が潰れてたら新しい補給場所みつけねばと思案していると、グリさんがそう言うてきた。

「ああ、本当だ」

まだ米粒のような距離だが、それでも人の営みを感じ取れる町を見るのは嬉しい。

グリさんが来てから話し相手が出来たので、精神的にも余裕が出来たんだが、それまでは本当に酷かったから。

人にとって一番の毒とは孤独だと身を持って知ったよ。

じよじよに多きなつていく町影に、待ち人を待つかのように佇む二つの影を見つけたのは、それから1時間後の事だった。

目視で顔を確認出来るくらいの位置まで近づくと、俺は予想していた景色に頬が緩み。

しかし、お袋の姿を目に留めて駆け出した。

「かあさん!!」

親父に支えられているお袋の肩を持って、顔を覗きこむ。それを親父はなんとも言えない表情で見ている、俺は顔を青褪めた。

お袋の顔は満ち足りていたが、頬がコケ、目の下の隈も酷い。やせ細った体と、手入れも禄に出来ていないような、ボサボサのドレッドヘア。頬には涙の後が色濃く残っていて、

失うかもしれない恐怖に吐き気がした。

手を口に当てて膝を突きそうになる。

それを見て取ったのか、親父が静かに声をかけてきた。

「眠っているだけだ」

とっさに親父を見上げる。

「心労でな食が細くなっていた、お前を思っ
て魔される事もあった、
一日に何度もここに足を運ぶ事もあった」

……それは

「うあ、ああ、違うんだ。俺はこんな、」

断罪されているように。

「ああ」

俺がお袋の寿命を縮めてしまったかのようで。

「安心しろ」

バツと親父を仰ぐ。

「お前が俺達を助けてくれるんだろう」

ああ、そうだ。

俺はその為に、

俺は頷く事でしか返事を返せない。

「お前は誰の息子だ」

「俺は、シグ・カーティスとイズミ・カーティスの息子だ」

「なら突っ走れ、お前が思い描いた場所に向かえるように」

「あゝあゝ」

涙で声が濁ったが、俺は誓うよ、必ずハッピーエンドにしてやる

ってな。

それから数時間後に宿の一室でお袋は目を覚ました。

第一声は「遅かったね、おかえり」だった。

気丈な在り方にまた涙が出たが、俺は笑って答えた「ただいま」
って。

その数日後、タブリスに戻り、グリさんの経営している“デビルズネスト”って酒屋で宴会をした。

お袋の事が心配だったが、グリさんはこれを予測していたのか、違法研究で作ったって言う栄養剤と医療器具を手配してくれていて大変助かった。しかし、栄養剤の違法研究って何よ。凄く意味深くない？

食も徐々には在るが太くなるだろうとはグリさんの言だが、俺の事でお袋にこれほどの負担をかけてしまうとは全くの予想外だった。

どこまでも強いと言う印象しかない父と母だったけど、母としての弱さも持っているって知って、これから行う事に対してより強固な決意が固まった。

それと、俺の軍学校の入学だが、1年見送ることにした。

理由はお袋の事だ。

疲弊した体を回復させるには1年じゃ足りないだろうけど、両親からの提案で1年になった。本当はせめて2ヶ月前の状態に戻るまで居たかったんだが。

「お前の足を引っ張るような親だと思ったのか、この程度1ヶ月で

復帰できるよ」

なんて言葉をお袋からいただいた、ならばと言う事で俺は1年待つ事にした。

背を押してくれるのはありがたいのだが、お袋が死んじまったら本末転倒だ。

あと何を思ったのか、お袋が自分が錬金術師である事を暴露してくれた。

俺も色々と話す事もあり、その日は砂漠での出来事をお袋に話して聞かせた。

笑ったり、驚いたり、怒ったり、様々な表情を見ていると、生きているんだなと実感する。親父も腕を組んで頷いたり、時に拳骨を貰ったり、そんな些細な事で帰ってきたんだと少しばかり感動してしまった。

あと、お袋の体調が回復したら俺の事についても両親に話そうかと思っている。

まあ、練成される前の事は極力話さない方向で。

とりあえず、今から1年はお袋の元で錬金術について学び、グリさんから敵の情報を貰う事にした。

明るい未来が在る事を信じて。

8話：小間使いと俺と失策と帰郷（後書き）

ただいま帰りました。

実は実家の方で携帯から更新する予定だったんですが、携帯古すぎ
て対応してねーの、久々に笑ったよ。まさか対応してないとは思わ
なかったわ。

シグさんとイズミさんの裏側はまたそのうち。

この話は書き直すかもしれません。

9 話：勉強と暴露と両親と貧乏性

「えーと水素がH、炭素がC。窒素がN、酸素がO、マグネシウムがMg……銀はAg?」

「そうだそれは完璧に覚えておかないと行けない原子だよ」

「あれですね、すいへーりーべーぼくのふね」

「訳の解らない事言っでないで次いくよ」

「あいあいさー」

そんな感じで錬金術について個人指導をつけてるよ。

お袋は家のベッドに寝た状態で俺はその傍らでノートに色々記入してる。

「原子って言うのは結合し合う特性を持ってる、原子はそれ単体では存在し難いからね。例えば水素ならHHでH₂。酸素も同じ単体のみで出来てる原子体。分子だね」

本当基礎ですね。

「HHOで水。OCOで二酸化炭素、これらは分子から出来てる物質だね」

「それとは別に分子を作らない物質もある。例えば銀、塩化ナトリウムが代表的な物だろう」

……小学生レベルの話なんだと思うんだが、完璧忘れてるお。

「ただ結合したものは当然のように分解する事が可能だ。水を分解したならHが4つと酸素が2つ」

……。

「これらは結合する分解する事に置いては基本的な物だ、ただ結合する事によって原子を劣化させる物も多種存在する」

ふむ

「例えば金属と酸であれば酸化する事によって元の金属の強度は保てない」

まあ、どつりだわな。

「分解については様々な方法で行う事が出来る。加熱によるもの電気によるもの。後者の劣化の事は化合と言い、大まかに酸素、硫黄、塩素からなる原子によって行われる」

硫黄でも劣化するのか……。

やべー小学生に馬鹿にされそうだ。

でもまあ、とりあえずだ。

「人の化学式はどんななん？」

「……気になるのかい」

「まあ、母さんの体治さなきゃだしな。人体についてはスペシャリストになるつもりだけど」

「そうか」

お袋は少し目を隠して、そして話し出す。

「人に構成する物は……水・炭素・アンモニア・石灰・リン・塩分・

硝石……だ。ただこれらをただ練成するだけでは人足り得ない。相応の分量を持ってしなければならぬ」

「用法要領を正しく守って行ってください、だな」

「まあ、そうだけだね。人体練成は絶対するんじゃないよ」

「りょーかい」

てか、人って結構安上がりなのね。

「でもさ、魂はどうやって練成するんだろう」

俺にとっては純粹な疑問。

魂にはそんな化学的な証明など一切されていない。

あれは言ってみればシャーマンのような技術がいると思っただ。

「……想いだ」

一言、母さんは噛み締めるように、言った。

「想い？」

「ああ、求める心。愛する想いから成る物だと、私は思っている」

こんな結論、科学者としては失格だけどね。なんて笑いながらお袋はそう言った。

つまり俺はあれだ、お袋の愛で出来ていの、か？

ここに親父が入らないのは残念ではあるが、親父もかなりの愛妻家であるし、愛されているのを理解しているので問題ないな。

「つまり俺は母さんの愛で出来てるのね」

思わず呟いてしまう。

それを聞いたお袋はこれでもかと思われた。

「イズミ、シグルド、飯……」

親父が3つのトレイを持って部屋に入ってきた。

しかし、俺とお袋のやり取りが聞こえていたのか、途中で言葉は切れる。

両親の驚愕を目の当たりにし、お袋の怯えるかのような視線を受け、俺はようやく解った。

砂漠でのグリさんの言葉「親の心子知らずとはこの事か」あのセリフの意味を。

「あー」

ちょっと気まずく、場を取り繕うような声しか出せない。

なんせ、俺はなんとも思っただけから。

でもお袋と親父の反応を見れば一目瞭然。

俺には知られたくない事だったんだろう、そして、知られないようにその手の知識を与えなかったのだろう。

この反応はそう言う事だ。

「ええつとですね……」

「……シグルド、いつから？」

お袋の問いかけ、震える声でのそれはお袋の葛藤の深さを俺に自覚させた。

拒絶を恐れる母、知られたくなかっただろう自分の罪を息子から糾弾されるかもしれない恐怖。

そんな物を感じ取り、俺は吹っ切れた。
もちろん俺は俺に起こった事をそのまま伝えるつもりはない。
そんな事しても意味がない。罪悪感なんて自分の大事な人を傷つ
けるかもしれない可能性に比べれば些細な物だ。
故に俺は言う。

「そつだなー。あれは5、6歳の頃かな？　なんか変な人型が頭の中に出てきてさ、言うんだ『お前から対価を貰う』ってさ、それで聞いてみたわけ、なんでだ？　って」

それを言っつてちよつと後悔した。

お袋はマジで死にそうなくらい青褪めてるし、親父は持つてきた食事取り落として悲惨な事になってる。しかも表情はアレだ、マジで険しい。これから殺人でも行つかのような怒気も感じる。

でもまあ、ウソは最後まで突き通すのが俺だ。

「その答えが『完全な人として生まれたから』だった。完全な人って意味が解らなかつたから、聞いたんだ『産まれた事が罪ってことか？　だから対価を払わなきゃならないのか』って、その答えが『人体練成での完全な人の作成には対価がいる。お前が存在する為の対価にお前の母親だけでは足りない。お前にも支払って貰う』だったわけ」

それで知った。そう告げた両親の反応は……すさまじい。

もはや親父の怒気は殺意に変わっており。

お袋の顔は絶望に染まっている。

「……何を、支払った」

カサカサの声。

この数分で10は老け込んだんじゃないかと思うような、そんなしわがれた声。俯いていて表情は隠れてしまったが、今の顔は見たくないので別にいい。

お袋のそれに少し胸が痛むが、最後まで言ってみようか。

「普通を」

「普通？」

意味が解らなかったのか、お袋は俯いていた顔を上げて俺を見る。
くる。

「そう。例えばグリードはあれだ変体機能があるっしょ？」

「炭素を操る技だね、本人は『最強の盾』と言ってたけど……」

「うん、『普通の人』には出来ない事を対価に貰った」

「……“対価に貰った”？」

まあ、疑問だろう。

対価なのに貰うとはこれ如何に。

「『完全な人』って言うのはなんでも無い。普通の人って事だろ？」

だからアイツは俺から普通を持って行った、傍目には何も変わらない、だけど解れば確実に異端になる。そんな能力を、日常には絶対に居られないそんな“力”を貰った」

「何故そんな……ああ、そう言う……事か」

ガンツとお袋が壁を殴りつける。

頭のいい人は話が早くていい。こちらが何を言っただけでもなく、お袋は自分で自分の納得できる答えを見つけてくる。

「何が“真理”、何が“全であり一、一であり全”、そんな大層な

言葉は要らないじゃないか、私達にとっては“下衆”で十分……」

何が悔しいのか、お袋は涙すら見せて憤る。

俺にその悔しさは、残念ながらわからない。

そして、親父もだったのか、お袋に声をかける。

「イズミ、どう言う事だ？」

覇気のない、親父らしからぬ声だったが、お袋は険しい表情のまま答える。

「この子は“日常”を対価に支払ったんだよ。真理はこの子に地獄を押し付けた、何れ来る錬金術師達の目を更に早める為に。この子は……存在する為に波乱の中に居なければならなくなった、その存在を知らしめ続けなければならなくなった。生きる為に」

「どう言う事だっ!？」

「“異端”は排斥される。どんな世でも……そう言う事だろ？ シグルド」

よく解らんが、まあ、確かにそうとも取れるのか？

異端と言えば異端なんだが、そこまで深く考えなかった。

「まあ、そう言う事かな」

「……………」

ニヘラッと笑う俺に両親はなんとも言えない表情で俺を見つめてくる。

俺はそこまで大事に考えて無いんだが……まあ、納得出来る結論が出たようで俺としてはそれでいいや。

「まあ、俺にはお袋の愛で出来た魂があるから問題ないでしょ」

二ヘラ分を増して笑いかける。

これは俺の本心なので何も痛まない。記憶はあっちにあった物だが、この魂は確かにお袋が作り上げた物だと信じているから。

「全く、あんたは……」

険しい表情から一転、お袋は嬉しそうな泣きそうな、そんな表情になる。

それほど感動する事を言った覚えはないんだが、お袋が喜んでるなら俺はそれで良い。

次いで俺の頭が豪腕に覆われた。

「ブフツ!? お、親父!?!」

「俺の愛情も注入してやる」

どこか無然とした声で頭蓋骨をミシミシと締め上げてくる。

「ちよーータップタップ!! 親父とお袋の愛の結晶をぶち壊す気なんかー!?!」

バシバシと腕を叩いてようやく拘束が解かれる。

振り仰いだ時の親父はなぜか満足気に頷いていて、なんか無償に負けた気がしてくる。

そのまま部屋を出て、代わりに夕飯を持ってくる親父。

少し前の重苦しい雰囲気とは打って変わり、何故かニヤニヤとしているお袋。

お袋がこうなってから今までずっとこの部屋で飯を食ってたが、それまでと同じような、穏やかな調子で夕餉をとった。

俺の能力も全部ばらし、俺の前世以外は全て両親にぶちまけた。少しばかり脚色したが……

ちよつと予定がずれたが、まあ、悪く無い状態じゃないだろうか？

ちなみにそれから両親の過保護っぷりが天元突破した。

あれでもまだ手加減してとか……親って凄いね……

そんな感じで有意義に勉強とウソと秘密ばらしをして、夕餉の後は親父と訓練。

そして深夜になると、俺はデビルズネストを尋ねる。

「グリさんやー情報をくれ」

「有料だ」

「わかってんよ」

敵を知り己を知れば百戦危うからず。

まずは敵を知る事にした。

「何が欲しいんだ」

「んむ、良い質問だ。軍についての情報はあらかた親父に見せて貰ったから、軍に所属する錬金術師と、軍の裏の行動の実行犯」

「たけーぞ」

「おうとも、出世払いでよろしく」

「……クソガキが」

そんな感じだ。

つてもこの情報も高いのなんのって、まあ、ピンキリなんだけだね。

上は4桁から下は1桁とまあ、色々とりあつかってるわ。ちなみに万だから。それでもここで得られる情報は規格外の物が多い。

初めて軍の裏側を知った時は情けない事に吐いたが、今では別段気になるほどでもない。

人体実験？ 一家惨殺？ 町を焼き払う？ 良いじゃないの。崩しやすくと言う事ないよ。どんな世にも因果応報の摂理はあるはずだ。

2000年続くその膿は軽くはない。それほどの間溜まり続けた闇は眩い光を生む物だ。

逆な気がしないでもないが、それはそれ。ベクトルが違うだけだ。

平和が続けば悪魔が、戦乱が続けば英雄が。本当に都合が良いほどに産まれるものだ。

それは人の形をしていたり、武器の形をしていたりと様々だが、俺はそんな存在の一助になりたい。

なんせ今のままでは俺も危ないし、お袋も危ない。

一度この世界を分解して再構築しない事にはどうにもならない。そんな状態だ。

「とりあえず、国家錬金術師については43人分の資料がある」

「全部くれ」

「なら2000万だ」

「たけーよー!!」

「なら諦めろ」

「……………いらない！！ そんなのいらない！！」

ちくしょう！！ 今まで買った情報が一つもないってどうなのよ！？

欲しい情報に限って4桁ってグリさん足元みてんじゃねーの！？

「軍の裏情報だが、こいつは3400万だ」

「……………いらないっ」

出世払い出来るわけないだろ！？

なんだよ合計5400万って、俺にしてみれば一生稼いでもはらえねーよ！！

「なら帰れ、俺はこれから忙しいんだ」

そんな事を言いつつ両脇に侍らせている女性の胸を鷲掴む。

こいつを殺したいと思った事はこれが始めてではない、ここに遊びに来る度にこれなんだ。いつも殺してやりたくなってくるよ。

俺もさ、はじめは混ぜてくれって突撃したんだ。

そしてたらね。

親父殿が降臨したんだ。

うん。ボッコボコにされたよ。

お袋にも「へー、面白い事したねー」ってにこやかに笑っててね。ははは、思い出したくないよ。

それからと言うもの、俺はここに来る度にこの光景を見せ付けられ、そして負け犬の如くすすすこと帰るしかないんだ。

くんつおーっ！！

俺も、いつか彼女を自慢しにきてやるかな！！

「ちくしょーっ！グリさんの！！ おっばけやしきーっ！！」

俺は走る、メロスの如く。

これは逃げじゃないんだ。

明日への逃避行なんだ。

「相変わらず変人だなあの餓鬼は」

そんな言葉を背に受けながら俺の一日の大半は終わっていく。

9 話：勉強と暴露と両親と貧乏性（後書き）

化学式の部分はかなりうる覚えな知識で書きました。

基礎の基礎だけど、あつてるか微妙に解らんです。

突っ込んだ化学式は勉強しなおさないとはいけませんw ごめん
よ！！！！！

10話：グリさんと俺とお袋と親父

朝・昼はお袋から錬金術を。

夕方は親父から武術を。

夜はグリードから嫉妬マスクを。

それぞれ効率よく貰い続け、そろそろ一年が経つ。

俺は13歳になった。

その年の誕生パーティーは家で言い、近所の人を招いた。

以前懇意にしていたとある店の店主も誘ってみた。

なんか窃盗騒ぎがあつて黒字を維持できなくて潰れたらしい、いまではプーになってるからちよつとした良心から誘ってみたんだ。咽び泣いてよろこんでたよ。

ちなみにそのパーティーにはグリさん他多数の部下も出席してきた、他の出席者をビビらせていた。

報告するのも微妙なことなんだが、俺の使い魔のニャンコはなんと出産していた。

あの子とは繋がり薄く、精々声を聞けるのと位置がおぼろげに解る程度なので、全く知らなかった。

お袋は知っていたらしく子猫を3匹だいて蕩けている。

これについてのニャンコのコメントは、こうだ。

『母と言うのも悪くない』

このセリフを聞いてからと言うもの、ニャンコに逆らえない自分がいるんだが、俺にとって母と言う単語はなにか強制力を働かせる何かがあるのかもしれない……。

ちなみにニャンコの旦那はすでにお亡くなりらしい。

コレについてのニャンコのコメントは……

『弱ければ死ぬのが自然の摂理よ。悔いなどなかるう』

だった。
コメントに困ったヨ。

そして、来週に入学を控えた今、俺と両親はデビルズネストにて『旅立ち会』なる事をしている。
名前は『お別れ会』なんてもっての他だと言うお母様の言で変更になった。

ともあれだ、現在は地下にて、カーティス一家とグリード一味で宴会中だ。

回りを見れば、明らかに人では無い奴等が10人ほどと目つきの悪いゴロツキばかり。

しかしながら1年と言う歳月は彼等を普通の人だと理解するには十分で、同時にこいつらは血の臭いが強すぎる事も理解させられる。情報収集の為に、勢力争いの為に、たくさんの人が居なくなつてまた増える。

一年で顔見知りが減つたり増えたり増減が激しい場所だった。さすがにここに一般人をいれるのは止めておいた。

「シグちゃん!! お酒はいらなかな?」

これはグリー一味の女の子だ。

当然のようにこの子もまともな経歴をもっているとはいいい難い。

まあ、今は関係なく、胸を腕に押し付けられてちよつと酒を貰いそうになるが、正面で微笑んでいるお袋が怖すぎて引きつった笑いしか出てこない。

「シグ? 解ってるだろうね」

ニコニコ笑って言われても、恐怖しか湧いてこないぜ……

「もちろん!! 酒は二十歳から!!」

「いや、18からだろう?」

「そうでした! イエス・ママ!!」

このやりとりもお袋が歩けるくらい回復してからは毎日のように交わしている。

夜のデビルズネスト訪問にお袋が付き添うようになったからだ。

おかげで店員の胸を凝視するのも、クビレの良さをグリさんと問答するのも、鎖骨の素晴らしさを親父と語るのも、全て命がけになった。

そのストッパーがいるからこそ店員の女の子達も俺をからかってくるのだが、マジで簡便してください。

「ともあれだ、シグルドも来週から士官学校か……」

どこか気の抜けたようなお袋の物言いに少し良心が痛む。

だけど、俺はあえて笑って答えた。

「うん、試験には合格してるから後は手続きだけだ。寮生活になるだろうけど、手紙は書くから安心してくれよ」

それに苦笑いを返される。

「心配はするよ、それが親って物だからね」

「…ぬ」

どこか寂しげな声色で言われ、なんといいのか困惑してし

まう。

お袋は行ってもらいたくないのだ。それは解っている。しかし、お袋の臓器の損傷を補う為には、軍に入る事は必須だ。なんせあそこは人体実験すら容認されている。人体の研究をするのにあそこほど適した場所はない。まあ、これは秘密だが。

「しかしまあ、あんたを信じてるよ」

それはちよつと痛い言葉だったが、うれしい。

「なんせ私とシグの全てを詰め込んだからね。負ける事なんて許さないよ」

その通りである。

お袋の錬金術師としての専行は“一であり全、全であり一”その追求であった。

それは母の言う所の“真理”を専行していると言う事である。お袋はその全ての知識をくれた。正直理解し難い事もかなり存在し、俺がつけたノートにのみ、暗号としてその研究の全てが書き記されている。折りを見て勉強したいと思う…理解出来るかどうかは未定だが。

もつとも母自身はこの真理の追究と言うのを半ば捨てていたらしいのだが、俺が5歳の頃に起こった異常を見て、俺の目を盗んで研究を再開したらしい。

今は俺が引き継ぐ形でお袋はすでに研究を止めている。と言うよりも止めさせた。

なんせ内臓を取られた原因は真理という奴なのだ。。
そんな危険な物に関わらせるのは心臓に悪かった。

親父の全てと言うのはまあ、技術だった。

あの人の対術はマジでパネェっす。

剛の人かと思えば柔術を使うし、柔かと思えば剛を使うし、本気でその身体能力には脱帽だ。

そして俺は、その全てを詰め込まれた。

まだまだ未熟な部分が目立つが、そんじょそこらの軍人には負けない自負がある。

「負けないさー。俺が負ける時は死ぬ時だけど、俺は複上死するって決めてるんだ、負けられん!？」

ヒュンと耳元を何かが通り過ぎ、後ろに居た誰かに当たったみたいだ。

ガチャーンやら、いてー、あねさーん。
て声が聞こえる。

まあ、解るだろうが、お母様の所為だ。

「この馬鹿息子は……この子にあんな言葉教えたのは誰だい？」

頭痛を堪えるように額を押さえ、次の瞬間にはニッコリと笑って辺りを見渡していた。

ホラーのような恐ろしさがある。

ザザザとお袋から皆が距離を取り、震えてブツブツと何かを呟いている者もいる。

まあ、気持ちにはわからないでもないが……。

「言っとくが俺の店を潰すのは一回だけで十分だからな」

ニヤケたと言うか、なんとも表現し難い表情で歩いてきたのはグ

リード。

この店の店主だった。

その傍らには親父も居て、その手には何かめっちゃ分厚い封筒をもっている。

大変興味をそそられるが、がまんだ。

「あんたか、家の息子にアホな言葉を教えたのは……」

「まあ、年頃の餓鬼だ、俺が教えなくてもどこからでも知ってくるもんだ」

まあ、俺は産まれる前から知ってたわけだが……

「そうかも知れないけどね」

グリさんはお袋の睨みを受け流しながら、カウンターで酒瓶とグラスを受け取り、俺の隣に座った。

親父も微妙に笑いながらお袋の隣に。

「まあ、その話は置いてだ。今あんたの旦那にこの国の設立からの歴史を余す事なく渡した」

グリさんはグラスで親父の封筒を指し示しニヤリと笑う。

「正直、その情報は値段にすれば0だ」

……まあ、歴史書でも調べれば大半は解るからそうだろうけど。

グリさんがこの時に渡すという事はなんか特典でもあるんだろう。

しかし、うちの両親はそろって顔がこわばっている。

「……それほどかい」

「ああ、そいつを知るイコール、死だ、売った側も死ぬ」

「……は？」

この間抜け声は俺だが、なんで歴史を知るだけで死ぬんだ。

「この馬鹿はほつといてだ。そいつには俺の知る全てが載ってる、裏も表もその意味も」

俺の頭をグシャグシャと掻き混ぜながら、グリさんは言葉を続ける。

「受け取るなら対価を貰う」

「ゼーロじゃないんすかー」

グルングルン頭を掻き混ぜられ、呂律が可笑しいが、まあ、いいだろう。

「アホ。こいつを知ろうとする奴なんざ居ないから0なんだよ。知ろうとする奴等から見れば金額はつけられねー裏情報だ」

「はあ？ 知ろうとする奴等って誰よ」

「第一は今日の前にいんだろーが」

と言われ目をお袋達に向ければ、目を閉じて熟考している。

まあ、そつだよな。

今封筒もってるの親父だものね。

「あとは国家転覆を狙うアホか、軍の裏の諜報部、あとは俺の兄弟共か」

「……それって」

眩き、俺の頭から手が離れる。

頭から離れ、肩に回された腕は、少しばかり俺の恐怖をあおった。

「おう。超特大の国家機密って奴だな」

ブルつと体が震える。

次いで親父の持つ封筒に目が移る。

「そいつはこの国を知るには打ってつけの情報だ。それを持つてる事が誰かに知らればまあ、良くて半日で死ぬだろうな」

良くて半日ってどんだけだよ…。

「で、どうする?」

ボウと親父の封筒を見ていたが、グリさんの促す声に俺も両親を見る。

「……何が欲しい」

お袋ではなく、親父の声だった。

親父は多分すでに買う事を決めてたんだろう。

「俺が望むのは完璧な不死だ。それをくれ」

「無理だね」

お袋が即答した。

ついでに俺も心のなかで反射的に答えてた。

「だな、普通は無理だ。だが、あんたは扉を開けてる」
「…っ」

お袋が嫌そうに顔を歪め、親父もキレそうな感じの雰囲気を出している。

何コレ？ いきなりしゅらーばですか？

「扉を開けてるって事は真理も見たはずだ」

「確かに見た、見たけど……無理だ。完璧な不死などなかった」

「それは対価が足りねーんだ」

「ふざけるなっ！！！」

親父の怒号。

ついでにパンチでグリさんの頭が吹き飛びました。

ははははは。笑える。

「っっっっ」

とか言いつつ、グリさんから頭が生えてくる。

俺はこれを何回か見てるが、見るたびにアホな生物だと再認識してる。

ぶっちゃけトカゲとそんなに変わらないんじゃないかと思ってんだがどうだろう。

「まあ、まあダンナ」

回りの喧騒がやみ、皆がこっちを注視する中、グリさんは変わらず返事を返す。

まあ、首が痛いのかゴキゴキしてるが。

「なにも対価を払って知れと言ってるわけじゃねー」

「どう言う事だい？」

「あんたが知った“真理”はコイツが知ってる。そうだな？」

ポンポンと頭を叩かれるわけだが、これでお袋がキレた。

パンツと両手を合わせ、机に手をつけ、そこから金属の刃が延びる。

それがグリさんの肩を切り飛ばし、俺の頭の上に腕が落ちてくる。ぶつちやけ俺のとなりで血がドバドバ出てて凄く臭いんだ。しかも服が汚れるしさ。どうしてくれんのよ。

「シングルドには開けさせない」

ドスの効いたお袋の声。

無言の重圧を放つ親父。

こわすぎる……しかし、グリさんはそれも受け流して、腕を生やす。やっぱトカゲにしかみえない。

「落ち着け、俺は扉を開かせるなんて言ってるねーだろ。ったく、俺1年で何回死んだんだ？ そろそろやばくねーか？」

ぶつぶつ言いながら愚痴るグリさんと、眉を寄せて睨みつける両親。

ちなみ俺はこの間微動だにしていない。

コーラにね、血が入るのを防いでるんだ。

なんせこの人達の“オハナシ”っていつもこうなんだ。

「どう言う事だ」

「こいつが今から行く場所ってのは、賢者の石がある」

「なんだって!？」

お袋が驚愕してるが、俺もそこそこ驚いた。
賢者の石って言うのは錬金術師にとつては神器に等しいから。
まあ、効果はブーストとそんなに変わらないだろうと予想してる
が、どうだろ？

「石の生成方法はそいつに書いてあるが、陣と材料さえ集まりやま
あ、割と簡単に作れる」

指し示すのは封筒。

お袋の手が震えるのが見て取れる。

「ただまあ、外道の所業だ。そこで、賢者の石をかつぱらって来い」

また無理難題を。

この人の脳ミソ吹き飛びすぎて残ってないんじゃないだろうか。

ゴンッ！！

「痛てえええ！？」

「お前、俺に対してふざけた事思わなかったか？」

「え？」

何この人、あれか乙女の歳なみの感を持つてるのか？
でもまあ……

「……………今更じゃね？」

「「こんがきゃー」」

どこか疲れたように呟かれる。

そんなやり取りをしていると、お袋が声をあげた。

「賢者の石を取ってくるってのは私達に対しての対価でいいのかい？」

「いや、こいつにやって貰う」

ポンポンと頭の腕で手が飛び跳ねてるので、こいつってのは俺の事だろう。

マジ嫌なんだけど。

「こいつには便利な能力があるからな、一度障れば後は簡単だ」

あ。

そう言えばそうか、うつかりほんと忘れておった。

「まあ、それは対価の半分だが」

「あれは人の目に晒していい“力”じゃないよ」

「確かに化物扱いされるだろうが、大した事じゃなねー。ようはバシなきゃいいだけだからな」

まあ、そうなんですが。

「後半分はさつき言った通り“完璧な不死”をくれ」

「だから無理だと言ってるだろう」

「いやいや、出来るはずだ。賢者の石、魂の練成、人体の練成。これだけ揃えば完璧な不死も出来ねえ事じゃねーよ」

確かに。。。禁忌のオンパレードだしな。

「つまり、俺が言いてえのは、真理の知識で研究し“完璧な不死”

の探求を、それを完璧にする為に“賢者の石”をつて事だ。賢者の石に関してはそれ以外に使用して貰っても構わねーぜ。期限は俺が消えるまでだ」

「……………」

お袋はだんまり、親父は腕を組んで傍観姿勢。

てかコレはもしか俺が答えなきやダメなんじゃなかるうか。

まあ、それなら答えはいつも一つ。

「俺は別にいいぞ、母さんの体治す序でにグリさんの体も改造してあげても」

「「シグルド!!」」

お袋とグリさんの叫びが重なった。

お袋は怒髪天を付くって感じの怒声。グリさんはお前は俺の期待通りに動いてくれるぜ!!って感じの歓声で。

「いや、賢者の石があるんなら多分狙うと思うしさー」

マジで、絶対狙う自信がある。

「あんたは……………」

疲れたように手を額に当てるお袋を見て、しくじったか? と思っただが、顔は呆れているが口元は僅かに笑っていたのでモーマンタイだろう。

親父は……………」

「がんばれ」

身を乗り出して俺の頭をガシガシ撫でてくれた。

その後はお袋も呆れたように「がんばんな」と頭を叩いて飲みに行き、グリさんはガハハと馬鹿笑いしながら浴びるように酒を飲んだ。

来週からは軍学校の寮生活だ。

多分女の子成分が著しく低下すると思うので今のうちにはっちゃけとこつ。

「ジュディー……ちや……ん」

「躰が足りなかったみたいだね……」

パンツ、ドゴーン、てんめー俺の店が！！、違っんだお袋今の内に発散させとかないと…、パンツ、ベベター、アッ……！！
そんな感じで俺のタブリスでの最後の大騒ぎが終わった。

10話：グリさんと俺とお袋と親父（後書き）

読み返していると誤字脱字が結構あったので、それをメモって更新
おくれました。

まだ完璧に見直せてないので、ちょっと更新が遅れがちになるかも。

幕間：シグさんの場合

今頃は中央の軍学校に俺の息子がいる。

タブリスの駅で見送りをして何日たったか、1年か2年か……。肉屋のカウンターでボーっとしているのも慣れた物だ。

当初予想していたイズミの精神的な負担も仔猫の存在によっていくらかは緩和されている。

そう言えばニヤンコはシグルドに付いて行ったが、軍学校の寮は動物の持ち込みは良かったのか確認していない。

まあ、今更か。

しかし、日が過ぎるのは早い。

シグルドも恐らく15になっているはずだ、俺も歳をとった物だな、しかし誕生日くらいは帰ってきてても良いと思うんだが。

そう思い、カレンダーを確認し愕然とした。

目を擦った。

俺はボケ始めたのかと頭を殴りつけた。

いやいや、そんなはずはと年代を確認した。

まだ3日しかたっていない……だと？

店の扉が開かれ、俺は呆然とした状態から復帰する。

客が何か言ってるが、今はそれどころじゃない。息子の居ない日々がこれほど停滞する物だとは思わなかった。

確かに俺の息子はヤンチャで妙な存在感のある子ではあったが、俺にこれほどの影響力があるとは思わなかった。

「まだ3日か」

思わず声に出してしまったが、それも已む無し。
想定外だ。

イズミを支えるつもりでいたのに、これでは俺の方が先にまいり
そうだ。

砂漠の時は俺もしつかりしていたはずなんだが……
いや、あの時は異常に消耗していくイズミがそばにいたからか。
今回はイズミもそれほど負担になっていないように感じる。

前などシグルドの姿が見えなくなった瞬間からすでに顔色がおか
しくなっていたいな。

その後の症状も酷い物だった。

食事を食べても吐いてしまっ、眠る事もなかなか出来ず、一度寝
付けてもすぐに飛び起きる。体力は回復せず、寝不足が酷くなる。

そのくせ寝ると飛び起きる。

精神的に弱くなる事は予想していたが、あれは想定以上だった。

それでも息子を恨まなかったのはシグルドの真剣さを知っていた
からか、それとも俺がこの状態を招いたのだと、後悔していたから
か。

しかし、今回は俺がマズイな……

これはどこかで切り替えないとズルズルと行きそうな気がする。

「うーむ」

「アンタ」バシンッ

腕を組み、熟考していたのが、俺の思考は背中への張り手で終わ

った。

首だけ後ろに向けると、久方ぶりのエプロンを着たイズミがいた。

「イズミ」

「何お客さんほっぽって黄昏てるの」

「いやな、シグルドが行ってからまだ3日なのかと驚いていた」

「そうだねえ。私もいやに日々が遅く感じるよ」

「それだけ俺達にとっての全てだったと言う事か」

「あはは。確かに、あの子が生まれてからは私達の全てはあの子が中心だったね」

「ああ」

二人して黙ってしまふ。

シグルドの居ない生活と言うのは本当に色が抜け落ちたかのよう
に彩りに欠け。

ミルクの入っていないスープのように味気ない。

たったの3日を数年だと思ってしまうほど。

「あ、あのーすみません」

沈みかけた雰囲気の中、おずおずと声をかけてくる客に目を向け
る。

「なんだ？」

「ツヒ……あ、いや、あのバイトに雇って下さい……！」

ガバツと頭を下げる青年。

俺はイズミに目を向ける。

イズミは「ふーむ」と顎に手を添えなにやら唸っている。

俺としてはどっちでもいいんだが……

「とりあえず面接だね。アンタ、奥の休憩部屋使っよ」

「ああ、イズミに任せる」

「あいよ。着いてきな」

「ういっす」

奥に消えて行く二人を見送り、俺は店内を見渡す。

ほんの3日前まではここに居るのは俺かイズミかのどちらかできなかった。

俺とイズミが同時に店にいるのはシグルドが店の手伝いをしてい
る時だけだ。

もう約10年も続く習慣だった。

辺に懐かしく思ってしまうのは俺が打たれ弱いからなのかもしれ
んが……

あの頃はシグルドのそばに俺かイズミのどちらかが必ずいた。

バレないように、また気にしないように見てきたつもりだったが、
あの子は早い段階で気付いていたようだ。

俺達に「止めてくれ」などと言う事は一度もなかったが、家での
反応や、日常での些細な行動を見れば一目瞭然だった。

俺達のこの行動もシグルドが自分の事を知る切欠になっていたの
かもしれないが、それはもう終わった事だ、暴露された事実は虫唾
が走るような物だったが。

もつとも、あれが全てでないのは解る。

イズミは錬金術に対しての、また『真理』とやらに対しての知識
が豊富だからこそあの説明を全て信じたのかもしれないが、俺には
なんとなくシグルドが嘘を交えていると感じた。

あいつはある種の嘘を付く時必要以上に笑う。
それは煙に巻く意図ではなく、相手を不安にさせない為だ。

単純にはめたい時につく嘘は！が多く。
何かを隠す為の嘘では何故か眼鏡を持ち上げる仕草をする。

他にも様々な嘘を発見する癖があるのだが、まあ今は置いてこつ。

あの説明でどこが嘘なのかは俺には判断しきれない。

実際に何やら契約できる能力とやらを使っていたからな、正直錬
金術やシグルド命名変態機能と比べればなんて事はないだろうと思
ったものだが。

ともあれ、シグルドが嘘を付いてまで隠し通そうとした何かがあ
る。

俺はそれを暴く気は全くないが、親に対して気を使うなどという
やりたい。

俺の息子はシグルド只一人、世界で一番誇らしい息子だ。
全て話せとは言わないが、重要な事での虚偽はしてもらいたくな
いものだ。

「シグー、この子雇う事にしたよ」

聞こえてくる声に、ハッとする。

外を見れば暗くなり始め、面接を始めてから1時間ほど経過して
いる事がわかった。

遅くなったり早くなったり、今日は忙しい日だ。

「そうか」

「ほら、挨拶だよ」

「はいっす。自分はメイスンといいます、明日からよろしくお願ひします」

「シグダ」

頭を下げてくるメイスンに名前を告げる。

まあ、どこか腑抜けていた所だ、バイトが入るのは気持ちを入れ替えるのにちょうど良い機会だろう。

「この子はシグルドが良く行つてたオスマンさんの店の子だよ」

「あそこの…」

確か、火薬やら灯油やら色々扱っていたか。

先々月倒産してエライ事になつていたが……

「ああ、明日から来てもらう事になつたからね」

「解つた、頼むぞ」

「了解つす」

「今日の所は何もする事がないからね、エプロンやらなんやら準備しとくから明日の5時に来るんだよ」

「ういっす。それじゃ今日は帰ります」

「はいよ。また明日」

駆けていく姿を目で追ひ、見えなくなった所で店を閉める事にした。

イズミと一緒に帰宅したが、やはり一人欠けた食卓はどこか寒々しさがある。

が、俺達がこれではシグルドも困るだろう。

明日からは心機一転、店にも自分にも気を配る事にしよう。思えば夫婦で切り盛りするのは本当に久しぶりだ。

そう思うと、俄然明日が楽しみになってきた。

「イズミ」

「ん？」

「明日からは腑抜けた事にならんようにしよつ」

「当たり前だよ」

「うむ」

明日からは本当にかんばれそつだ。

幕間：シグさんの場合（後書き）

リアルが笑える状況になってきたので小説の事を2日ほど忘れて
ました。

ごめんなさい。

11話：俺と髭と演説と不幸

「ふんふんふん、ふんふんふんふん」

とまあ、良く解らない鼻歌を歌っているのは俺だ。

やっとの思いでやってきました土官学校！！

作りも立派で流石セントラルと慄いたよ。

だってね敷地だけでも小さな町並ってどう言う事なの？ 厳密に言えば全然違うんだろうけどさ。

演習上がいくつもある上に、セントラル郊外の一部はまるまる訓練場になってんだぜ。

流石に規模が凄いよ土官学校。

ともあれだ、寮に入ってから5日たった今、これから入学式が執り行われる。

しかもだ、驚く事に俺は主席合格だった。

出初めからミスったヨ。

先週貰った資料をみてからこの地面に立つだけでもビビってるんだ。

そんな中でより目立つ事をやらかしてしまうとはマジでヤバイ。

もうね軍って聞くだけで体が警戒してしまっくらいなんだよ？

そんな時に主席合格だと！？ しかも演説！？ これは何かのフラグを立ててしまったかもしれんと思っても仕方あるまい。

「はあ」

とりあえず、鼻歌を止めてモノをしまいジッパーをあげる。

ここまで来たらもうしょうがないなしな。

腹くくって堂々とするしかない。

「うっし、やるしかねーべ。俺が選んだ道だ」

声に出すとちよつとばかり勇気付けられた。

やはりいいね。言葉とはリリンの作った最高の文化だよ。

と、少し感動してたんだが……

“うむ。若者はそうでなくてはな”

「なん……だと？」

どこからか聞こえる誰かの声。

ちよつとシブイ感じで格好良いな。

俺はトイレの中を見渡し、叫ぶ。

「だ、誰さん！？ 花子さん？」

“花子か。ふむシン方面のお嬢さんに知り合いが？”

「いいいいえっ！！ てか誰なのさ！？」

“私はここだ、ここに居るっ”

「どこだ？ どこにいるんだー！！！」

とまあ、アホなやりとりをしてたんだが、声の出所なんぞ簡単に解る。

大便してらっしやる方だ。

誰か知らんが愉快的人なんだろう。

ジャージャーっつと流れる音とカチャカチャとベルトを締める音が響き扉が開く。

「やあ」

「あ、ども」

出てきたのは何処にも居そうに無い人物。

眼帯に髭はシブイと思うが、顔の横に上げられた手とニコヤかな表情がそのシブさを覆い隠してる。

しかもあまりにも自然だったから会釈してしまったよ。

悔れん。

「ふむ。君の事は聞いているよ」

「へ？」

「主席合格な上ほぼ完璧な結果だったらしいね」

……え。

それって凄くまずくないかい。

「そうなんですか？」

「私はそう聞いているが」

「ふーむ」

俺は唸る。

なんせ目立ってるって事だからな。お袋の状態考えても俺って目立つべきじゃないのに、どうするか。

「どうしたのかね？」

「あ、いえ。俺あんま目立ちたくないの、どうしようかなくて」

「ほっ」

父。さも興味引かれました、って感じでマジマジと見てくる眼帯髭親

ちよつとミスったかもしれんが、まあ、大丈夫だろう。

ようはあれだ軍の上の方に俺の名前が行かないようにすれば良い話だしな。

これからは極力セーブしてやるべきか。
卒業後は確か少尉からスタートだったはずだから、ちまちまとや
つてればそれほど注目も集めないだろう。

「なぜかね？」

「え？ 何がですか？」

「目立ちたくないなどと、それは出世したくないと言つのと同意だ
と思うが、君は出世はしたくないのかね？」

「あー、そう言う訳ではないんですけどね」

あんま人にそれも軍属の人に言う事じゃないからな。
誤魔化すべきなんだろうけど。

「……もしやスパイではないだろうね」

「へ！？」

あまりにも飛んだ発想にビックリした。

いやいや、ありえねーだろ。この会話からスパイ疑惑とか！

「どうなのだね」

「いやいや、違いますよ！！」

「ほう」

「いや、本当に違いますよ！！」

「怪しいな」

「うっ」

苛烈な目で見られちよつと怯んだ。

だってね、眼帯で髭でシブイ親父なんだ、威圧感が凄いぜ？

しかもあれだ、隙が全く無い、多分教師かなんかだと思っただが、
こんなL.V.高い人が教師してるとか軍の錬度おかしいんじゃない？

1年で結構強くなった気がしてたのに勝てる気が全くしないとか
なんなのよ。理不尽すぎるよ。

「身の潔白を証明したいのならそれ相応の話を聞かせて貰おうか」

「ちよ、まっ」

うわ、俺なんかした？

なんで入学した瞬間から目つけられてんの？

「どうした？ 本当にスパイなのか？」

「いや！ ちやいますよ！」

「ならば話したまえ、何故目立ちたくないのか」

このおっさんマジで面倒臭いんですが。

嫌なのに捕まったわ本当。

「あーそのオフレコなら」

「構わんよ」

「あと、軍を否定するつもりは無くても、その含む所もないのを前提
に聞いてくれますか？」

「ふむ。努力しよう」

ジッと見られ、目もそらさないその人の言葉を聴き、俺はどうや
って煙に巻くか考える。

正直言って、なんで初めからこんな運最低なんだと思いつつ、本
当渋々話す。

「まあ、とある目標がありました」

「ほっ」

「んでまあ、軍に所属する事はその目標に一番近いので、その…利

用するつもりで士官学校に入ったんすよね」

「はっはっは。軍を利用とは中々言ってくれ」

「あーでも別に軍の妨害とか職務の放棄とかは考えてませんから」

「つまり軍の職務の内に君の求める何かがあると言う事か？」

「……このおっさんちよつと危なくないか。」

あまり多くの事を言わない方がよさそうだ。

言葉をだせば出すほど此方の事を見透かされそうな気がする。

「まあ、そんな所ですかね」

「……………」

「だからスパイとかは、本当濡れ衣ですよ」

「……………」

「……以上ですけど」

「……………」

おっさんは俺を睨みつけてくる。

俺は片目しかない目をジツと見る。

10秒か20秒か、俺達は睨み合い、そして唐突に終わった。

「はっはっはっはっはっはっは!!」

おっさんの豪快な笑い声で。

「は、え？」

俺と言えば困惑するしかない。

いきなり笑い出したんだしこのおっさん。

マジなんなの？ 狂ったの？ 俺の威圧感の凄さに負けたの？ さっきまでの緊迫感どこいったの？

おっさんは困惑する俺の肩をバシバシと叩いてくる。

「はっはっは。冗談だ、君を疑ってなどおらんよ」

いやー参った参ったと俺の肩を叩くおっさん。

何が参ったのよ。なんなのその笑顔。どう言う事？

「なに、イシユバールの坊主共に梃子摺っていてな、君でストレス発散してしまったようだ！！ 許してくれとは言わん、それが君の義務だ。はっはっは」

……このおっさん。

マジでぶん殴りたい。ストレス発散って何よ、そんなにストレス溜まってんなら女引つ掛けるよアンタならいくらでも釣れるダロ？ とりあえず死ね。イケメン死すべし。

さらには義務と来た、いやね。軍ってさあれだよ、禁欲生活的な側面から危ない道に走る人もいるけどね、なんだよ義務ってこいつまじで死んだ方が良くない？

「すみません」

「ん？ なんだね」

「殴っていいですか？」

「はっはっは。君は面白いな！！ そんな言葉を聞いたのは何十年振りか」

いやー愉快愉快と笑いながらおっさんはトイレから出て行った。去り際に捨て台詞として。

「シグルド・カーティス君、君の出世を期待しているよ」

「はっはっはっは。との言葉を残して。」

「なんだよアレ、嵐？ 嵐なの？ 大嵐なの？」

「異様な疲れを覚えながら俺もトイレから出る、演説の原稿とか考えてたけどもうどうでも良くなった。簡単なので行こう。」

そんな感じで異常に消耗しながら俺は式に出席した。

式の仮定なんてマジで記憶にもねーよ。

俺の名が呼ばれて反射的に立ち上がった程度しか覚えてないわ。

んで来たわけだ、演説の機会が。

舞台の上に立ち、俺が見渡すのは総勢400名の仕官候補生。

その後ろには親なのかなんなのか知らんが、有象無象の大観衆。

俺は久しぶりの大舞台にちょっとばかり高揚し、係りの人から渡された原稿を見る。

なんか難しい言葉で、軍の為に尽くしますって感じの言葉が延々と羅列されている。正直こんな型に嵌った原稿って嫌いなよね。

だから。

「紹介に預かりましたシグルド・カーティスです」

とりあえず自己紹介。

改めて生徒を見ると女性が結構多い。

大体男：女で6：4くらいか。

「皆さん、背後をご覧ください」

俺が手で正面を指し示し、皆、慌てていた係員も軍高官もオーデイエンスも誰も彼もが俺の指の先を見る。

そして一様に首をかしげ、指の先を凝視している。

俺はそれを満足気に眺め、言葉を続ける。

「皆さん、俺を見て下さい」

首を捻り、俺を見上げてくる1000名以上の人々。

頭の上にクエスチョンマークを浮かべているのが見えるようだ！！

俺はそれに頷き返し。

最後の言葉を叫ぶ。

「俺にはコレだけの人々を動かす力がある！！ 皆もそれだけの力を得る為にここに来た！！ 素晴らしい学校生活にしよう！！ と
言う事で俺に清き一票を！！」

ハ―ハツハツハツハ―！！

軍高官とやらの席に、あの眼帯髭親父が見えた時からまともに原稿読む気は失せたわ！！！！

これで一本とってやってぜ！！ ざまーみるやおっさん！！！！

もちろん拘束された。

お前の脳みそには何が詰まってんだと問い詰められた。

「妄想と愛と友情と悪意が」

そう答えたらブン殴られた。
しかも壇上でだ。

壇下では生徒が笑っていて、軍の高官の中にも笑っている人はいる。

あの髭おっさんは爆笑していた。

何故か負けた気がしても、凄く不満だったんだが。

だがまあ、この羞恥プレイを止めたのはその髭おっさんだったので感謝しなくもない。

「はっはっは。今年は意気の良い生徒が入ったな」

そんな風に乱入して事態を収束させた。

マジであの統率力は凄かった。
んだ。

その髭おっさんの演説が始まるわけなんだが。

“アメストリア軍大統領閣下より祝辞”

そんな言葉で出てきたのがあの髭おっさんだった。

「キング・ブラッドレイだ。先ほどのシグルド少年の演説では見事な統率力を見せて貰ったが、私もまだまだ負けておれん。皆も精進を重ね私をも超えて貰いたい。そして軍の為、国の為にその血を流して貰う」

そんな感じの言葉から始まった演説だが。

俺が頭を抱えたのは言うまでもないだろう？

なんだよコレマジで俺なにか憑いてるんじゃないや……いや、そうかお

袋達と親父は俺の幸福の天使だったんだな。そうだそうに違いない。じゃないとこの事態はありえんだろー！ー！？ なんだよ大總統って偉いのかよ！？偉いに決まってるだろ！最高責任者だよ。

やばいやばいやばい。

俺の頭はそんな言葉がリフレインして使い物にならなかった。

その日はそこから寮で寝るまでの記憶は一切なかった。

そんな感じで俺の士官学校一日目が始まった……

11話：俺と髭と演説と不幸（後書き）

なにか書き直そうかと思った品。
なんか個人的に読みにくいよね。。

ゴミ追加してきました

12話：友人と力と矜持と反乱

さて、士官学校入学初日からエライ目にあつた俺だが、友人には恵まれた。

まずは相部屋の相手。

アルフォード・マキナと言う金髪碧眼の筋肉マッチョなのだが、こいつはかなり良い奴だった。

なんせあんな変態演説をした俺に対する第一声が……

「おう、アルフォード・マキナだ。あんたの演説は最高だったぜ、つるむならあんた位にイカしてる奴がいい。よろしくな」
だったのだ。

地味に貶されてる気がしなくてもないが、放心状態だった俺をこの部屋まで運んだのもコイツだと言うのだからカナリ良い奴のよう
な気がする。

他にも俺に声をかけてくる奴は結構居たが、ある事件が起こるまでは結構少数だった。

なんせ初日から先公に目をつけられてる俺だ、まともな神経してる奴なら関わりにはなりたくないだろう。

その結果からか、俺の一緒に行動する友人はアルフォードとジンと言う女性の二人になった。

ジン・ノルメ。

この子は初日から俺に声をかけてきた兵だ。

曰く「貴方の斬新な演説の心を打たれました。尊敬してます。是非とも貴方の下で働きたい」らしい。目をキラキラさせて言うもんだから、俺が怯んだ。

狂ってるんじゃない？

と思つた事は多数あるが、この子は次席らしいので脳みそは優秀

なんだろう。

とりあえずだ、俺はほとんどこの二人と行動を共にしている。

士官学校での授業は履修制であり、必須科目以外はその単位を取れるかどうかによって卒業後の道が別れる。

履修した科目の単位を落とせば当然評価は下がるのだから余裕のある奴以外はなかなか取らないみたいだが……

必須科目13項、その他の科目20項。

13科目の中には軍仕官に必要な物が詰め込まれており、数学・地理・行軍・銃術などで内容は高度な知識を求められている。

俺の場合は思い出す感じなので別段負担にはならない。

アルフォードもジーンもやはり頭は良く、必須科目は今の所問題ないようだ。

まあ、だから解るだろう？

俺は二人と一緒に必須科目以外の物も取ってるんだ。

中でも真面目に取り組んでいるのは当然ながら錬金科。

次いで衛生だ。

アルフォードは錬金術に対しては興味がないのかダルそうに受けてるが、4日習った時点で独自の錬金陣を作るくらいには優秀だ。

チートってのはコイツの為にある言葉だろう。

ジーンは真面目に取り組むも才能がないのか木材を弄る以外の発展は見せていない。

だが、情報処理・医療・衛生・指揮に関しての才能は本当に凄い。

まあ、二人に関してはこんなもんだ。

んで俺だが、はつきり言おう。
一部の上級生と教官に嫌われている！！
と言うのもちよっと大事を起こしてしまったからなのだが。

事が起こったのは入学してから2ヶ月ほどたったある日の軍事訓練。
練。

100名の訓練兵が押し詰められた小さな演習施設の一室で軍事訓練でアレが行われたのだが、これで俺はキレてしまったのだ。アレというのはアレだ。

新兵に対して行われるあれだ。

「お前達はブタだ！！ 唯々諾々と私の言葉に従う以外に存在価値は無いっ！！」

「ブタ共！！ 返事はどうした！！」

「yes sir！！」

「蛆虫には返事の仕方も解らんか！！ sirを付ける害虫共！！」

「sir.yas sir！！」

と言う奴だ。

士官学校なのになんで？

と思っただが、戦場に出てない奴には徹底して行つらしい。

この時に俺は何故か集中攻撃された。

「カーティス訓練兵！！」

「サーイエツサー！！」

「発音が悪い！！ 言い直せクソ虫が！！」

「サーイエスサー！！」

「主席合格でも発音は劣等生か！！ このブタは！！」

「さーいえっさー」

「聞こえんぞ優等生！！」

「さーいえすさー」

そんな感じで弄られるんだ。
しかもだ、

「閣下に気に入られてブタが調子にのつたか！！ お前みたいなクズは戦場に出てもすぐに味方を殺すに決まっている！！ 調子にのるなよブタ！！」

「さーいえつさー」

「クズが未だにまともな発音も出来んか！！ ブタの育ての親は最低の雌ブタなんだろうな！！ 貴様を見ればその薄汚い雌ブタの姿が見えるわ！！」

とか言われたんだ。

それだけで俺の短い堪忍袋の緒がキレた。

この言葉にイエスと形だけでも答えるのは無理だった。

俺は静かに耳障りな声を張り上げるクズに向かって進む。

「誰が動けと言った！！ ブタが私の命令無く進むな！！ クズが

「…ぶげらっ！？」

顎に一発ぶち込み状態を浮かせる。

体制の崩れた所に回し蹴りを脇腹に叩き込み、壁に向かって蹴り飛ばす。

ガシャーッ

なんて機材が崩れる音がしたが、気にせず俺はクズに向かって駆け寄る。

その途中で見つけた銃を拾い上げ、銃口の部分を両手で掴み、振り上げる。

咳き込み、上体をあげ激怒の目を向けてくるクズを見下し俺は銃をクズの頭目掛けて振り落とす。

一発。

それで目が回ったのか、白目を剥くクズを蹴り倒しマウントポジションを取り、再び銃を振り上げる。

そこでようやく、ジーンとアルフォードが俺を止めに入った。

騒ぎを聞きつけ、俺を組み伏せる教官陣。

初めはそれで生徒側もホツと安堵の息をついていたんだが、一人の教官がある事をやらかした。

俺の腹を蹴り上げ、一言。

「餓鬼が調子に乗るな、良く聞けお前等。お前等みたいな底辺を這い蹲るクズ共を矯正するのが俺達の仕事だ。何言われたのか知らんが下らん想いを引きずるな、まあ、これからお前等を徹底的に折るいいな」

そして俺の頭を蹴り上げる。

余りいい顔をしていなかったジーンとアルフォードがコレで半ば切れた。

さらに俺は頭を踏みつけられ唾を吐きかけられる。

それで詰みだ。

友人二人はキレ。他の生徒も不快な表情を隠しもしない。

当然俺は“下らん想い”の時点で終わってた。

「軍人が矜持をなくしたら終わりだろうが」

俺は顔を踏みつけられながらも声を出したが、返答は、

「知らん。軍人は力が全てだ、力こそが正義、力こそが唯一絶対」

なるほど。

なら覚悟しろクソ野郎。

「……アルフォード」

即座に俺を組み敷いていた教官が吹き飛ばされ、壁に激突して気を失う。

俺を踏みつけていた奴はアルフォードが首を掴んで吊るしている。俺は立ち上がり、俺を踏みつけていた教官を睨みすえる。

頬に付いた唾液を拭おうとしたが、先んじてジーンがハンカチでそれを拭ってくれた。

「ありがとう」

「いえ、当然の事ですので」

そう言っって頭を下げ、俺の背後に回る。

俺はと言えば教官を睨み、問いかける。

「力こそ全て、そう言ったな」

教官は息が詰まっているのか、言葉にならないうめき声をあげる。それを見たアルフォードが少し手の力を緩める。

「貴様、こんな、事をし、て、ただで済むと、思ってる、のか」

アルフォードの腕に爪を立てながらそう言ってくる。
が、俺の返答は決まっている。

「力こそが正義。なら俺はお前達以上の力をもって俺の矜持を貫かせて貰う。許しなど請わん。許しは力を持つ俺を支持する」

「バカ、が、お前達の力など、微々たる、物だ」

「つまり俺達は非力だと？」

「あたり、まえだ」

俺はその言葉を聞き満足を感じる。

俺達は非力だと決め付けるその傲慢、打ち砕いてやる。

「よろしい、ならば戦争だ」

その言葉を聞き、アルフォードは豪快に笑う。

ジーンは俺の背後で頷き、テープレコーダーをポケットから取り出す。

どこに隠してたのかと疑問は尽きないが、まあ、いい。

「諸君、今の会話を聞いたか。この男が言った言葉はそれ即ちこの部屋にいる全ての者に向けられた言葉だ」

俺は遠巻きに俺達を見ている100名の生徒を見渡す。

怯えている者、厄介者を見るようにしている者、どこか好奇心をみせている者、様々だがその全ての視線は俺に向けられている。

「そして、軍学校に置ける教官と上級生の総意とも言える」

「がっはっは。舐められてるな俺達は！！」

「アルフォードの言う通り、俺達は舐められている。自由意志すら屈服させると言い切ったこの教官はなるほど、正しい」

軍の規律を守る為に個人の想いを叩き折るのは正しい事だ。それくらいは俺にでも解る。

だが……

「だが、己の矜持すらも軽んじるこの発言。諸君は憤りを感じないか」

俺がキレたのはそこだ。

俺を屈服させる為なのかもしれんが、俺の想いをバカにするような発言をされればキレル。あのエセ教官は更に俺の母を汚した、口汚く罵り、その苦悩を知らず踏みにじった。

想いを汚される事はお袋の願いを、親父の懇願を足蹴にしたような物だ。

親を汚される事は、俺の存在意義を貶す事だ。

そして、俺に唾を吐きかけたアイツは俺の全てを軽んじた。

「下らぬ想い」だと断じ、「知らん」と矜持を否定した。

「家族の為、国の為、誇りの為、金の為、復習の為、反抗の為。様々な思惑から諸君等はこの士官学校への門を叩いたのだろう。それは大切な誰かの為で在り、それは個人の欲の為なのだろう。だが、今この瞬間、諸君等の想いは否定された。下らぬ想いだと一蹴された」

生徒の一部の者の目に火が灯る。

「力こそが全てだと……力を持って意地を砕き、力を持って屈服させるのが軍の流儀だと」

段々と皆のボルテージが上がっていくのが解る。

「ならば、俺達はその力を教官共に知らしめよう、俺達は非力な犬か、それとも牙持つ狼か。力によって我を構築せねばならんのなら、俺達は俺達の力を知らしめよう、世界に轟くアメストリア有数の武人である」と

アルフォードが吊るしていた教官を壁に投げつける。

教官はそれで気絶したのか反応はない。

俺はそんなアルフォードの横を通り過ぎ、出口へと向かう。

ジーンは変わらず傍らにあり、アルフォードは好戦的な笑みを浮かべジーンとは逆の位置に付く。

「己の力を示したい者は俺に続け、誇りを貫きたい者は俺に続け、己を貫きたい者こそ、俺に続け」

俺は扉の前で立ち止まり、振り返る。

ジーン、アルフォードを筆頭に100の視線が俺に向けられる。

ただ棒立ちになっていた先ほどとは違う、皆の目に灯る火は確かに存在し、俺を焦がすほどに熱く煮えたぎっている。

「諸君、力を示したいか」

瞬間。

『ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！』

！！！！！』

怒号があがった。

皆が手を突き上げ、狂ったように叫ぶ。

筆頭は言わずもがなアルフォード。ジーンは俺の顔を凝視して頷く。

俺はそれを見渡し、満足気に頷く。

バンツ！！

俺は扉に向き直り、扉を蹴り破る。

「諸君！！ 派手に行こう！！」

長い一日が始まった。

12話：友人と力と矜持と反乱（後書き）

主人公は自重を忘れました。

13話：軍師と猛将と情報と状況

さて、力を知らしめるに辺り懸念事項は結構多い。

まず、錬度の差。

言うまでもなく、俺達は弱い。いや、俺は強い。多分。

しかし、集団で動く場合は個人の武勇は然程必要ない。戦争は火力だからな。

火力と言うのは単純に武器の性能ではない。

隊列の組み方、移動の仕方、武器の扱い方、なにより後方支援。

全てを合わせて、火力と、そう呼ぶのだ。

もちろん武器の性能もそこに加わるが、俺としてはそこは重要ではない。

そこで、今回は個人の武威を当てにしている。

「アルフォード。お前一人なら何人相手に出来る」

「そうだな、あの教官レベルなら10人くらいか」

「……」

十分化物じゃねーかよ……それだけ相手取れたら十分だ。

10名ほどつけて遊撃して貰おう。

「錬金術はどれくらい使える？」

「あーあれか、正直壁を作るくらいしかできねーが」

ツンツンの短髪の髪を掻きながらの言葉に、少しばかり驚いた。

壁と簡単に言ってくるが、それを成すには膨大な量の情報を脳で処理しなければならぬのだ。それが土であれ鉄であれ、別の部分に使われている物を再利用しつつ強度を落とさない、或いは強化すると言う芸当はかなり高度な技術だ。

それが壁を作れるくらいの量を扱えるのなら十分に使える。

「それだけ出来れば十分だ。取り合えず通信機器を手に入れたら壁を作って貰う。場所は指定するからそれまでは適当に暴れてくれ」

「おう。俺の得意分野だな」

「見た目そうだよな」

「はっはっは。まあ、こんなガタイだからな、つっても一人じゃ高がしれてるぞ」

こいつは背が高い。

俺は今170ちよいだが、アルフォードはすでに180を超えている。

ちなみに19らしい。

「それは解ってる。だから10名ほど連れて遊撃してくれ」

「おう。了解した」

「ああ、そうだ。俺の部屋に刃漬したサーベルが10本あるから使ってくれ」

「はあっ!?! お前いつの間に…」

「備えあれば憂いなしってな」

「ったく、だからお前は好きだぜ。やる事なす事ぶっ飛んでる」

そう言って豪快に笑いながら俺の後ろに続く100名の訓練兵の中に消えて行く。

恐らく選別しにいったのだろう。

途中ジーンと何か話しているが、恐らく選別の基準でも決めてるんだろ。

ジーンはあいつと別れ、俺に向かって歩いてくる。

サラサラと流れる長い黒髪、英知を詰め込んだかのような赤い目。顔立ちはどこか日系のように感じるので色々混ぜてるんだろ。

彼女の容姿からは不思議な魅力を感じる。

ちなみに16。

俺はその姿に少し懐かしさを感じながら、ジーンと情報整理を行う。

「向こうに情報は行ってると思うか？」

「いえ、恐らくはまだでしょうが、それも時間の問題かと」

まあ、だよな。

俺の目の前にはまだ木々が見えるとはいえ、ここは士官学校の施設内だ。

地理を言ってみれば、

荒林山山山山山林荒
林林山山学学山山林
林訓学学学学学学訓林
壁訓訓学学訓学学訓訓壁
壁壁訓訓訓訓訓訓壁壁
街壁壁壁壁門壁壁壁壁街

こんな感じだ。

荒はまんま荒野が広がっている。

山と林と街はそのまま。

学は校舎だ。三階建ての建物で一階には物資系と実験施設それに職員の一部が多数、二階には必須科目の教室、3階に履修科目の教

室。かなり大雑把だがそんな感じだ。

壁は鉄格子の柵みたいな物で脱走防止なのかは知らんが結構厳しい柵だ。

訓は訓練場。広場があったり、ビル施設があったり、銃の撃てる施設があったり、色々だ。

ちなみに寮は校舎の中の右端の学だ、左端の学は女子寮。

入居者は合計で1000人ほど収容できる。まあ、街中にアパート借りる人、家を買う人、自宅から通う人、様々なので意外と空き部屋はある。

門はそのまま、門だ。これも敵つい造りだが、威厳を感じる。

俺達が行軍しているのは山の部分。

右端の部分だ。

男子寮に近いのは良いが備品庫から離れている。

「だな、ならまずは通信室。と言うか放送室を落とす」

「……」

「同時に備品庫を確保したいが、出来るか？」

「通信機ですか」

「ああ。あれは備品庫にあったはずだけど」

「ええ。確かに、しかし距離があるので少し敵しいかもしれません」

そうなのだ。

マジで遠い。

女子寮の一つ手前にある部屋にあるんだが、ここからだといキロほど離れてる。

それに比べ放送室は割りと近い。

男子寮の斜め下の部分にある。

二つとも一階にあるので助かるんだが、武器は備品庫だ。

……仕方ないか。

「備品庫は俺が落とす、お前は20名で通信室を落とせ」

「……大丈夫なんですか？」

「問題ねーよ。単独の方が速いし、後錬金術で妨害しとくから」

「……」

「不満か？」

「ええ。5名ほど連れて行って貰いたいですね」

ふむ。

何故だ。

んー？

「貴方は一人でいくつの通信機を持てますか？」

「……あ」

そうだった。

落としても機材を運べなかつたら意味がない。

契約を使うのはタブーだから手でしか持っていけないし、あーミスったか。

「部隊は最低でも指揮・主力・遊撃・衛生・制圧の5つに別けたいと思います。ですので最低5名は連れて行ってください」

ふむ。

でも俺も持つし4名で良い気が……

「貴方は護衛です。流石に今の私達に通信機を背負つての戦闘は厳しいです、貴方は通信機が各部隊に渡るまでの護衛をして頂きたい」

なるほど、道理だ。

体力も上級生に比べればクソみたいなもんだしな。教官とは比べるべくもない。

圧倒的に劣っている。

「解った、5名は体力のある奴を選ぶ」

「はい。と言つてもすでにアルフォードに頼んでいますので問題ありません」

すげえ。何この超人。

未来が見えてるとしか思えないんですけど、そのへんどうなの。

「予見は軍に所属するに当たっては必須かと」

「……え？」

「必須かと」

何この子、心が見えるの？

「あのエスパーとかじゃ……」

「その考え方は厨二病と言いまして」

やめてー……ッ……！ それ以上言つな……！……！

「はい」

マジで心が見えてるんじや。

「それは厨二……」

「ごめん」

「はい」

俺はジーンに逆らえないような気がする。
怖いもの。凄く怖いもの。

「あと、知らぬ顔して校舎を移動するのは恐らく無理です」

「あ、やっぱりその頃にはバレてるか」

「ええ。あの施設の通信機のコードを隠しておきましたが、時間稼ぎが精一杯です」

ちなみにその通信機は持ってきてない。

すでに現状の通信機と規格が違っていてめちゃくちゃ重いのだ。

「おい。分野毎に使える奴を纏めといたぜ」

遠くでアルフォードが叫ぶのを聞き、歩くの止めて俺はそちらに目を向ける。

6名の訓練兵と共にこちらに向かってくるのを見て、俺は確信した。

俺は指揮に置いてはジーンの足元にも及ばない。

「ありがとうございますアルフォード」

「別に大した事じゃねーよ。短い付き合いだが、やれる奴ってのは目立つもんだからな」

そう言っただけアルフォードは顎でこちらを指す。

それに反応したのか、訓練兵が俺の前まで来る。

それぞれが自己紹介を行い、担当する部隊を名乗る。

「歩きながら整理しましょう」
「そうだな」

ジーンの言葉に従い俺達は行軍を再開させる。

指揮部隊の副官ミリアリア、人数は10

主力部隊の副官カリア、人数は50

遊撃部隊の副官ゴンザレス、人数は10

衛生班の隊長ルールー、人数は9

制圧部隊の隊長アシフオード、人数は16

通信機の確保組筆頭がバル、人数は5名。彼らは通信機を確保後、それぞれの各部隊に所属する。

指揮の隊長はジーン。

遊撃の隊長はアルフォード。

そして主力の隊長は俺だ。

主力部隊に関してはこの中から10名ずつ別れ、各部隊に小隊長を作り展開する。

まあ、数が圧倒的に少ない。

全校生徒1600名。教官数約100名に対し、俺達は全部で100名のしかも即席の部隊。

結果は見るまでも無く明らかだろう。

だが、俺は勝つつもりだ。

戦争とは殲滅戦でも無い限り勝利条件を満たす事で勝利になる。敵にどれだけ兵隊が残っていても、条件を満たすだけで勝利でき

るのだ。

そして今回の勝利条件は、【俺達の力を知らしめる】
これに尽きる。

故に叩くのは1600名ではなく100名の教官達。

恐らく生徒も敵対してくるだろうが、俺の予想ではこちらにつく
奴もいるはずだ。

校舎が見えて来た所で俺は情報交換を終えたジーンに声をかける。

「ジーン」

「? なんです?」

「放送室に本部を置くって事でいいよな」

「ええ。あそこからでないと各通信機に対して指示を飛ばせません
から」

だよな。

となると周波数を教えるだけの為に一度戻らないとダメなわけだ。
この往復時間は、はっきり言ってかなりの出血だ。

……一枚札を切るか。

ガサガサとそばの茂みが揺れ、皆がそちらを警戒する。
出てきたのは。

「ニヤオツ、フーニヤオ」

ニヤンコ。

俺の使い魔にして家族。

俺は契約の元にこの子を召喚したのだ。

この子との繋がりはかなり強化した。

血を飲ませるだけで以前の鳥は繋がりを強化でき、あの事件が起こった。

ならば俺もニャンコの血を飲めばどうだろう。

その発想から俺とニャンコの血を混ぜ、お互いにそれを飲み干した。

その結果。

鳥に対しての効果と、物に対しての効果の両方が生きた。

ようはアポートが可能になったのだ。

更に念話のような物も可能になった。

この子が怪我を負った時のフィードバックはマジで洒落にならなかったが、あれもある程度緩和する事が出来る。

「ネコ?」

「ネコだな」

「ネコですね」

皆が何やら頬を緩めているのを見つつ俺はニャンコを抱き上げる。

「俺の家族で名前はニャンコだ」

「あら、そうなんですか?」

「ああ、寮に動物持ち込めないから隠してたんだけど切羽詰ってるから札を切る」

ジーンへの返答は皆が唾然とした表情で俺を見る事で返事が返ってきた。まあ、約一名爆笑しているのだが。

まあ、この子を切り札扱いするのだから当然だが。

「まあ、不思議に思うだろうが俺を信じてくれ」
「解りました」

これはジーン。

なんだかんだで信頼してくれているのだ。
アルフォードは笑っていて話にならない。
とりあえず尻を一発蹴っておく。

「この子をお前に預ける」

そう言っただけ俺はニヤンコをジーンに差し出す。

ジーンは首を傾げながらも受け取り、俺を疑問顔で見てる。

コテンと首を傾げた姿はマジで可愛いが、今はそんな事を記憶に
永久保存している場合じゃない。いや、保存したが。

「この子に周波数を教えて貰え」
「は？」

まあ、その反応は可笑しく無い。

「この子の特技とでも思ってくれればいい」

「はあ、しかし……事の重要性を理解されてますよね？」

「無論だ」

「作戦の要です。通信機の確保をしくじった時点で私達は負けます」

「ああ」

「放送室……通信室を落とせなかった時点で負けます。そんな重要な
拠点を攻めるのにネコ同伴。どう言う事が解ってますよね」

足手まといだと言いたいのだろう。

だが心配いらぬ。

ニヤンコのチート性能はマジで凄。

なんせニヤンコ経由で俺の錬金術を発動させる事が出来るのだ。

この子は戦力になっても足手まといだと言う事は在り得ない。

まあ、錬金術を使うのは俺で、その発動のタイミングと位置を考えるのはニヤンコだが、問題ない。

ちなみにアルフォードに言った刃潰しのサーベル10本はニヤンコを經由しアポート、そしてニヤンコに錬金陣を書いた用紙を取り出してもらい、刃を潰した物だ。

遠隔錬金出来るとは言え、まだ陣は必要だからな。俺が書くか予め用意しておくかしなければならぬ。

「ああ、あえて言う。連れいけ、それと自由に走らせろ」

「……………解りました」

ジーンは目を瞑り、熟考していたが僅かな時間で判断を下す。

俺は頷き、促す。

作戦指揮はジーンに任せただけだから。

ジーンは胸にニヤンコを抱き、100名の兵へと向く。

ピンと背を伸ばし、長い黒髪を風で揺らしながら作戦概要を説明している。

勝利条件、重要拠点、その後の展開の仕方、神速侵攻、教官はサーチ&デストロイ、基本は各個撃破、絶対に殺すな、制圧部隊は捕虜の勧誘も行え、銃の使用を禁止、刀剣も刃の潰れた物を現地調達、潰れてなかつたら潰せ、などなど。

一通りの説明を終え、ジーンは俺を見る。

俺は皆を見る。

そろそろ熱気が冷めて尻込みする奴が出てくるかと思ったが、俺

やジーンとアルフォードの行動と言葉は予想以上に彼らの心に強く響いたらしい。

思わず笑みが零れる

「俺達が今からする事は士官学校始まって以来の変事だろう。なんせ入学間も無いヒヨコが歴戦の教官に、引いては軍の教育方針に真っ向から反抗するんだからな」

改めて皆を見る。

気の弱い子が何人かいるが、それでも手を握って震えを押さええている。

「だが、軍の流儀は聞いた通りだ」

力こそ全て、力に従え。

俺は拳を作り、胸元で震わせながら熱く語る。

「故に教えてやろう！！ 新しい時代の脈動を！！ 新しい力の到来を！！ 古い時代の化石に俺達の力を見せ付ける！！」

皆無言で腕を突き上げる。

アルフォードすらも声をあげない。

皆状況が解つてる証拠だ。なんせ目の前には既に校舎が見えてい
るのだから。

俺は固めていた拳を大きく横に振りぬき、今日一番の気合を入れて叫ぶ。

「原告より状況を開始する！！」

ジーンの「散開！！」の言葉を満足気に聞きながら、5名の兵士を連れ「部隊名付けて置けばよかった」と後悔しながら駆け出す。まだまだ今日は始まったばかり。

13話・軍師と猛将と情報と状況（後書き）

今からちよつと遠出してきます。

明日の更新は出来るかどうか微妙です。

てか良い意気高揚の文句が浮かばない……。

この話のセリフは10回くらい書き直した覚えが…

しかし、眠い。

14話：制圧と炎と俺は役立たず

走る。

喧騒が校舎を包んでいる。

走る。

全館放送されたジーンの声が聞こえる。

“我々は代153期訓練兵以下100名からなるA隊であります”

目の前に唾然とした生徒が10名弱と教官1名が見える。

俺は速度を上げ、教官の首を打ち。崩れ落ちるそれを抱きとめる。

そのまま廊下の隅に寝かせ、後続5名が先へ言ったのを確認し、生徒が未だ反応仕切れて居ないのを横目に追隨していく。

“我々は軍の流儀に従い、己が矜持の為、理想の為、願いの為。今ここに士官学校及び教官陣に対し“我々の力”を示します”

備品庫の扉が見える。

安堵の息を付くバル他4名に対し声をかける。

「気を抜くな！！ 前方20m右曲がり角から2、後方10m右曲がり角から3だ！！ 前のを全員で押し潰せ！！」
「ハッ！！」

俺は踵を返し、すぐさまダッシュ。

顔を覗かせる誰かの頭を掴んで、壁に押し付ける。
まあ、手加減してるので目が回るくらいだろう。

そのまま後続の一人を突き飛ばし、その奥に居る一人の横まで移動し首を打って気絶させる。

壁に当たって咽っていた奴の首を絞め、落とす。

“力こそが正義。その信念、真に貫くつもりが御在りなら。この力の行使を真摯に受け止めて頂きたい。我々がこの学屋の門を叩いた事を、後悔させないで下さい”

前は大丈夫か、と確認してみると息を切らしながらも二人で取り押さえているのが見える、一人は扉に体当たりをしている。

俺はまず教官2人の元へと向かう。

「君達！？ 何やってんの！？」

「は、離しなさい！！ これは軍に対する反乱ですよ！！？」

何やら叫んでるが、まあパニくるのはオカシイ反応ではない。

だが、後者の意見は少し違う。確かに反乱ととれる事だが、ジーンはこれまで反乱など一言も言っていない。

「いや、これは示しだよ」

「何を！？ 何を言ってる！！ こんな大それた事をしでかして！！」

「貴方達が俺達を軽んじるのなら、俺達は力を示すしかない」

「軽んじる？ 違う！！ 軍には軍の規律があり、それを守らせるための手段として士官学校があるのだ！！ 無駄に見える授業でも、

過酷に見える訓練でも、それは貴君等の将来を思つての鞭だ!!」

それは理解している。

当然俺と一緒に居る誰もが理解出来ている。

許せないのは。

「解るよ。貴方達が死んで欲しくないから厳しくしている。後悔してもらいたくないから厳しくしている。そんな事は俺達皆が理解している」

「なら、何故!!」

「譲れない物を足蹴にされ、黙つていられる程、俺達は大人じゃないんだ」

俺の、俺達の誇りを踏みにじつた事だ。

皆があ言葉に感じ入る何かがあったからこそ、今俺達はここに居るんだ。

あの教官達は俺達の大事な何かを足蹴にした。

“例え一教官嫉妬から始まつた事であつても、我々の矜持を踏みにじる傲慢。それを指して軍というのなら……我々は更なる力の行使によつて我々を確立させて頂きます”

「通信機確保!!」

バルの声を聞き、俺は教官二人に声をかける。

「俺達は狗か？ それとも狼か？」

「なにを言っている!!!」

「見届けると良い、力の砲火を高らかに打ち上げるのを」

錬金術で作った縄をかけ、備品庫にぶち込む。

猿轡もして、それぞれ離れた窓辺付近に縛り付ける、運がよければ誰かが気付くだろう。

5名もその間に通信機を背負い。

すでに駆け出している。

それに追いつき、それぞれの周波数のメモを貰う。

『ニヤンコ、聞こえるか』

『ん。聞こえよるぞ』

『これからお前を通して、そちらに周波数を刻む』

『壁でよいか?』

『んー、まあいつか。壁でいいぞ』

『承知した』

ニヤンコの目を片方借りる。

視界が半分別の場所になるのは走りにくいが、まあ、練習だと思えば問題ない。

次いで、練成陣メモを取り出し、壁verを手に貼り付ける。

ニヤンコの体が壁に接触しジーンを映す段階になり、俺は錬金術を発動させる。

ニヤンコの視界ではジーンと他の指揮部隊の生徒が目を見開き、ニヤンコを凝視している。

それに笑みを零しながら更に練成を行う。

通信室の扉の隙間を埋め、さらに通路を壁で塞ぐ。

これで進入経路は大分限定される。
窓辺はそのまま放置しているが、あそこはジーンが警戒させているので問題ない。

ついでに、俺は備品庫の扉の両脇の通路を壁で塞ぐ。

まあ、これは保険だ。

銃を持ち出す奴が居るかもしれないしな。

まあ、短期決戦しか想定してないので、本当保険でしかないが。

“……我々の標的は、あくまで教官陣に限定させて頂きます。怪我をしたくない者は2・3階へ非難される事をお勧めします。1階第一・第二教官室、室内訓練施設を攻略中。すでに第一〜第5実験室及び・備品庫・放送室は制圧いたしました”

これは合流地点の為の放送だ。

攻略中と言っているが、そこは絶対に部隊を展開しない場所だ。

制圧した場所は、そこには行くなと言う場所だ。あげられなかった施設は保健室・第三教官室・地下実験室・校長室と言う具合だ。

他にもあるが、合流出来そうな場所はこれくらい。

第一第二教官室は隣あっているのだが、第三教官室は離れている。

まあ、それだけの理由であり、その部屋には予想だと10名の教官がいる予定だ。

あんまり意味のない事ではあるが、小細工は必要だ。

「隊長」

「あん？」

先を走っていた生徒が通信機片手に話しかけてくる。

しかし、なんだ？

何か不手際でもあっただろうか……

取り合えず、受け取る。

「なに？」

“貴方は化物ですか”

「……………」

なんかジーンさんが呆れてらっしゃるようで。

“ペットに錬金術を覚えさせるなど前代未聞です”

「ああ。それ厳密には違うんだけどな」

“貴方のそう言う常識破りな所に惹かれましたが、これは予想以上です”

「ですよね！！」

人を驚かせるのは楽しいんだ。

“…………とりあえず、通信できていると言う事は良い事です”

「だな」

“ですが、貴方が通路を塞いでくれたおかげで、こちらに通信機が一機通らなくなりました”

「…あ」

“室内戦である有利を投げ捨てるのは在り得ないので、窓からの侵入は諦めて下さい”

「すみません」

“現地に展開する予定だった、指揮部隊の者を他の部隊に合流させる事も中止します”

「……」

“まあ、大した出血ではありませんが、独断横行は慎んでください”
「はい。すみません」

“ふふ。前線に送る積もりだった2名が残りますので拠点の防御が厚くなったのは確かですので、感謝はしています。ただ事前に説明してもらいたかったです”

「んーでも多分信じなかつたら？」

“いいえ、貴方を信じています。私もアルフォードも、誰が貴方を否定しようとも、貴方が出来ると言った事を信じます”

「……そうか」

“はい”

それほど長い時間を共にした訳じゃないのに、この信頼はなんだ

……

赤面してる自覚があるんだが。

“貴方はただその道を反れず走って下さい”

俺の事情を話したわけでもないのに、このいいよう。
彼女はマジで心が…

“それは厨…”

「すまん！！」

なんてやり取りをしている間に、第三教官室は目前。
なんだが…。

アルフォードの部隊と対峙する生徒がいる。
遊撃部隊10名の内、3名が気絶している。

その周りには教官が7名ほど気絶。

「やれやれ、軍の教官がこれでは先は暗いかな？」

「んな事ないだろ。青二才共がこんだけやらかしたんだ、十分軍の未来は明るいと思うぞ」

「それもそうだな。しかし、このまま放置も出来んよな」

「まあな、こいつ等こんだけ動けるんだ、こんな若い頃から傷持ちにするのはな」

「では、鎮圧戦と行こうか ヒューズ」

「おう。頼りにしてるぞ ロイ」

ロイ・マスタングとマス・ヒューズが！！

最上級生の天才共が降りてきやがったーーーー！！

これはヤバイ。

「ジーン、第三教官室前で接敵、予定変更だ」

「なんです？」

「ロイ・マスタングとマス・ヒューズ4回生が敵対してきやがった」

「他の上級生は見えますか？」

「いや、それは見えない」

「ならば予測済みです」

「……マジで？」

「彼らは良くも悪くも有名ですので」

確かにそうだが、乱入を予測できるか？

どこまで見えてるんだ。

“ 予定通り、通信機を各部隊に配布して下さい。それで準備は整います ”

「了解」

信じてくれてるんだ、信じるからな。

“ ああ、それと貴方は単独で動いて貰いたいんですが、よろしいでしょうか？ ”

「構わないけど、連絡は如何する」

“ 何を馬鹿な事を、この仔はその為にいるのでしょうか ”

「……」

そうでした。

俺はもつと頭使わないとダメだな。

目先の事しか見えてない感じか、これからも苦勞かけそうだ。

“ ではお好きなように動いてください、マスタング及びヒューズ訓練生はアルフォードに任せておけば大丈夫です ”

「了解だ」

“ この通信の終了と共に通信機班護衛の任を解きます。自由にとは言っても限度はありますので錬金術の使用は控えてください。校舎の耐久度から言っても乱発すべき技術ではありません ”

「解った。どの辺りを攻めればいい」

“ 第一・第二教官室の制圧及び、校長の身柄の確保を ”

「ふーむ」

“ アシユフォード率いる制圧部隊5名を選抜の後、引き抜いてかまいません。後はルーラーを連れて行けば何も問題ないでしょう ”

「いやいや、あいつは隊長だろうが」

“ 構いません。彼等が出てきた時点で治療は意味をなくしました、気付け出来る者が隊に一人いれば十分です ”

どう言う考えなのかはしらんが、まあいいか。

何かあるんだろう。

「ルーツ！ 後アシュフォード以外の制圧部隊5名は俺について来
いっ！！」

“ 選抜しろと……いえ、もういいです ”

俺は通信兵に指示を出し、アルフォード達が居る場所に手信号を
出しそのまま右に曲がる。
が、

「行かせるとでも思ってたか？」

俺の目の前に壁が出来た。

ロイ・マスタングか、流石に天才だ。俺の目の前に壁が出来たが、
背後の通路にも出来ている。
隊をこの通路に閉じ込めるつもりか。
だが、甘い。

「ははは、行けないとでも思ってたんの？」

俺は練成陣を書き、すぐさまロイ・マスタングが作った壁部分を
利用してマス・ヒューズを檻に閉じ込める。

「うおおおっ。なんだこりゃー！！ ロイ、ロイクーン助け
てくれ！！ めちゃ硬いぞ、しかも暗い！！」

ロイ・マスタングは口をポカーンと開けて俺を凝視。
その向こう側に見えるルールー他5名は無事右通路に消えて
行く。

通信機班も俺の通ろうとした通路を通って各部隊へ。

「なるほど、変人シグルド・カーティス。君が扇動したな」

……俺ってそんなに変だろうか。

最近変人だ、変人だと言われすぎてちょっと嬉し……いや、困ってるんだが。

「如何にも、あまりにも横暴だったんでちょっと痛い目に合わせてやろうかと」

「まったく今の1回生ならば……ふむ、ブタと言われて怒りに飲まれたのか？」

「ああ、それは別になんとも思っていないが、母親とか出されてね、ちょっと口汚く罵られてキレちゃってね」

「ほう。しかし、教官がそこまで分別の無い事を言うとは思えないが」

「放送聴いてなかったのか？」

「……嫉妬か」

「髭おっさんと話した事に嫉妬されてもね、俺にとってアレは疫病神でしかないからな」

「くくく、それは軍を馬鹿にしているような物だが」

「馬鹿にはして無い。ただ、早く消えてくれとは思ってるが」

「……民を守る為の軍だ。それが消えたら民はどうなる、ドラグマ・アエルゴとの関係は極悪。いつ民がその砲火に巻き込まれるか解らない、その民を救わんがために軍の門を叩いたのではないのか」

「人を殺し尽す事で成立される救いにドレほど価値がある。今起きている事は国家間の問題と同じだ、力による統治は更なる力によって突き崩される」

「では、軍など必要ないと、君はそう言うのか？」

さてそろそろ、この問答も面倒になってきたんだが……

ニヤンコの目を借り、ジーンを見てみると「もうちょっと時間稼いで」ってなメモを発見した。流石だ。

「いやいや、軍は必要だ。だが、何故軍事国家でなければならない。傀儡の独裁者がどれほど危険か知らないのか」

「傀儡、だと？」

「歴史を学びなおすといいよ、ロイ・マスタング」

「……何を言っているんだ」

「まあ、」

ニヤンコの目に映るのは、ジーンの凄い良い笑顔。
そして、

“今です”

「その問答はまた後で……!」

「待てッ!! あ、なっ!!……!」

同時に、マース・ヒューズとロイ・マスタングの頭上の天井一帯が崩れた。

「えええええ!?! ジーンさんっ!?!」

“皆さん問題ありません。2・3階に生徒がいなかったのを確認済みです”

瓦礫が多いと思ったら、3階廊下も崩したのか……悪魔かよ。

「いやいや、あれ死にましたよね!?!」

“大丈夫です。頭上を崩すのはアルフォードに頼みましたが、隊長がマース・ヒューズを檻に閉じ込めるのは予測済み、そしてロイ・

マスタングは己でそれを作ります”

作ってなかったらどうするのよ。
なんて懸念は意味がなかった。

バジジジジジジ

なんて音と共に出来るのは、大きなトンネル。
それも俺方向にだ。

「やっってくれる」

コツンコツンと、足音が怖いくらいに反響する。
これキレてるね。

「所詮1回生と甘くみていたか、もはや手加減出来ないかもしれん
が、まあ、上手く踊れ」

何やら手袋を付けながら、ビキビキと青筋を立てていく鬼。

「ジ、ジーンさん？」

ニヤンコの視点に移るのは…“暴れるなら校庭で。ルールー
部隊には別の任務を割り当てておきます。ごめんね、がんば”の文
字。

「ジ、ジーンさん!？」

くっそーーこれだから天才は!!

パチンッ

瞬間、目の前に迫る火線。

あ、と思った時には遅い。とっさに身を抜いたが、肩の横での大爆発に俺は吹き飛ばされた。

「ぐっあ」

「っち。少し大きすぎたか」

壁に叩き付けられ、咳き込みそうになるが、即座に反転。
訓練場目指して駆け出す。

「逃がさんよ」

パチンパチンと2連続。

少し後ろの床が吹き飛び、少し前の空間が熱を持つ。

あえて俺は前空間に飛び込む。
顔をガードして突撃、同時に爆発。
腕が千切れそうになるくらい痛い、舐めるな、俺の専行するものは。

“人体”

皮膚の再生は後回しにし、筋肉・骨に必要な物資をポケットに転移させる。

襟に縫いこんでいた治療練成陣を機動。

すぐさま腕と指に治療を施し、ダッシュ。

てかあの人マジこええ。

俺じゃなかったら死んでんじゃない？

今思ったが、校庭に出るってロイ・マスタングにすればバッチコ
ーイって感じじゃないか？

そう思ってたが。

ジーンさんは天候を操る事が出来るのかもしれない。

今は曇り空、だが、明らかにコレは雨雲だ。

湿気が多く、火力もいくら下がらるだろう。

俺は中央まで走り、振り返る。

相変わらず徒歩だが、どこか凄みのある雰囲気を纏ったロイさん
が出てくる。

「失策だと思うが？ 開けた場所は私のフィールドだ」

「ええ。ですが、少し時間を稼ぐだけでいいので」

「雨かね？ それは私の弱点足り得ない」

「ははは、そんな不安そうな顔で言われても説得力ないですよ」

パチン。

が、甘い。

爆発の原理はわかった。

ならば俺の“契約”で対処できる。

俺は気化した血液で持って周囲の“空気”を支配下に置く。

結果、ロイの練成した火線はポイントに辿りつくも、その火は“
引火”しない！！

「なに！？」

パチンパチンパチンと3連。

火線は俺の背後、目の前、頭上。
もう殺しに来てるとしか思えない配置だが、全てが不発。

周囲2mはすでに俺の領域だ。

空気に含まれる、酸素、二酸化炭素、水素。あらゆる元素は俺の支配下にある。

それぞれが色を持って視覚出来る俺の目には恐ろしい事が見えてるわけだが、その構成を全て散らしてく。

「何が起こっている!?!」

困惑するロイに俺は笑みを向ける。

「良くも俺の腕を吹き飛ばしてくれたな」

「つく」

パチンパチンパチン

「頭上1.4m、膝下30cm、背後1m」

火線がそこに向かい、何もなす事なく消える。

「馬鹿なっ!?!」

俺を舐めて貰っては困る。

“ありとあらゆる物と契約出来る程度”の能力。

その力と錬金術と言う技術の相性の良さ、その奥深さはまだまだこんな物じゃない。

今はまだ知識が足りず、無機物に対してのお袋命名“支配契約”しか応用出来てないが、この能力のバリエーションは無限大だ。

てかね。ロイの錬金術はチートくさくね？

あの火線を軸にエライ勢いで辺りの起爆要素を集めてるんだ。

しかも、任意の場所まで引火しないと、どうやれば出来るのよ。
あんな馬鹿じゃないの。

絶対俺以外に対処できる人いないよね。

錬金術の使い方間違えてるよ。

なおもパチンパチンと懲りずに繰り返すの眺めつつ、ロイの背後を見る。

教官達が青い顔して走り回ってるの。

その後ろを良い笑顔のアルフォード達が追いかけてる。鬼かと、お前は悪魔かと。

まあ、銃火器を出さない所だけはマジで感心だが。

教官陣それでいいのかよ……

「何故だ!!」

ロイは怒号を上げて手を眺めている。

まあ、多分あの手袋は何かあるのだろうけど、戦場でもあれをするつもりなのだろうか。

火線錬陣が出来ないのなら別の札を用意しとけよ。

「手品の品が底をついたかな？」

俺を殺す勢いで睨んでくる。

当然だろう。自分の象徴と言える技術を完封されたのだ。

国家錬金術師候補としては絶望してもおかしく無い。

と言っても、空間支配系の契約は現状ではその場を動く切れる。しかも、2mと言う範囲でしか俺は支配できない。それ以上外で

大爆発を起こされると普通に死ぬ。

「答えを教えてあげよう。(+ 1) + (- 1) = 0 だ」

クイツと眉間を中指で押し上げ、俺は声をかける。眼鏡はかけてないぜ、この仕草に無駄に魅力を感じるからやりたいただけなんだ。しかも、適当に言ったただけだ。

「対消滅だと！？ ありえない！！」

「まあ、納得いかないなら考えてくれ錬金術師」

「……つく」

「俺も錬金術はかじっててね、得意じゃないが見せてあげよう」

火線は進む度に俺の周りに様々な要素を運んだ、俺はそれを分解し、支配下に置いた。

結果、俺の周囲には在り得ないほど高密度の空気の層が展開されている。

俺は地面に練成陣を書き、手を上に向ける。

「知ってるか？ 殆どの物質は圧縮すればするほど高温になる」

俺の手の平の先に小さな球体が出来上がる。

それを見てロイは何をするつもりなのか察しが付いたのだから、青褪めている。

「やがてはそれはプラズマ球を形成するほどになる」

球体から紫電が迸る。

しかし、それは俺の制御を離れる事はなく、俺の肌を焼く事もない。

「そしてそれは空気も多分にもれず、特性の制御練成陣を用い大量の空気を、僅か数立方cmにまで圧縮する」

球体は大体3〜5cmほどで安定し、俺は更に周囲の空気を圧縮する。

「はは、その温度は実に数万ケルビンにまで上昇する」

ちらりとロイを見る。

青褪めているなんてのは生易しいか、もう土気色だ。

なんせどんな事が起こってるのか正確に把握出来る脳ミノがあるんだからな。

てかこれ使つとマジで頭が焼ききれそうになる。

ガンガン頭痛がするし、本当わりあわねー。

「そして、これを打ち出す練成陣は既にある。どうなるか解るか？」

「……校舎を吹き飛ばすつもりか」

「うむ。それも出来るが、それは意味がない」

「……」

「あんたに打ち込むとまあ、多分死ぬだろうね」

「阿呆か。確実に死ぬ」

ですよね。

故に。

“ジーンに伝達、空を見る”

『承知』

俺はニヤンコを経由し、ジーンに連絡をいれる。

“我々の総大将の力、その目に焼き付けなさい。勝利の祝砲を空に打ち上げます”

まあ、何をするつもりかは解って無いんだろうけど。

てか、勝利の祝砲って事は学校内は制圧済み？ 俺役に立ってないような気がするんだけど。

そう思い、校舎を見れば様々な人が俺を見ているのに気付いた。

1階からは今回俺に付き合ってくれた訓練兵多数と教官陣。あ、ヒューズさん救出されてる、ボツコボコになってるが。

2・3階からも多数の目がある。

っておい！！ 屋上は立ち入り禁止だろうjk。逢引してんじゃねーぞ。

まあいい。

「では行きましょうか、これが俺の！！ 全力全開！！」

「それで全力でなかったら私は死ぬ」

すみません。地味に本領ではありません。

「プラズマーーーーッ、ブレイクーーーー！！！！」

キュオンッ！！

なんて音で空に打ち上げられるプラズマ球。

そして爆発。

体を震わせる大爆音。

校舎一体を覆うほどに広がった爆炎はそのまま突き進み、空を覆

う雲を吹き飛ばす！！

そして靦く日の光は校舎を照らし、まるで俺達の勝利を祝福するかのように美しい光景を作り上げる。

“ 凄い、シゲルド。これほどとは…… ”

ニヤンコ経由で見るジーンの啞然とした表情。

ロイはもはや反応なし。

と言うかどうなるか論理的に理解出来ているからか、驚きは少ない。

ジーンがちょっと放心気味なので、ニヤンコに手を舐めてもらう。

“ あ ”

間抜けな声とともに状況を把握。

放送室のマイクを握り、

“ 我々の勝利です ”

全館放送にて勝利を告げる。

一拍遅れ、鬨の音が校舎を覆った。

14話：制圧と炎と俺は役立たず（後書き）

学校制圧サイドもいるかな？　と思ひ現在書いてますが……正直めんどくさい。

はしょって良いですか。

あと、ゴミ箱部屋をミスって削除泣いた。

15話：俺と手紙と涙と血

とまあ、そんな感じで一躍有名になり、友人幅も広がったわけだ。一部からは蛇蝎の如く嫌われているが。

あと、あの事件は髭おっさん事、大総統キング・ブラッドレイが治めた。

曰く：「ははは、君は本当に面白い！！ 若い力はいつの時代も楽しませてくれる、これほど笑ったのはいつ以来か！！ ははははは。問題無い！！ 許す！ 己を貫け！！」

らしい。直接出向いてくるから殺されるかと思った。まあ、最後にボソツと「次は無いがな」とか言われた。

……

…

怖い！！！！ 何あの髭！！ 怖い、怖すぎる！！

衝動的にプラズマブラストで消滅させたくなってくる。

だって怖すぎるんだもの。

しかもあの眼帯も反則でしょ？ 何あんた魔眼でも持つてるの？ 持って無いでしょ？ なら義眼でいいじゃん！！ なんでよりによって眼帯なんだよ！！ こええええええええええええ。

って感じで恐慌状態に陥るくらいには怖かった。

それとキングのおっさんからサーベル貰ったドー……

健闘を称える！！ らしい。マジでいららないんですが。

いやね、物はいいんだよ物は、以前なんかの本で見たサーベルだったからさ。

でもね、大総統閣下から贈られたサーベルですよ？ どうしると

？ 使えって言うの？ それとも飾つとけって事？
扱いに困る物貰ってもなー、ぶっちゃけ迷惑です。

そう言ったら笑われた。
警護の兵隊に殴られた。

お前の頭には（ry

「愛と力とニヤンコとジーンが」

そう答えたら、微妙な顔された。
なによその顔は、怒るなら怒る、応援するなら応援する、救急車
呼ぶなら呼ぶ、ハッキリして欲しい。

“ダメだコイツ、何とかしないと”みたいな目で見られるのは心
外です。

ちなみにアルフォードには長銃が、ジーンには短銃が贈られた。
鑑賞用らしいが、そっちの方が全然いい。

俺のとか使えそうで使えない感じで本当微妙。
A隊にもそれぞれ何か贈られたらしいが、あまり確認してない。

あと髭おっさんからは「君の矜持とはなんなのだね」とか聞かれ
た。

このおっさんは傀儡とは思えない程鋭いので「僕の矜持は平和を
守る事です！！」って断言しといた。

あながち間違っていない。
もっとも、俺の身内とその周囲の平和だが。

台風の如くやって来て、俺を疲れさせて帰って行ったが、あの
暇なんだろうか。

・ ・ ・ ・

ともあれだ、事件はそんな感じで落ち着いたんだが、事後処理で死んだ。

崩した廊下とか、壁に使った材料とか、ゼーゼーんぶ俺が直した。

ペナルティと言う奴らしいが、むっちゃ疲れた。
ロイを道連れにしてやりたかったんだが、あの人ね、使い物にならない。

俺に完封されたのが余程ショックだったのか研究室に籠ってしまっただ。

なんでも「炎を極めていなかった。先生の理論にも穴がある、私はそれを埋めてお前を焼かなければ」

とかなんとか。

この人も大概危険人物になってきた。

あとヒューズさんだが、めっちゃ良い人だった。

「いやーやられた、まさか生き埋めになるとは思わなかったぞ。それに処罰の方も重くないみたいだしな、それだけが心配だったが何とかなる物だな」

なんて眼鏡拭きながら言ってきた。

なんでこの人とあの魔人が友達なのか今一理解できない。
あと、それジーンさんですから。
なんで作戦とか全部俺が考えた事になってるのか解らない。
俺が否定してもジーンさんが

「いえ、私はただシグルドの指示に従っただけです」

とか言うんだ。

皆ジーンを信じるんだぜ？ あげく

「あの変人また何か企んでるんじゃない……」

みたいな声が……

変人で定着してしまった……これは赤飯炊くべきだろう。多分そう
だ。

それと落ち着いて来てから手紙を書いた。

お袋・親父とグリさんに。

まあ、それまでも5通くらい書いてたんだが、今回ののはちょっと荒れるかもしれんね。

“ 拝啓。 母さん&親父へ

士官学校に入学してはや2ヶ月経ちました。そちらの暮らしは変わって無いでしょうか？ 母さん体を酷使しないでくれ。親父、母さんを暴走させないで。

ともあれ、以前は友人のアルフォードとジーンの事を書きました
が、今回はちょっととしたイベントがありまして、その事に付いて書
こうかと思えます

事の起こりは10日前、ブタと言われてはsir yes sirと答えるマゾ訓練の最中、俺ちよつとキレちゃいまして、士官学校を制圧しちゃった。テヘ！

いやーこれが意外と面白くてね。俺の錬金術の腕もなかなか成長してるのを確認できたし、新しい友人も出来た。結構良い事ばかりだったよ

まあ、俺をレアに焼きたい。なんて熱烈にアタックしかけてくるヘタレっぽい人との出会いもあったんだけど、概良い感じの友人知人が増えたよ。

あと大總統の命令で以降のマゾ訓練取り止めになったらしい。

これはあれかな？

シグルド・カーティス士官学校の規則を捻じ曲げる！！そこに痺れる憧れるー！！なんてファンが増えたりとか増えなかったりとか、起こりそうじゃない？

ちよつと期待しても良いよね。

あ、あと、親父？ 解ってるよね？ 解つてると言つて。頼むよ。本当、おおおお俺は、信じてるよ。親父

シグルド・カーティスより”

グリさんにも似たような手紙を書いた。

グリさんからは

“逃げ…”

なんて文字だけの手紙が。

血が付いてて、凄く良くない予感が駆け巡った。

お袋と親父からは…その、いつもなら二人一組で書いてくるんだが、なんだろうな。

に、二通届いたんだ。

俺は親父の手紙を読む。

“ すまん。生きる ”

……

……ガタガタと震える手でお袋の手紙を手に取る。

ん？ なんだコレ、滲んでて読めない。全くお袋も困ったちゃんだなー。

濡れた紙に書いたらこうなるって解ってるだろうに。

「それは貴方が泣いているからでしょう」

っていつの間に!!!?

ジーンさんパネエっす、不法侵入するとは。

「最近はいつもこの部屋にいる気がしますね」

あ、そうですね。

なんだかんだで、俺の部屋と言うか、俺とアルフォードの部屋に集まる事が多い。

殆どはジーン・アルフォード・俺だが、たまにルールーやらゴンザレスやらが居る。

なんだゴンザレス。凄く印象に残る名前だゴンザレス、何故か呼んでしまうよゴンザレス。

まあ、ジーンとルールーは女性だから華があっというよね。
ゴンザレスはぶっちゃけいらねーだろ。

「そろそろ現実を見てください」
「……はい」

俺は涙を拭い、手紙に目を通す。
あれ？ やっぱり滲んで…

ガシッ。

俺の手を掴むジーンさん。
手紙の滲みがなくなった。

そうですか、俺の手が震えてただけですか、ハハハハハハハハ
ハハハハ。

“すぐ行く、逃げたら……”

「ヒィッ！！！！！」

こ、これは、来る。

きつと来る、ヤバイ。ヤバイ。ヤバイ、なんで手紙に血が？ とかそんな
事はどうでもいい。逃げないと、いや、逃げたらマズイ。血祭りに
…でも逃げなくても血祭りに。

ど、どうすれば……。

いや、そうかゴンザレスの顔を人体練成で整形しよう。
どうせ名前だけしか出てこないんだ、それで行こう。
あ、手紙が、いや、今は拾う時間も惜しい。

となれば用意する物は、なんだ？ 整形、整形？ 整形ってどれば出来るんだよ！！

そつだ、困った時のロイエもん！！

「ローーーーーイ！！ 助けてーーーーッ」

まで、あいつは無能じゃねーか！！

ど、どうすれば！！

パニックってる俺を他所に、ジーンは俺が落とした手紙を拾って読む。

「まあ、イズミさんが」

なら捕獲しとかないと。

そんな言葉が嫌に部屋に響く。

「え？」

「シグルド」

「え？」

「キャッチ」

俺の腕を取り、何処から出したのかロープで手首を縛っていくジーンさん。

いやいや、ちょっと待て、これどう言う事よ。

なんで僕縛られてるの？

「SM？」

「それも良いですが、取り合えずイズミさんに頼まれていたので」

「スパイかよ！…！ いつの間に…！」

「以前、イズミさんの方から連絡が来まして。ああ、アルフォードの方にも手紙が来たらしいですよ」

「ブツ…！！！」

お袋…！！…！！ あんた何してんの…！！…！！

気持ちは解るが飛ばしすぎだろう…！！

「取り合えず連行します。タブリスからならそれほど時間もかからないでしょう。それまでは私が面倒を見てあげます」

「は、離してくれZIONツ…！！ 僕には使命がある…！！」

「正にイズミさんは貴方を御指名です」

「シメイ違い！？ ってんな事言ってる場合じゃ」

「さあ、逝きましょう」

「嫌だああああ…！！」

次回、お袋来襲…！！

俺の命の灯火が危ない…！！

15話・俺と手紙と涙と血（後書き）

15部になってた。なんでだ…俺は何を思ってた15部にしたの。

16話：お袋とテープと日記と手紙

やあ、俺だ。

ジーンに拘束された俺だ。

手首縛られて、首にも首輪の如く縄をかけられて、羞恥プレイの如く校舎を歩いてきた俺だ。

今はジーンの部屋に居るんだが、なんで俺はあんな辱めを受けたんだ？

数十分前の事を思い出せない。

一体俺の身に何が……

「これが“月日、マゾ訓練でキレるの巻”ですね

「ありがとね。他にもある？」

「ええ、これは“月日、錬金術講義で教官に説教をするの巻”です」

「あらあらまあまあ」

「こちらが“月日、国軍将官に喧嘩を売るの巻”ですね」

「…負けた？」

「ええ。完敗だったようです」

「……………」

「どれからお聞きになれますか」

「うーん。じゃあマゾ訓練編で」

「解りました」

そして流れる俺の啖呵。

“諸君！！ 派手に行こう！！”

あああああ！！ やめてー！ツ！！ 聞きたくなーい！！ 恥ずかしいから、恥ずかしいからヤメテ！！

そうか、現実から目をそらせてただけなんだね。アハ、アハハハ。

・
・
・
・

上記のような事態になったのは他でもない、お袋が来たからだ。

その後、本当縄をかけられたまま校舎を横断し、女子寮のジーン・ルールールの部屋に連行された。

もうね、道行く人の眩きが忘れられない。

“え？ シグ、ルド…君？”

“あ、変人がまた何かやってるし”

“お、本当だ。ジーンさんも可哀想にな、あの変人に付き合わされて”

“にしてはちょっと嬉しそうな顔してねーか”

“あ、うそっ、シグルド君ってそう言う趣味？”

“うわ、いくら変人でもそれは無いわー”

“そんな、好きだったのにつ！！”

そんな声が耳にこびり付いてる。

あ、いや、最後のはそう言うのが合っても良いんじゃないかと言う願望です。

てかオイッ！！ トラウマってレベルじゃねーぞ！！

精神が病むぞ！！ だから離して！ お願い、僕を解放して！！

何度そう叫んだ事か、しかしジーンは無情にも縄を解く事はなかった。

しかも周りの皆はそういうプレイだと思ってやがる。自決しても可笑しくなくらいのプレイだった。

ジーンの部屋に入ったは良いが、そこにはルールールーが居て、物凄い生暖かい目で見られた。大丈夫、お姉さんは信じてるよ。って感じで。

「ごめんね、シグ君。お姉さん何か間違ってたのかもしれないね」

そんな事を言っただけで部屋から出て行った。

お前は何を言っとるのかと、一体何を思っただけでそのセリフを言ったのかと、問い詰めたくて仕方が無かった。

まあ、俺が言葉を発する前に出て行ってしまったのだが。

「ルールは少し突飛な思考回路を持っているので暫くは戻ってこないかもしれないね」

あ、そうなの？

あれか不思議ちゃんか。

「ですが、計算どおり……」

あくまで無表情にそう言うが、まあ、もういいよ。

俺、ジーンさんの思考は理解出来ないから。

「そう言えばシングルド」

「ん？」

「手紙の数が少ないとイズミさんが嘆いておられましたよ」

「え？ マジで!？」

「ええ。2ヶ月半で5いえ6通でしたか」

何故把握しているのか怖くて仕方ないが、間違っでは居ない。

「ですね」

「……これを見て下さい」

そう言って机から取り出してくるのはお菓子の入っていたであろうアルミの箱。

蓋を開ければ30通くらいの手紙の山だ。

凄いな、こんなに手紙書く物なのか？

いや、女性だからかもしれないが……でもお袋も一応女性だし、沢山書いた方がいいのか。

「へえ、ジーンって家と頻繁に連絡とってるんだな」

「……………」

ジーンは一瞬動きを止め、次に箱の中の手紙を一通差し出してくる。

俺は首を傾げながら、その手紙を見る。

「あつらあ」

なんとそこにはイズミ・カーティスの名が。
と言っ事は。

「あーもしかしてそれ全部、その」
「ええ、イズミさんからの物です」

謝れば良いのか、それとも驚けば良いのか反応に困った。

「あと実家と連絡を取った事は4度ほどです」

あ、やっぱりそんなモンだよな。

「ええ。ここ二ヶ月ほどは貴方と一緒に居て毎日が充実しておりましたので。暇を潰す為に手紙を書いていましたが、それも貴方と出会ってからは退屈と無縁でしたから」

「って事は結構前から居たんだ」

「ええ。寮に入ったのは式の1ヶ月ほど前でしたね」

「へえ」

「本来なら貴方もそれくらいの余裕を持って受け入れられる予定でしたよ」

「そうなの？」

「ええ。上位10名ほどは1ヶ月の猶予で様々な事を事前に知る事の出来るシステムでしたので」

「それって贖罪じゃね？」

「贖罪ですが、別段問題ないでしょう。実際大した情報にはなりませんでしたので」

「そんなモンか」

「そんな物です」

そう言ってジーンさんは箱をベッドの上に置き、俺の首から下がる縄をベッドの柱に結びつける。

「えっと、ジーンさん？」

「立ち話もなんですから座ってください」

なら縄を解け、後ろ手に縛られて座るのってシンドイんだぞ。
あと、逃げないから柱に括らないで、お願い。

「どうしたんです?」

「いや、逃げないからさ、この縄を」

「おすわり」

「…い、いや。犬じゃないんだか」

「おすわり」

「だ、だから」

「おすわり」

「……はい」

ジーンさんはベッドを指差して命令してくる。

俺はそれ出来るだけ逆らったが、無理だ。無理だよ!! やめてよね!! ジーンさんに勝てるワケ無いでしょ!?

ジーンさんも俺の隣に座り、膝の上に手紙箱を乗せ一枚づつ読んでいく。

もうね。これは新手の拷問かと。

いつその事殺してくれと思ったね。

なんせ、手紙の内容は俺尽くしだった。

曰く、シグルドの友達ならばシグルドを見張って欲しい。あの子はすぐに無茶をするから。

曰く、シグルドは無理してないだろうか? 手紙を送ってくる回数も少なくて不安だ。

曰く、シグルドから手紙が来たよ。私の身を案じてくれて泣い

た。

曰く、シグルドに虫が付いたら殺してもいいからね。

曰く、また手紙が来たよ。学校の錬金術のレベルが低すぎて勉強にならないとか。

曰く、あの子は大丈夫？ 最近手紙が来ない、不安でしょうがないよ。

そんな感じだ。

羞恥で死ねたら俺は死んでいる。

俺は何でもつと手紙書かなかったのかと、お袋も親父も手紙で書いてくれたらいいのに。

あと、やたらくすぐりたい。やっぱり愛は偉大だ。

顔が熱くてしょうがない。

めっちゃくちゃ赤面してる自信がある。

「こんな感じの手紙が多数ですね」

「うっうっ」

「唸るくらいならもつとデリカシーを育てなさい」

「はい」

「これだけ愛される事は稀です、少し貴方が羨ましい。私は親と仲が良いとは言えませんので」

「あー、うん。まあ、うちは特殊だと思うけど」

「それでも、羨ましいですね。私は見ての通り混血ですので、奇異の視線と言う物もありますし。そのお陰で家族仲も微妙ですので」

そんな感じでジーンの少し込み入った事情やらを始めて聞いた。

なんでも4種くらいの混血見らしい。

どんだけだよ。

イシュヴァール・アメストリア・シン・ドラグマらしい。

マジでどう言う家計図なのか興味が出てくる。

聞いてみると、冒険家やら密輸業やら国外逃亡の手助けやら、代々そんな感じの事を生業としてきたそうなの。

ジーンの両親は技師と密輸業を生業としているらしい。相性はいいだろうね。

でもまあ、外に対して警戒心の強いご両親故かご近所との付き合いも良いとは言えず。

家庭内でも会話が少ないそうなの。

まあ、色々あるわな。

「夢は軍人となって両親を豚箱にぶち込む事です」

彼の言葉としてそんな事を言われたが、俺に何を求めているの？
凄い良い笑顔でそんな事言われても俺は反応できないよ？

「まあ、協力出来るならするお」

とりあえずそんな言葉で濁しておいたが「是非一緒にうちの両親を捕まえましょう！！」なんて言われて抱きつかれた。キラキラした目で言うもんだからちよつと見とれた。

で。

そんな状態の時にこの部屋の扉が吹き飛んだ。

まあ、言うまでもなくお袋だ。

「シングルドー？ ずいぶんお楽しみだったみたいだね」

これまた良い笑顔だ。

俺の目には阿修羅にしか見えないがな。

「あ、お袋久しぶり！！　つかコレ見てから言ってくれ」

俺は手を目立たせるように前屈みになって言う。

てかおい。お袋の後ろに上半身半裸のアルフォードが見えるんだが、アイツは一体なにをしとるんだ。

アルフォードは俺のそんな視線に気付いたのか、ニヤニヤしながら声をかけてくる。

「いやな、お前を育てた親だ。どんな化物かとな見に行ったんだが」

そこで堪えきれないとばかりに笑う。

「がっはっは！！　お前はやっぱり面白いぞ！！　お前の親父さんの弟子になりたかったが断られてな！！」

がっはっは。となおも笑う筋肉。

てか親父来てるのかよ。

「シゲルド」

「お、親父ー！ーッ！！　助けてくれ！！」

「…生きる」

スイツと視線を逸らされた。

「無視してんじゃない！！」

なんて言葉と一緒にお袋にドツカレ蹴られ

“ あれだけ目立つなと言ったでしょうが!! ”
“ ジーンさんに聞いたけどアレを使ったらしいね、どれだけ馬鹿な事をしたかわかってるのかい!?”

“ どれだけ心配したと…… ”

最後には抱きつかれてワンワンと泣かれた。
かなり堪えた。

でも縄を解いてくれないから抱きしめ返す事も出来ないのよね。

んで泣き止んで来た時に、ジーンが挨拶を始めた。

「初めまして、ジーン・ノルメです。手紙のやりとりは沢山しましたが、始めてお会いしますね」

「うつくすつ。ああ、見苦しい所を見せたね、私はイズミ・カーテイスよろしく」

「はい。よろしくお願いします」

そこからはポンポンと俺の情報をやりとりして、あっという間に仲良くなった。

「ああ、そうだ。良い物があるんです」

そんな言葉と共に出てきたのはダンボールの箱で、中にはカセツトテープがギッシリと。

もうこの時点で嫌な予感ビンビン感じていたんだが……。

“ 月 日：初めての演説の巻 ”

“ 月 日：僕は最強伝説の巻 ”

“ 月 日：寮生活初めての……の巻 ”

“ 月 日：銃剣訓練で教官を負かすの巻”

え？

全部身に覚えがあるんだ。

てか3つ目ののは怖くて「……………」の部分は何かとか聞けないけど、他のは全部身に覚えがあるんだ。
それってもしかして……………。

「シグルドと行動を共にする事が多かったので、自然と集まってしまったシグルドテープ集です。どれかお聞きになりますか？」

そんな事を言われ、俺は現実を手放した。

そして冒頭に戻る。

・ ・ ・ ・

“俺達は犬か、それとも狼か？”

ああ！！ いーやあー！！！！

“皆さん、俺を見て下さい”

やめて！！ 本当やめて！！ 死ぬから俺が死ぬばいいんだろ！？

“あのエスパーとかじゃ……………”

ん？

“新しい時代の脈動を！！”

ひいひいひいひい。死ぬ、死ぬからああ。許してー！ー！

“これが俺の！！ 全力全開！！”

ひい！？ え？ ドドドド童貞ちゃうわ！！ では無く、どうやって音拾ったんだ！！

そんなのが、2時間に渡り上演された。

俺のHPいくつだと思っていやがる、始まって20分で死んだわ。

親父もアルフォードも助けしてくれず、廊下で筋肉について盛り上がってるしさ。

これはね、拷問だよ？

知ってるかな、人はただ過去を振り返るだけでも頭を抱えなくなる思い出があるんだ。

それを、それをおおお！！ 両親の前でしかも音声だけだと！？ いらん妄想掻きたてて余計死ねる！！

お袋は一喜一憂しておるし、ジーンは事細かに俺の事を説明するし。

なんなの、もう許してくれよ。

上演が終わってからジーンの“シグルド観察日記”とやらがお袋の手に渡った。

なんでもお袋が頼んでたらしい。

普通に死ぬ、自決する。

「私の個人的な日記にもシグルドの事が多い、というかシグルドの事を書けば一日分は埋まりますので、大した差ではありませんが」

「まあ、この子は良くも悪くも目立つからね」

「ええ容姿端麗、その上よく解らないカリスマ、一緒に居て楽しい。これだけそろえば目立つしありません」

「あははは。ジーンは良く解ってるね！！うちの娘になる？」

「よろしいのですか？」

「……まずは私を超えて貰う」

「考えておきます」

なんてやりとりもあった。

そのまま、意気投合し続け、お袋と親父は一拍して帰った。

お袋と親父とアルフォードとジーンと俺で夜通し語り合った。

親父とアルフォードは俺の部屋で寝たんだが、俺はお袋に抱きつかれてジーンの部屋で寝た。

ルーさんから涙目で「私がしっかりしないとシグ君が……」って言われた。

あの人は何を考えてるんだ。

ちなみにルーさんはジーンと一緒にベッドで寝た。

ボソボソと話し声が聞こえてたが、聞き取れなかった。

カセットテープと観察日記とやらは、お袋が貰ってた。
泣いた。

帰り際に、

「全く、もう目立つなどは言わない、でもね、出来得る限り自重しな。本当に心配でたまらないよ。あと鍛練のノルマを増やす事、軍の将官であれ大総統であれ、負けるな。いいね」

なんて事を言われた。むちゃくちゃだが、確かにそれくらいの技術がないと俺は安全も確保できない。

親父からは、

「肝が冷えた。が、お前はお前のやりたいようにやれ、俺達は俺達の出来る事でお前を守る」

親父は本当なんて言うのか厳しいような優しいような、そんな人だ。

あと俺からグリさん宛に伝言を頼んだ。

用件は大総統キング・ブラッドレイについて。

正直、あの人は傀儡とは思えない。

調査の結果とかは大分先になるだろうけど、あの人は油断ならない。少しでも多くの情報を集めておきたい所だ。

味方であれ敵であれ、な。

まあ、そんな感じで俺の一日が終わった。

疲れに疲れたが、取り合えず一ヶ月に10通手紙書くのをノルマにがんばろうと思う。

17話：休日と評価と訓練と炎

お袋来襲から早2ヶ月たった。

とりあえず、手紙は40通を超えた。

何を書くかかなり困ったが、日常の事をつらつらと書いて送ったら大変満足してたようだ。

なんで解るかって？ ジーンさん経由で知ったんだよ！！

ジーンさんもアルフォードもお袋と親父経由で俺の事を知り尽くしてるんだ！！

ある意味、怖い。怖すぎる。

「今月は12通送ったんですね、しかし、あの事件の事を書かないのはどうかと。私の方で補足しておきました」とか言われるんだ。秘密も何もあったもんじゃない。

まあ、重要な秘密はちゃんと隠されてるが、それでも、ねえ？

ジーンさんはジーンさんで色々とお袋にモノを送ってるみたいだし。

アルフォードは何でか知らんが、筋肉が増した。

アルフォードはあれだ、親父の筋肉に憧れているらしい。

フンツ、って掛け声で服が吹き飛ぶアレだ。

お前は服何着破けば気がすむのよ。それにその吹き飛ぶ事にどんな様式美があるのよ、お前は脳筋ってワケじゃないのに、行動だけ見ると本当脳筋にしか見えないってどうなのよ。

そんなアルフォードの希望もあり、俺は休日に手合わせをしている。

平日は自主鍛練、体造りは略終わっていると思ったが、これに終わりはないのだそう。

あと、型の確認と更なる熟練を目指している。

そして休日になるとアルフォードを誘って訓練室を借り、手合わせ。

今の所20戦12勝3敗5分。

さすがに俺だ、アルフォードも強い事は強いのだが、正統派の武術を習っていたかどうかと言うのは大きい。

力は強いのだが、俺の体術は基本柔術なのでむしろ合わせやすいのだ。

当初は俺とアルフォードだけだったんだが、一ヶ月も経てばどこからか話を聞いた人が沢山参加してきた。

現在は総勢30名ほどで手合わせしている。

15:15で別けてやつたり、トーナメント形式にしてみたり色々だ。

これには上級生だけではなく、教官の一部の人も参加している。

まあ、一部はお目付け役なのだと思うが、いつの間にか巻き込まれている。

てか巻き込んだ。

変人、変人と言われる割には何故か人が寄ってくるこの不思議。

ジーンに言わせれば

「貴方は、そう、眩しいんですよ。誰もがそう在りたいと願う、そんなある種の理想の姿を体現していますから」

らしい。

俺は良く解らないが、皆変人になりたいって事ですね！！

そう言ったら、アルフォードには笑われ、ジーンさんには溜息を付かれた。

凄く、不満です。

でもしゃーねーじゃん。俺は良く解らん、俺は俺のしたい事をしているだけなんだが。

「お前はそれでいいぜ。呆れるほど自由奔放に駆け回れ、障害があるなら俺が壊してやる、敵がいるなら俺が殺してやる、お前はただ自由に在れ」

これはアルフォード。

でも、まあ

「障害があるなら飛び越える、敵がいるならシカトする、自由なのは行動に縛られないって事だろ。俺とつるむならお前も自由で在れ、アルフォード」

ははは、それが出来たらな。

アルフォードらしからぬ、どこか達観した笑みでそんな事を言われた。

アルフォードは頭が良い。

外見は本当脳筋なんだが、こいつは頭が良い。

ジーンには及ばないが、それでも十分すぎる。

4ヶ月で錬金術の基本をマスターする脳筋がどこに居る。
4ヶ月で国家資格を取れと薦められる奴がどれほど居る。

まあ、まだ短い付き合いだ、込み入った事を聞くのは憚られる。
あいつが話したくなったら話してくれるだろう。

・
・
・
・

ともあれだ、今日も今日とて俺他多数の生徒と組み手をする。
いつの頃からか、ジーンとルーラーが見学に来るようになって
たので怪我とかは気にしなくなった。

「アルフォード、今日はどうするね」

「さてな、俺としてはパンツ一丁にコート着て校舎を走り回れつて
の以外ならなんでも来いだ」

「あーあれはね、違うのよ。俺だけ変態扱いされるのは寂しいだろ
？ だからほら同胞を作ろうかと」

「おまつ、筋肉モリモリの男12人があの姿で走り回ってる姿を想
像してみる。地獄だろーが」

「……もう、言わないヨ？」

解るだろうが、負けた側の罰ゲームだ。

しかしまあ、あれは正に地獄だった。

提案した俺も青褪めるような変態集団だった。

幸い休日だった事もあり、目撃者は少数だったが、ちょっとした

トラウマになった子もいるんじゃないだろうか。

「頼むぞ……アレが癖になった馬鹿も居るからな」

「マジで!？」

「ああ、2回生のB班班長だったか。夜な夜なコート着て街に出てるらしいが……」

「うわぁ」

それはマズイ。

今度血祭りにあけておこつ。

我が業、かくも深き物であったか……

「ご心配には及びません」

「ん? 何故」

「私とミリアリアで罰して置きましたので」

「え?」

「おそらく近日中にでも警邏にしょっぴかれると思います」

……何やったんだ。

「ああ、お前等派手にやらかしたらしいな」

「シグルドほどではありあませんが、程ほどに」

「え? ちょっとアルフォードさん。何があつたか知ってんの?」

「まあな。割と有名だが」

アルフォードはチラリとジーンを見る。

ジーンは目を瞑って知らぬ顔をしている。

「まあ、あれだ。その変態を昼の衆人観衆の中でお披露目させたら

しい」

「……どうやってだよ」

「そこまでは知らんが、もう可哀想になるくらいにリンチされたらしいぞ」

さもあろうよ。

町人が許さんだろう。

しかし、どうやってそんな変態行為を昼行わせたのか……悪魔の頭脳だなあ。

「まあ、いいや」

「いいのかよ」

「いいだろ。素質のある奴つてのはいつか発症するもんだ、俺等が対処出来る環境で発症したんだから儲け物だと思っておこう」

「…そんなもんか」

「そんなもんだ。でだ、罰ゲームだが、今回はアレだ、負けた方は“ロイ・マスタングをおちよくる”って事で。手段は任せるが、ロ

イに発火布を抜かせるくらいにおちよくる事」

「そりや楽だな」

「でもまあ、あれだ、焼かれないように気をつけよう」

あの人たまに俺の部屋に来て「焼かれないか？」とか言ってくる。研究しすぎで頭沸いてきたんだろう。

いつもヒューズさんに連行されて帰っていく。

まあ、この罰ゲームもロイの気晴らしと皆の挑発技能を向上させる為の物だから悪い物でもない。

他の意図はないヨ？

あわよくば俺以外を標的にしてくれとか、ロイ・マスタング苦しめよ、お前も苦しめよ。とかそんな事は全然思っていない。

研究しすぎて疲れてるだろうから気晴らしした方がいい。
その為の標的だ。

「それならば問題ないでしょう。では合図しますよ」

「あいさー」

「おう」

ジーンさんが見学しに来だしてから、罰ゲームの中身を判断するのは彼女の役目みたいになってる。

変態騒ぎがよほど嫌だったのか、それとも仲間外れにされてそれを理由に乱入したかったのか……

まあ、彼女がいると落ち着くので問題ない。

「では、始め！！」

合図と共に俺率いる10名とアルフォード率いる13名が駆け出す。

集団戦は楽しい。

連携やらなんやらを駆使するのは本心が躍る。

・
・
・
・

そんな感じで俺達は休日を過ごしている。

たまに街に出て買い物をしたり、友人と飲みにいたり、かなり有意義な学校生活をすごしている。

最近ではアルフォードやジーン・ルーなどの意外な一面を発見したりと、毎日が楽しい。

錬金術の研究は正直言つて学校で得る物はなかった。
やはり戦場に出ないと目的を達成する事は難しいようだ。

ただまあ、俺専用の人体練成陣はすでに完成間近。
人体練成と言つても、治療だが。

あれは分類すると人体練成だと思つんだ。だって内臓とか骨とか、
まんま人体じゃねーか。

概要はローコストでの治療と、ハイフリックの限界の消耗を如何
にして減らすか。

俺に対しての治療ならば、比較的簡単にできる。

ただ、他人の体になると難易度が跳ね上がる。

持病の事であつたり、手術を受けていたり、疾患かと思えばそれは
個人の特色であつたり、そう言つた事で様々な知識と技術を要求
する分野だ。

医者と言つ職業の難易度の高さを思い知つた。

まあ、何故そんな事が解る？ と聞かれれば、休日訓練で治療し
ているのは俺とルーだからだ。

人体実験？ まあそうだが、本人の了承を得ているので問題ない。
それに動物で試して成功した物しか使つてないのでまあ、マシンだ
と思う。

動物に関してはちょっと悪い気がする。

死体だったり、怪我している動物を使つたりと、まあ、外道と言
えば外道だが、助けたのも居るので問題ないだろ。

ニャンコが居なければ動物を効率的に捕まえてくるのは難しいが、
今の所は問題ない。

俺専用練成陣も完成の目処が立つたので、次に研究するのはずば

り！！

“レントゲン”だ。

なにもX線を使おうなどとは思ってない。

ようは人体練成の応用で、対象に陣を書いて人体の情報を頭にちよくせつ映し出せないかと言う試みだ。

かなり難航しているが、この陣が完成すればお袋の治療対策がかなり進歩する。

他の人の治療をする際にも必須の陣となるはずだ。

契約とのコラボも考えてはいるのだが、なかなか難しい。

意思のある物との契約は相互に関係を結べば結ぶほど強くなる。

人に対しての契約は今まで一度もしていないのでどうなるか本当にビビッてるからなあ。

順風満帆と言って良い毎日。

そんな中、ある無能がこんな事を言い出した。

「カーティス。君は休日に訓練を行っているらしいな」

「ん？ ああ、ロイか。してるけど参加する？」

「ああ、参加したいな」

「え？」

おかしい。

なんだこのロイは？ おかしい、おかしすぎる。

「発火布はなしだぞ？」

「無論だ。人に向かってアレを使う気はない」

「オイ！！ 俺につかったやろうが！！」

「お前は人外だ」

断言しおつた！！
否定したいが、微妙に人と違うので否定できない！！
ちくしょう！！

「でだ、参加するのはいいのだがな、君達は今まで体術しか駆使していないだろう？ よくて軍刀レベルだと聞いている」

「まあ、銃を使うわけにもいかんだろ？」

「それは弾丸があるからだ、そうだろう？」

「ああ、怪我は良いけどさ、さすがに死人はねえ治せないから」

「……安心したまえ！！ 良い物を持ってきた！！」

そう言っ出て出てくるのは軍に正式採用されているライフル。
それを俺に向かつて構え、撃った。

俺は半身なつてそれを避ける。

「て、おい！！ 殺す気か！！」

「ツチ。いや、殺す気は無い。みたまえ」

顎で促される先を見る。

そこには黄色の絵の具がぶちまけられている。

「おお。ペイント弾か」

「ああ、これで銃撃戦も可能だ」

なるほど、これならもつと本格的に訓練できる。

今やっているのはあくまでも体術だからな、卒業後有効かと聞かれれば首を捻ざるを得ない技術だしな。

「こちらからは50名までなら用意できる。序でに再来週の日曜に野外訓練場の予約をとっておいた」

「用意万端ですね」

マジで。

何か企んでるとしか思えない。

「50対50での対抗戦と行こうじゃないか」

「ふむ。と言う事はアレですか上級生対俺達みたいなの？」

「いや、私は関係なく有能そうなのをかき集めたが」

「にやるほど」

「ちなみに君の取り巻きには断られた」

「でしようねー」

「で、どうするっ？」

「ふーむ、よし。やりましょう！ー！」

「そこなくてはな」

そんなこんなで対抗戦イベントが立ちました。

この企画がまさかあんな事になるだなんて……俺には予想も出来なかった。

18話：俺と策と炎と決壊

「殿！！ B班が大通りにて接敵！！」

「で、あるか」

「同じくC班接敵！！」

「で、あるか」

「シグルド、A班は見つからずに移動中、あと数分で背後を取れる
ようです」

「で、あるか」

「てか、こいつは何でこのセリフしか言わねーんだ」

「シグルドのする事に意味を見出すのは難しいですから、気にしないのが一番です」

「まあ、そうなんだがな」

「……で、あるぞ」

さあ、やって来ました日曜日。

ロイと約束していた50：50の大規模演習だー！！！！

勝利条件

・ 敵大将を討ち取る。または敵本拠地を制圧する事。

補足

・ 大将は腕章『大将ダヨ』を装備する事。

・ 敵本拠地には旗を立てる事。

・ 制圧には3名の兵が敵本拠地内2mの範囲にいる事、その範囲内に敵兵がいない事。が条件となる。

・ 旗は赤・青で区別し、一度旗を立てると移動は出来ない。

敗北条件

・大将を討ち取られる・本拠地を制圧される・歩兵部隊が殲滅される。

注意事項

- ・第13野外訓練場施設内のみを戦闘区域とする。
- ・戦闘区域からの脱出は逃亡あつかいとする。
- ・開始・終了の合図は花火を目印にする事。(1)
- ・開始まで部隊の展開を禁止する。
- ・殺しは無し。
- ・錬金術も無し。
- ・捕虜も無し。
- ・通信機の使用は無し。
- ・装備は支給されたライフルとペイント弾(黄)(2)を使用。
- ・近接攻撃はゴムナイフ・刃引き軍刀(3)に限定。
- ・3発被弾すると死亡扱い。
- ・誤射もカウントする
- ・ヘッドショット、ハートショットは武器に左右されず一撃死に認定。

・急所以外のペイントは退却後、治療班の治療を受けると5分のインターバルを置いて復帰可能。

・治療は、ペイント弾(黄)の上から治療(白)を塗る事が該当される。

・治療班は作戦開始前に指定された場所から移動できない、最低2名そろって治療班とする。治療班に選ばれた生徒は大将になれない。

・治療施設の制圧は可能とする。制圧は治療班2名の死亡認定とする。

- ・死亡認定された者は速やかに戦闘区域から脱出する事。
- ・見学は第12野外訓練場のビルからする事。

・逃亡者・死亡者のカウントは、各部隊とは別に頼んだ生徒20名の選別班が行なう。選別班の服はピンク一色の物とする。賄賂が蔓延る場合シグルド・カーティス及びロイ・マスタングの制裁が下る。

・負けた部隊はこの演習で汚れた服の洗濯と、施設の掃除を行う事。

1

開始の合図は花火・終了の合図は花火と狼煙。狼煙の色によってどちらの勝利か判定できる。

2

ライフルと弾丸は双方に同じ量配布される。ライフル50丁、弾丸700。

死亡認定を受けた者から弾薬を補給する事は可能。

3

ゴムナイフ・刃引き軍刀の刀身部分には特殊塗料を塗っているの
で、塗料の付着を当たり判定とする。

配給は一人につきナイフか軍刀1本。

・ ・ ・

以上が俺とロイで考えた今回のルールだ。

まあ、多少遊びと言うか悪意もあるが。

抜けてる所もあるだろうが、細かい事はいいんだ。

これだけ大規模の訓練が出来る事が嬉しい。

なんだかねで軍系統の訓練と言うのは地味な物が多いしな。

それにだ、団体行動で銃を撃てる、しかも今回は市街地戦。モデル銃などを持っている人ならこの状況での身の高ぶりが解るだろう？
トリガーハッピーと言うわけではないが、やたらと撃ちたくなく
てくるんだよ。」

その所為か、皆で集まって作戦会議している時に、何か言えと言われ調子にのって信長してしまったんだ。

「うぬ等は何を望む？」

「シグルド…また、」

「うぬ等は、何を、望む！！ 勝利・栄光・栄華！！ それとも敗北・敗残・挫折か！！」

「まあいいでしょう、コレクションが…」

もちろん熱くなった俺にジーンさんの声など聞こえるわけもなく。

「栄光に照らされた赫々たる勝利か、血を啜り糞尿喰らう惨めな敗北か！！ うぬ等は、何を、望む」

「決まってるだろ、シグルド！！ 俺達は勝つ！！ そっだろう野郎共！！」

「当たり前だ！！ 俺達が勝つ！！」

「そうよ！ 負けるなんて絶対嫌っ！！」

「シグ君、お姉さんがんばるから！！」

「ならば撃て、絶やせ。炎の系譜などに魔王の進行を妨げる事など、無為と、知らしめよ」

“ おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ！！

！”

「ちょっとイカれた位の声があがる。

「A隊、B隊、C隊は開戦と同時に散開、奴等の部隊を取り囲み、十字の華を咲かせよ。各部隊の進行速度はA隊に留意。B、C隊は上手く補佐せよ。敵部隊を殲滅・撃退後、A隊C隊は囷となり、西と東に分かれよ。B隊はすぐさま本拠地に撤退後、スナイパーを配し徹底的に守りを固めるのだ」

「了解！！！！」

「我等、0隊は速やかに敵本拠地を索敵。制圧か或いは、炎を……討ち取る」

「細かな所をジーンが補強していき、

目の端に煙が上がるのを見て、俺はそれを見上げる。
他の皆もそれを見上げ。

ドオーンッ

朝時ではあるが、綺麗な花が咲いた。

「開幕ぞ！！ 皆、戦を、興せよ！！」

・
・
・
・

で、俺達は散開、冒頭の会話は、現在ビルの屋上を移動中なんだが、そこから見えた事を皆が報告してくれているのだ。

しかも俺は信長やめるタイミングを逃し、未だに続けていると言
う。

メンバーは俺・ジーン・アルフォード後は以前の制圧部隊アシユ
フォード率いる6名だ。

俺としては俺とアルフォードはバラけた方がいいと思っただが、
ジーンさんの提案で戦力を集中させた。

他の隊の指揮官はジーンさんが推薦した人がやっている。

A隊のミアリアリ以外は顔を知ってる程度の付き合いだ、ジーン
が推薦するくらいだから優秀なんだろうけど、正直めちやくちや不
安だ。

ちなみに今更だが、この訓練施設はだいたい1平方kmあるらし
い。

まあ多分800くらいだとは思うが。

以前図で見せた施設構造の外側だ。

内装は背の低いビルや瓦礫、小屋などがある。

てかこの広さで通信機無しって結構痛いな。

目視でしか状況を判断出来ないって言うのは本当に困る。

部隊の展開具合もさっぱりだし、A隊なんて今は影も形も見えな
い。

「シグルド」

「ん？」

「ロイ・マスタングと思わしき人影を発見」

「んだと!？」

俺達は移動を中断してジーンの視線の先を確認する。

B隊とC隊が相手している部隊、大体10名ほど。その少し後方で指揮をとっているのが、先ほどジーンが言った人影だ。

俺は目を凝らし、それを確認する。

顔ははつきりと見えないが、あれは紛れも無くロイだろう。

だてに人体を専行していない。

見ただけで3サイズを把握できるくらいには…いや、やめとこ。

「予想が外れたか」

ロイの腕に腕章は見えない。

アレの気性と実力から絶対あいつが大将やると思ってたんだが、それに前線で指揮を取ってる事も予想外だ。

「なるほどありゃーロイ・マスタングで間違いないな」

「やっぱそうか」

「おお」

アルフォードが言うなら間違いない。

こいつはマジで万能型だ、視力もどこの民族かと思うほどある。

くっそ、なら大将は誰だ？ ヒューズさん…は無いな、あの頭脳

を通信機の使えないこの状況で腐らせるわけ無い。

「まずいですね」

「どうした？」

「B隊が少し前に出すぎています」

俺は焦点をずらし、全体をしてみる。

結果、

「あーこれマズッ」

今道路を挟んでの銃撃せんをやらかしているワケなんだが。

敵 敵
敵 敵

B B
B C
B C C C

こんな感じになってる

道路の中央には瓦礫が障害物になって隠れる場所もあるにはあるんだが、B隊には弾をあまり配給していない。

拠点防御を頼む為の部隊だったので、殆ど近接武器で対処して貰うつもりだったからだ。

しかも軍刀ではなくナイフ。

おそらく、あちらでもロイ・マスタングを確認したんだろう。

腕章の有る無しに関わらず、あいつは優秀なんで積極的に落とすに掛かってるんだと思う。

しかも手勢は10人ほど。B隊C隊を合わせると30名、俺でも落とすに掛かりたい布陣だ。

それにA隊が周り込んでいる事から、B隊は自分達に敵の銃撃を

集中させたいのだろう。

でも、これは、どっかで見た事のある布陣のような。

「なあ、これって……」

ジーンに問いかけようとそちらに体を向けた瞬間。

パンツ

俺の後ろに立ってた奴の胸でペイント弾が炸裂、衝撃でそいつが尻餅をつく。

「狙撃!？」

「やっべ、隠れる!！」

「ゴホツ、痛え。え!？ マジかよ、ハート？ しかもこれ絶対、殿が狙われてたよな」

うええ、俺これで退場とか……

そんな声を無視して俺達は給水塔の裏と、階下に行く階段の陰に隠れる。

ジーンが狙われなかったのは助かったが……

「くっそ、読まれてたか」

「そのようです」

すぐさまジーンの返事が返ってくる。

給水塔の裏には俺とジーンと他2名、階段の方にはアルフォードとアシユフォード他3名が。

しかし、スナイパーの配置が早すぎる。

「さすがロイ・マスタング」

「こうなってくると、A隊はすでに撃破されているかもしれません

……」

「え？ そうなんですか？」

最後のは隊員Aとでも考えてくれ。

「ああ。正直甘く見てた」

「で、でも、その撃破されているかも、ですよね」

不安気に聞いてくるが、まあ、多分撃破されてるだろうな。

スナイパーの配置って言うのは、高い所に居れば良いってモンじゃない。

それに、屋上を走っていたからと言っても、こんな短時間で発見するのは割りと難しい。

ここを通る事を事前に予測していたとしか思えない。

「ええ。ですが、希望的観測は止めておいた方がいいです。少しでも撃破されている可能性が過ったならもう無い物として立て直す方がいいですから」

「だな」

「うっ、解りました」

「A隊には何人いた？」

「ミリアリア率いる10名です」

「ミリアリアが落ちるのは痛いな」

「ええ。それに弾薬の配給も一番多く渡していました」

弾薬は死亡した奴から奪えるってルールがあるからかなり厄介だ。

それに現状俺等は身動きが取れない。

そしてロイが率いるのはたった10名の兵隊。

B・C隊の者がA隊の撃破を想定していなかったなら、マジでやばい。

あのまま交戦し続けるって事は本拠の守りが無いのだ。

A隊が撃破されていなかった場合であっても、この状況を見るに補足されているだろう。

しかも向こうの残りの兵隊は40。

即座に殲滅されて可笑しくない差だ。

A隊に向かった数が少数で足止めを任務にしているなら最悪だ。本拠が落ちる。

「やばいなー」

「ええ。敵本拠地は無視しますか？」

「それもいいが、大将を討ち取るのはかなり厳しいぞ」

「広さが広さですからね」

どこかに隠れられたら見つけるだけで一苦労だ。

「あ、B隊撤退してますね」

お、良い報告だ。

「……どうやら、弾を撃ちきったようです」

「……あいつらアホだろ」

「ノーコメントで」

まあ、いい。この状況を打破するか考えよう。
不安だが、本拠はB隊に任せた。

「つてもなあ、どうしよ」

「圏を出して、駆け抜ける。位しか思いつきませんね」

「だよな、スナイパーの位置も解らないし」

「ええ。ただ道路を挟んでいる事は解っているので、射線はある程度予測できます」

実戦の場合ならこれは使い難いな。
何名かは死ぬ事前提の話だし。

『シグルドローー！！ ジーンツ！！ 逃げる！！』

突如アルフォードが大声を上げてくる。

俺とジーンは顔を見合わせる間もなく、階段とは別方向に駆け出す。

不規則にジグザグに走る、後ろに2人も似たような機動で付いてくるが一人が狙撃される。

足に当たったらしく、衝撃でこけているが、怪我はないようである。

俺はビルから飛び降り、着地。

すぐさま体制を整え、少し遅れて飛び降りてきたジーンを受け止める。

素早く下ろし、次、と上を見上げるが。

「む、無理ですよー！！！！」

びびってるらしい。

まあ、普通はビルわな、なんせ二階建てのビルの屋上にいたんだから。

まともな神経じゃ“飛び降りる”なんて選択肢は浮かばない。

「来い！！ 受け止める！！」

「えええええ！！」

「もう無理です」

「つつ、狙撃か」

「ええ。ビル際なので撃ってきてませんが、あれほどの腕があるのならすでに撃たれてます」

「解った」

敵が思慮深い人でよかった。

あの位置で撃たれると衝撃でどうなるか解らない。

「引き返せ！！ アルフォードが居たなら合流！！ 足撃たれた子がまだ生存しても救助せずに走れ！！」
「解りました！！」

あの弾の衝撃は結構キツイのでまだ立ち上がれてないかもしれないが、それでも生存しているならそう言う作戦だ。

スナイパーの常套手段でもある。

まあ、あの子が逃げれるかどうか微妙だが。

「ジーン、お前は……」

「私はB隊と合流します、私が落ちると終わってしまいますし」

俺とジーンを分けなかったのはそう言う理由だ。

ジーンが俺達の大将。

「貴方は、攪乱でもしてきますか？」

「そうだな、もうそれくらいしか出来ないな」

「ではロイ・マスタング隊には関わらないように、あれは明らかに釣です」

それは俺も思っていた。

少数での最前線、しかもロイ率いる部隊だ。

何か企んでるのが見え見えだ。

「あわよくば敵大将を仕留めてもらいたいですが、とりあえずA隊の展開予想地点に向かって下さい」

「解った」

「勝利条件は敵本拠地の制圧及び敵大将の撃破です。熱くならず、留意してください」

そう言っつてジーンは腰に下げていたナイフを俺に渡してくる。

俺はライフルを壁に立てかけ、残りの弾丸を全てジーンに渡す。

バックパック一杯に詰まってるので割と重いが、大丈夫だろう。

ジーンは力は弱いが、体の使い方が上手いからな。

「では後ほど」

「あいよ」

俺は左手にナイフ、右手に軍刀を抜き放ち駆け出す。

ジーンは二丁のライフルを引っさげて逆方向へ。

さて、道路を渡る所まで補足もされず、接敵する事もなく問題なかったが……。

これはどう言う事だった。

A隊の展開予測地点に到着したわけだが、なんとも……ほとんど生存していた。

しかし、彼等は屋内・物陰に隠れ、行動らしい行動を一切取っていない。

俺はとりあえず、部隊の後方から接近し、隊長であるミリアリアを探す。

窓を経由し、屋内を移動。

途中、味方部隊の者を3名発見したので聞いてみる事にする。

「おい。これどう言う事？」

「まあ、見て下さい」

3名はそれぞれ体の一部を示してくる。

一人は腕と脇腹に、一人は肩と足に、一人は両肩に、各二発ずつペイント弾を打ち込まれている。

「……出るに出来なくなったのか」

「そう言う事っすね。行き成り20名の部隊と接敵しまして。全員2発ずつ打ち込まれた後は放置、こっやって隠れて反撃の機会を狙ってるんですが、全然姿を見せやがらない」

お手上げですよ。

そう返してくる1人の言葉を聞き唾然とした。

多分、現在この場所に20名なんて大部隊は展開していない。

10名敵が居たら儲け物だろうが、恐らく2〜3名ほどのスナイパーを多角的に配置しているだけなんじゃないだろうか。

もしくは完全に放置しているか……

「つつ〜つつ!! やつてくれる……」

「ああ、マース・ヒューズ。流石の頭脳といった所か」

背後からミリアリアの声。

気配は気付いていたが、それを相手に出来ないくらい……悔しい。完全に手玉に取られている。

「……俺が見た所、8名しかいない、他2名はどうした」

「死亡扱い。一名は治療の為本陣に帰還しようと言った建物から出た所を狙撃された。一人は伝令に走らせようと言ったのだが……ビル脇から顔を覗かせた所を狙撃され一人死亡」

「……」

見てみるとミリアリアの肩と脇腹にも被弾した跡が見える。

3発。

3発被弾すると死亡扱いとなる、それは体のどの部位でも変わらない。

そして、二発被弾しているのは生きていると判断されると言う意味だ。

その意味がもたらす精神的な“まだ生存している”と言う思考は、ある行動を促す。

足掻く、と言う事だ。

ミアリアアが言ったように治療しようとしたり、まだ反撃出来る
と策を講じようとしたり。

そして、敵は正に、この精神誘導を行い、足掻いている所を狙っ
て、徹底的に叩いてきてる。

しかもこの策は敵に発見されれば終わりだと、そう言う認識を与
えるに十分な効果を持っている。

その認識は敵の姿を確認出来ない事で助長され、敵が2人でも2
0人でも変わらない。いや、始めに20人の部隊を展開していたの
だから、敵は多いとこちらは勝手に判断する。

結果がこれだ。

おそらくは3名の狙撃者を相手に8名が足止めされ、2名が落ち
た。

「くそっ!!」

俺はイラつきを晴らすかのように壁を殴りつける。

完・全・に!! 負けているっ!!

これは俺の失態だ。俺の采配で部隊が死んでいる!!

相手が上手いなんてのは事前に解ってたはずなのに!! 見通し
が甘かった!!

「そう熱くなるな、スナイパーの主な配置は大体予測できている。

まあ、相手も移動しているが、こちらの動きを把握しなければなら
ないんだ、それほど大きなポイント移動は出来ないはずだ」

「…っく」

「お前の行動力は買うが、今は雌伏の時だ。何も動く事がイコール
勝利につながると言うワケでもない。今の状態は精神戦だ。いくら
優秀なスナイパーでも今はまだ訓練兵、一時間もの間目を凝らせる

事は出来ない、2時間の精神集中は出来ない」

解っている。だけど……めちゃくちゃ悔しい。

ロイ・マスタングとマース・ヒューズ、まだ見ぬ上級生に、負けている。

負けられないのに、俺は絶対に負けたらダメなんだ。

膝を折るなどありえない、たとえ誰でも俺は負けられない。

これまで完全に敗北した事は一度も無かった。軍将官にも一矢報いている、アルフォードにも完敗した事はなかった。

だけど…今回のこれは、完全に敗北している。

動きを先読みされ、俺の思考すら手に取るように……。

俺がここに入れたのも、恐らくそう言う事だ。

「ちくしょー……」

「ふふ。ああ、そうだジーンはどうした？ お前と一緒に行動していたはずだが」

「…本拠に返した。B班と合流しているはずだが、詳細は不明。火花が上がっていない事をみるにまだ生きてる」

そうか。

ミリアリアは俺にそうかえし、微笑む。

俺は顔を眉を寄せミリアリアを見返す。

この状況のどこに微笑む要素がある？ 彼女が俺を唾うなどありえない。

「ああ、いやな。お前のその姿を見ると、今回の演習はして正解だったと思っただけだ」

それは……俺の無能を哀れんでいるのか？
それとも悦に浸ってんのか。

「……どう言う意味だ」

「そう怒るな。ジーンがいつか言っていたな“お前は眩しい”と」
「ああ」

「私もそう思う。恐らく大小の差は在れ、皆が感じているはずだ。
お前の誰にも頭を垂れない姿に、どれほど階級の差がある者にも物
怖じしない姿に、己を貫く姿に、誰もがお前のように成りたいと、
そうなりたいと願う」

「そんな大したモンじゃないだろ」

「はは。だが、これは認識しておけ。お前は」

皆の、目標なんだ。

「っ」

俺は息を呑む。

そんな風に見られていた？ いつからだ。
いつから？

俺は周りを見回す。

いつの間にか8名が揃う小さなビルの中、全ての視線が俺に集ま
っている。

少年がいる、少女もいる、かと思えば男性女性がいる。

皆が俺を見て、ミリアリアの言葉に促されるように、俺を見てい
る。

まるで、英雄でも見るかのような、そんな眼差しで……。

「この演習で敗北するにしろ、これはお前の為になる。お前は更に飛翔する。故に、そうだな、嬉しいんだな私は」

「……なに、が」

「お前が成長し、お前の道が広がるのが、だろうな」

俯く。

わけのわからない感情が溢れてきて、込み上げる物がある。

「挫けるなよ、お前の矜持に」

「あゝあ」

「ははは」

俺は自分の頬を一発殴る。

クソみたいにウジウジと考えるのはヤメだ。

俺は俺として駆け回るしかない、そのために……

「勝つぞ、この戦」

「ああ、それでこそだ」

もう少しで太陽が頂点を指す。

俺達の戦はまだまだこれからだ。

18話：俺と策と炎と決壊（後書き）

……。

修正。てかこれ、書き直したい…。

1月30日 5:50

仕事行く前に余裕もって投稿しましたが、何度読み直しても納得が
いかない。

この話があるだけで自分の作品を愛せそうにない。

書き直します。

以降、こう言った事がないよう気をつけます。

1月31日 0:29

書き直しました。

どこが変わったんだよ！！ って意見もあるかもしれないですが、
自分的にジーンのセリフに愛を感じなかったり、地の文に不満があ
ったりと色々あり書き直しました。といっても加筆と修正した位で
す。

もうこれはニュアンの何かなので、なんとも言えないですが。

あと今日から3日間出る事になっているので、更新出来ません。
申し訳ない。

19話：俺俺俺、分かれ道

さてはて、心機一転。

気持ちを入れ替えたのは良いが、この絶望的状况からどうやって勝ちに行くか。

俺の隊は恐らく半数以上が討ち取られているだろうし、A隊は御覧の通り、B隊に置いては戦力外、C隊は上手く踏みとどまっていたが、ほぼ同数でロイ隊を足止めは無理だろう。

俺達の位置に敵兵が来た事を考えると、挟撃されている可能性は大いにある。

「そうだなー」

チラッと周りを見てみると、俺に視線が集中している。

今までなら気にも留めなかったが、あんな話を聞かされた後だと凄く、気恥ずかしい。

しかしまーあれだな、俺よりも年下の子とか居たんだな。

まだ12歳くらいだとは思つが、若すぎるぜ。

ともあれ、

「この先どうしようか？」

ミリアリアに聞いてみる。

彼女は、俺よりも相当優秀だと思つしね。

「ふむ」

ミリアリア顎に手を当て、目を瞑って唸っている。

この人って、なんでこう言う動作の一つ一つが格好良いんだ。

理不尽じゃね？

俺が同じ事しても「ああ、変人がまた何か企んでるな」くらいしか言われねーよ？

その点、ミリアリアは溜息付きたくなるような格好良さだ、ありえんよ。

「そろそろ、敵スナイパーが配置されてから5時間、行動を始めてもいいだろっな」

「ほむ。具体的には？」

「私としては治療の為に帰還し、立て直すのが良いと思うが、流石にそれはさせてくれないだろう」

「だわな。後ろにも兵隊が居ると考えて動くべきか」

「ああ。正直言って、このフィールドで50対50など少なすぎる。いくら相手が上手くとも抜け道は五万とあるだろう」

…え。

そうなんか？ 俺としては割りと良い感じだと思ってたが……

そうか、少ないのか。

まあ、そうだよな。小隊規模でこの施設はちょっと大きいかもしれないな……

ともあれ、それが俺達の有利に働くなら問題ない。

「それじゃーあれか？ どっかから抜け出して敵本拠を探す？」

「それくらいしか出来る事が無い。と言う意味でもあるかな」

「さいですか」

「ああ」

まあ、なら仕方ない。

「それじゃ飯食ってから動きますか」

「……私は、どうもこのレーションと言うのは好かんのだが」

「好きな奴はそうは居ないだろ……」

・
・
・
・

腹ごしらえをして、数十分。

俺達は4：5で分かれる予定だ。

4は俺が率い、5はミリアリアが。

「そう言えば、お前は銃を持っていないな」

ライフルの調子を確認しながらのミリアリアの質問。

しかし、まあ、今更それかよ！

俺の武装はナイフと軍刀だけ、ナイフは左手に逆手に、軍刀は右手に普通に持っている。

正直、銃を扱うよりもこっちの方がしっくりくる。

「ああ、銃はジーンにやったから」

「お前の戦闘スタイルを考えれば、銃もいらない。か？」

そう言う事だ。

ライフル二丁持ってもジーンには扱えないだろうが、その時は他の奴が使えば良い。

正直言って、弾は渡すんじゃないかなかったと後悔してるが、まあ、い

いだろ。

それに俺の戦闘とはすなわち体術だ。
銃を使うならハンドガン程度がちょうどいい。
ライフルなんて弾込めが面倒だし、連続して撃てないし、俺と相
性が悪すぎる。

高速で動き回って斬り、撃ち、折る。

それが俺の戦闘の全てだからな。

「扱いなれないってワケじゃないけどな。正直これの方がやりやす
いよ」

剣を強調する。

まあ、ミリアリアも日曜の戦闘訓練にたまに参加していたので、
俺の戦闘能力は把握しているだろう。

「解つてはいるがな…… まあいいか。お前が良いと思うならそれ
でいい」

そんなやりとりをしている間に、他の隊員も準備が出来たのか、
俺達の周りで静かに気持ちを整えている。

俺もミリアリアもそれを確認し、お互いに頷く。

「では、行くとしましょうか。ミリアリアさん」
「そうだな」

互いに拳をぶつける。

ミリアリアはそれで十分だったのか、背を向け外に向かっていく。

「落ちるなよー。少なくとも俺が勝つまでは」

「はは、それは此方のセリフだな。落ちてくれるなよ、お前が落ちれば此方の戦意に影響する」

後ろ手にヒラヒラと振りながら、付き従う4名を率いる姿。

正直いって、お前はどこの将校なんだと言いたいくらい様になっているんだが……。

俺にあれば真似出来そうにないので諦める。

「僕たちも行きましょう」

「だな」

小柄な兵に促され、俺もミリアリアに背を向ける。

このビルに配置されている窓は一階に4、二階に10。

俺達は二階の窓から脱出する予定だ。

ミリアリアはその逆方向の一階窓から。

俺達は窓辺に移動し、外を伺う。

狙撃兵の予想ポイントは正面なんだが、光の照り返しすらない。

合っているのかどうか不安でしょうがないが、俺は撃たれても良い。

俺が撃たれる事で他の兵隊が生きるのなら、それでこの行動は正解だ。

「じゃあ、俺が始めに出るから、2秒後に出てきてくれ」

横目に壁に張り付いている3名に言っ。

名前も知らない人達だが、彼等は俺を知っている。
知っているうえで俺を信じている。なら、俺も彼等を信じる。

真剣な表情で頷き返してくれるのを目に写し。
カウントを行う。

……… 3

……… 2

……… 1

「0だ!!」

窓から勢いよく飛び出し、そのままサイドにステップ。
瞬間、ビル内の壁にペイント弾が炸裂する音が響く。

俺はそれを一瞬確認し、狙撃主が居るであろう方向を計算。
ついでに中指をおったてる。

「甘い!! リンディ茶の10倍は甘いぜ!! スナイパー!!」

更に銃撃。

俺の腕に命中。

しかしこれは2時方向、すぐさま計算し、後ろ手に彼等に指示。

「ははは!! 12時及び2時方向にスナイパー確認!!」

一斉に窓から出てきた3名はそのまま走り、ビルから飛び降り、
不規則にジグザグしながら2名の間になる位置を走り抜ける。

俺もその後が続く。

おそらく、俺の叫びを聞いたミリアリアは後顧の憂い無く、ビルから逃亡しただろう。

こちらに2置いていると言う事は、おそらくあちらに1。

狙撃される心配はあるだろうが、全滅する事はない。

とりあえずミリアリアの事は頭から追い出す。

前方を走る兵の両脇で弾けた弾丸を見るに、敵さんも大分集中力が散ってきているみたいだ。

それに俺の頭を打ちぬかず腕に止まったのも、それを証明しているような物だ。

「敵の狙撃兵を落とそうか!!」

「りよーかい!!」

「解りました!!」

「りよ、了解です!!」

三者三様の答えを聞き、俺は速度を上げて3名を追い越し、先頭を走る。

まずは正面に確認した奴だ。

・
・
・
・

狙撃主撃退は驚くほど上手くいった。

移動途中であった彼に切りかかり、首をナイフで薙いで終わり。2人目は少々見つけるのに手間取ったが、高所からミリアリアを狙っていたのを背後から強襲。隊員が後頭部を射撃、あえなく死亡となった。

といつても2人目は気絶してしまったので、その辺をうろついていた選別班に任せて退場してもらった。

その時にミリアリア班を確認したが、一人減っている以外は変化なし。

とりあえずは順調のようだ。

「敵本拠を征圧したい所だけど、場所に心当たりある人いる？」

俺達は狙撃主のいた場所から移動し、小さな小屋みたいな施設の中にいる。

「んー自分はコレと言ってないですね。この演習場使うの初めてですし」

「私は2回使った事があります。しかし、地理を把握している訳ではないので……」

「あ、あの僕は……ごめんさい、初めてだから……」

ふーむ。

女性隊員と意見交換すべきか。

「解った。貴方と君は外を警戒して下さい、ただ意見があればじゃんじゃん頼みます」

「おう。んじゃ行くか」

「は、はい」

2人は部屋の中で、けれども外を見れる位置に移動し片方はダル気に、片方は強張った表情で警戒を始める。

俺は木の机を持ってきて簡易地図を机上に彫る。

「臆気だが、俺が把握出来た場所の見取り図だ。これより奥の事は思い出せない、詳細は無くて良いから、どこにどんな施設があるのかだけでも教えてくれ」
「解りました」

事前に調べていた地形は把握しているが、ロイの事だから奥に隠れるように陣を敷くとは思えなかった。

故に俺は道路を挟んだ向こう側の200mまでしか詳細を確認していない。

完璧に俺の怠慢だが、今更後悔しても遅い。

故に少しでも情報が欲しい。

ロイが前に出てきたって事は他の人が大将をしているんだが。ヒューズではない。

ならば他の知らない人だろう。

上級生で目だっているのは

ロイ・マスタング

マース・ヒューズ

マリリン・スピットファイア

ピース・キャンメル

アヴロ・ヴァルカノン

以上5名だ。

この5名は、化物だと思ってくれて良い。

万能型とはいいい難い人も居るが、それでも頭の回転は頭一つどころではなく頭抜けている、正面から相手したい奴は一人もいない。

中でもヴァルカノンなどは、化物の中の化物だと思う。

すでに国家錬金術師資格を保持しており、二つ名を【必滅】

圧倒的な面攻撃、正面へのそれもそうだが、特筆すべきは上空からの制圧錬金術。半径400mに渡る爆薬・鉄器での面攻撃など想像しただけで青褪める。

使い道の狭い化物だが、事戦争に関しての才能はヒューズさん以上だ。

まあ、ロイヤヒューズさんと相性が悪いようなので、こいつは参加していないだろうが、他二名でも厄介すぎる。

「……ですね。ここには地下施設があったようですが、現在は封鎖されています」

「ふむ」

「私が知っているのはこれくらいですね」

いろいろ考えながら地図を埋めていく。
空きはあるが、それでも十分な補足だ。

「あ、あの……」

ドモリながらの叫びに少し眉を歪める。
とりあえず諫めとこう。

「音量は小さくな？ それでどうした？」

「あつ。すみません」

「いいよいいよ。何か意見があつたんだよね？」

「はい。あの地下施設に本拠を構えてるんじゃないでしょうか」

それは考えたが、学校側が封鎖している所を態々使わないだろうと思う。

それは違反だしペナルティものだ。

「いえ、それはないでしょうね」

「な、なんですか？」

「封鎖している。と言う事は学校側が危険と判断した場所なの、そこを使うと言う事は規則に触れるのよ。使っていたならそれはルール違反と言う事になるわ。これは“演習”だからね」

「まあ、そう言う事だな」

「あ、ううう。そう、ですよね」

めちゃくちゃ落ち込んでしまった。

でもまあ、演習でなければ誰もがそこを疑うかもしれない。

守りやすく、進入されにくい。

しかしながらソコには脱出口がない。

俺なら絶対に使わない地形だが、怪しさで言えば他の何処よりも濃い。

「そう落ち込むな。意見を言う事は良い事だ、どんな可能性でも上げてくれると在り難いよ」

あ、はいっ！！

なんてキラキラした目で返事をされた。

この子が俺をどんな風に見てるのか知らないが、居心地がわりい

いい!!

今まで経験した事のない視線だ!!

うひいああああ!! 溶けそう!! 俺を溶かすつもりか!!

「静かにね」

女性隊員の忠告でその子も落ち着いたのか、アワアワしながら警戒に戻る。

……俺の周りに居なかつたタイプだなー。

ともあれ、地図との睨めっこを再開する。

女性隊員と意見を交換しつつ、候補を検出していく。

たまに警戒中の二人の意見を織り交ぜつつ、候補としてあがったのは二つの施設。

北側北部の一階建ての建築物。

窓の数が2と少なく、周囲には背の高いビルが建っていて見つけ辛い位置にある。

北側西部の二階建ての建築物。

造りは他と大差ないが、このビルの背はこの施設内の建築物では最高。また付近10mは見晴らしがよく、接敵を感知するのに優れた建築物なのだとか。

前者はともかく、後者は厄介にすぎる。

まあ、

「どっちにしても、スピットファイアとキャンメルが出てきたら堅牢になりそうだ」

「ああ、あの人ね」

「面識あんの？」

「ええ。と言つてもマリリン先輩だけね」

「へー。噂じゃかなりデキル人らしいけど」

「合ってるわよ。規格外つてのは貴方や先輩の為の言葉よね」

俺の事はいいんだよ。

ミリアリアさんに指摘されて解ったから。もうそう言う認識を俺に教えるな。

赤面してまうやる。

「どんな人だ？」

「唾棄すべきは弱卒・嫌悪すべきは己が無知・幸いなるは国家の栄。彼女の掲げる信念らしいわよ」

「……………こわっ」

「滅私に置いて彼女以上の人は見た事無いわね。愛国心も並々ならない物があるらしいわよ」

「能力的にはどうなのよ」

「彼女の実家は軍・政治・商家あらゆる方面に伝があり、その関係から全てに置いて英才教育を受けてたらしいわね。彼女自身、幼少の頃から自分の才能には気付いてたみたいで、教えられた全てを習得したらしいわよ」

「おっそろしい…」

「ちなみにお昼に食べたレーションは彼女作ね。すでに軍で正式採用されてるから彼女個人でも億万長者だわね」

しかしだ、俺が聞きたいのはそう言う事じゃなくてだね。

彼女自身の得意な戦法とかなのよ。

「さーそれは知らないわよ。模擬戦で当たっても彼女指揮に従うだけなんだもの」

「頭いいね」

「何言ってるのよ。その所為で実技評価が一定以上いかないんだから損してるわ。ロイ・マスタングよりもよっぽど優秀なのに、もったくない」

彼女はそう愚痴るが、スピットファイアにとって訓練兵時代に実力を晒す事は意味がないのだろう。

なんせ今ですら、噂として俺の耳に彼女の名前が入るくらいなのだ。

本気を出せば嫉妬を買っただろう。

ロイは気にしていないが、あいつは教官の一部から嫌われていた。今でこそ俺が矢面に立っているが、そうとうネチっこかった時期もあるらしい。

ヒューズさんは世渡り上手だからロイのような事態にはならない。

しかし聞く限りではスピットファイアはこの手の遊びには参加しないだろう。

となればキャンメルか。

「ピース・キャンメルを知ってる人いる？」

彼女はアメリカンな仕草で否定。

「ドモリながら否定する子は、まあ予定内。」

「知ってるが、そんな大したものじゃないぞ」
「構わない」

「あー、得意な戦術つてもあの人はほとんど武神みたいな存在でな、古今東西の戦略を使ってくる」

「どつ言つ事だ」

「つまりだ、型に嵌らねーんだわ。気まぐれに徹底抗戦してみたり、気まぐれに退却してみたりな。まるで有効な作戦を実験してるみてーだったな」

ちなみにお前が言ってるのは戦術だ。

戦略つてのは戦争に入る前から立てられる国家規模での作戦の事だから。

「その人の指揮で動いた事あるのか？」

「2度ほどな」

「どんな感じなのよ」

「変な感じだったな、いつの間にか勝ってるなんて、いつもの事だな。またその逆もしかり、俺達は何もしてないのに、いつの間にか勝敗が決まる。不思議なモンだったぜ」

「へー私も一度経験してみたいわ」

「やめとけ、やめとけ。詐欺みたいなモンだぜ？ 実感なんてありやしねー」

聞いている限りじゃ、キャンメルもまた化物だ。

有効な陣形・配置はただそれだけで、戦場を制覇するに足る。

どこに動こうとも殲滅する事を可能とする陣があるのなら、だがな。

キャンメルがどうやって彼の言ったような事態を引き起こしたのかは解らないが、舐めてかかれる相手じゃない。

「前途多難とはこの事が……………」

言い合いを続ける二人を横目に愚痴る。

どの人物の才も尋常じゃあない。
スピットファイアはまだまだ未定だが、キャンベルなど太公望の
生まれ変わりだと言われても信じてしまいそうだ。

・
・
・
・

その後、10分休憩を取り、北側北部施設の強襲を行う。
予想通りと言うべきか、そこには兵など一人もいなかった。
ただまあ、その部屋を軽くみてまわると紙切れを発見。

内容は……“ ははは、掛かったな！！ 間抜けなお前の顔が見え
るようだ！！ byマスタング”

んな阿呆な事がかかれた紙切れ。
ブチキレそうになる理性を、俺も奇跡とも思える自重で御し、次
に向かう。

距離的には600mほど離れていたが、10分ほどで到着。
途中狙撃される事もなく、接敵もなかった。

順調に到着したのだが。

「これは、無理臭くね？」
「4人じゃな！ 厳しいにも程があるな」
「そうねー、あと1mも近づけば蜂の巣にされそうね」
「む、無理ですよー」

ビルを囲むように8名の巡回兵。
屋上にも2名の狙撃兵がいる、そしてビル1階に見える兵隊約5名。

この時点で15名が配置されている。

しかし、二階にもチラホラと見える人影から、それ以上いるのは決定的。

ここに本部があるのだと思うが、敵方の指揮官がキャンメルであるなら50名全員を持ってきても不安だ。

「狙撃できる奴いるか？」

「俺はライフルでの狙撃は自信ないな」

「私は出来るわよ、流石に屋上の奴は厳しいけど、巡回兵なら余裕ね」

「ぼ、僕も巡回兵なら…あの、出来ます」

ふーむ。

俺は接近戦しか出来ないから、こちらから狙撃してもらって、俺は背後から突入するか。

「じゃあ、こっちは頼む。俺は反対側に回るから」

「おい、俺はどうする？」

「機を見て接近してくる奴の数を削れ。2人は30分後に狙撃を開始してくれ」

「解ったわ」

「了解です」

配置につき、俺は巡回兵の動きに集中する。

狙撃兵の方は、相手に出来ないから、もうシカトする。捕らえきれないスピードで動いて相手の射線から逃げるしか出来ない。

待つ事数分、タアツと銃火の音が2発響き、俺から見てビルの右側に居る兵が頭を揺らして倒れる。

恐らくヘッドショットだろう。

目に当てるなんて事は無いと思うが、そうだったらそうだった。運が悪かったと思うしかない。

ともあれ、目の前の巡回兵が慌てた様子で銃声が合った方を振り返る。

俺はそれにタイミングを合わせ駆け出す。

一瞬で10m駆け抜け、通り過ぎざまに首すじにナイフを通し、死亡認定を与える。

倒れた兵隊方向に走り、窓から侵入。

驚いて俺に銃を向けてくる兵が右に2、左に1。

左の奴まで疾走。

背後から拘束し、そいつを盾に2兵に接近。

盾にしていた兵を2人の兵目掛けて蹴り飛ばし、それを受け止める兵と避ける兵。

避けてバランスを崩した所を軍刀で首筋を斬る。

受け止めた奴の首と、蹴った奴の首も斬り俺は二階に向けて走る。

二階に続く階段の上には2人の兵隊。

すでに俺に照準を合わせていたようで、躊躇いなく射撃を開始し

てきた。

俺は銃口で位置を予測、肩に向けられた銃口と、足を狙っている銃口。

足方向の物を軍刀で弾く。

肩に向けられた物をナイフで……。

「ッヅ!!」

衝撃で体が傾いた。

肩に命中してしまったようだ、何故だ!!

手ごたえはあったのに!!

ってしまった。ナイフはゴムじゃねーか!! 弾けるわけねえ!!

体制を崩したまま疾走し、銃兵に蹴りをいれる。

マジで痛いから。

本当、十分の一でも味わって死んでくれ。

二階に突入し、見渡せば6名の兵。

しかも青い旗。やはり本拠だったようだが、こちらの人数がたりない。

しかしまあ、下にいたのが階段で待ち伏せしてたとしても多い。

取り合えず、手近な奴に向けて駆け出す。

「っげ! マジできやがった!!」

なにやら言っている兵隊の首に軍刀で斬りつけ、すぐさまサイドに動く。

また前進、横、前、横、横。

不規則に動きつつ、ナイフと軍刀を使って3名殺す。

こんな部屋に6名も兵を詰めるのは…

あ、腕章つけた奴がいねー！！

屋上か！？

他2名がナイフに持ち替えた所で俺は踵を返し、階段を駆け上がる。

「そいつを止めろっ！！！」

後ろで叫び声を上げている事からも、こちらに大将がいるんだろう。

目の前ある屋上に続く扉を体当たりでブチ抜き、腕章を付けた女性が見えた。

俺は彼女向かって、駆け出し。

ドオーンッ

空に花火が上がった。

「……あ」

俺と彼女の距離は2mほど、軍刀を構えた彼女は強いのだろうか、見た感じ俺が負けるほどの練度ではない。

掠り傷すら受けずに勝つ自信がある。

だが、

続く、狼煙の色は、敵方の勝利を示す、青。

「……負けた、かあ」

もう完敗だ。

俺はドサリと倒れ、寝転ぶ。
序でに目を腕で覆う。

「ああーあ、負けたか」

作戦で負け、動きで負け、思考で負け。
負け負け負け。

現在、俺はここにいるが、こんなのは策なんて言えない事だ。

あれだテロリストが負けを確信して、敵のリーダーだけでも殺すと躍起になる。

そんな状況と変わらない、無様な結果だ。

「負けたかあ」

俺は、初めて悔しくて泣いた。

19話：俺俺俺、分かれ道（後書き）

投稿遅れてすみません。

1月31日から外出していたのですが、事故りました！！
腕・肋骨が折れて入院しました！。

タイヤ替えたばかりだったのでマジで運悪かったとしか良いようがないです。

前歯もぐらついてて手術しました。歯はね。なくなると嫌なんだ。

そんな理由もあり。今回の更新は遅れました。
以降も遅れると思います。

ご迷惑おかけしますが、しばし辛抱していただきたい。
すみません。

20話：敗北と涙と趣味と殺意

一通り泣いたらスッキリした。

完敗の涙なんて悔しくて、悔しくて堪らないが、もう良い。
二度と流さないと誓うだけだ。

「くっそー。ロイの野郎、次は恥かかせてやる……」

適当にそれを誓いながら起き上がる。
これから損害と結果の発表があるのだ。

よっこらせ。と起き上がり、ビックリした。

いつの間にか屋上には銃撃を行っていた兵隊が集結している。

「うえっ！？ いつの間に……」

俺に付いて来てくれた3名は当然ながら、敵であった人も合わせると30名以上の人がいた。

こんな衆人観衆の中で大泣きしていたとは！！ 恥ずかしい！！
死にたくなつてくる！！

「君は、とても純粹なのね」

赤面して身を固めていると、いきなり話しかけられた。
腕に付けられている腕章を見るに、彼女が今回の大将だ。

しかし、純粹とはこれ如何に、悔しくて泣くなんて事は、前世で

あれば数えるのも馬鹿らしくなるくらいあつたが。

「えーと。貴女は？」

「失礼した。私はマリン・スピットファイアといいます」

「あらま。御高名はお聞きしてますよ。俺の名前はシグルド・カーティスです」

「存じています。噂の人物に拝顔賜り恐悦至極です」

……

何なのこの子。第一声は普通に女の子って感じだったのに、言葉を交わせば交わすほど硬くなっていく。

「いえいえ、こちらこそ。てか硬いですよ。一応タメくらいだと思えますし、それに先輩なんですからもっと柔らかく喋って貰って構いませんよ」

「すみません。癖なんです」

癖ならしよーがないですね！！

どんな癖だよ。どんな家庭環境で育てば14・5の女の子がこうなるのよ。

謎過ぎる……！！

「はあ、それで純粹とは、これ如何に？」

「いえ、悔しくて涙する。貴方にとつては、たったそれだけの事かもしれないけど、私は涙を流した事もなかったので、貴方はよほど純粹なのだろうと思って」

褒められているのか、馬鹿にされているのか微妙な所だなー。

でもまあ、微妙に天然っぽいから純粹に驚いているだけのようない気もする。

「盲点でした。噂での貴方は唯我独尊を絵に描いたような人だったので、部隊での負けに涙するほどに集団を重視しているとは思えませんでした」

どんな噂なんだ。

変人っただけじゃないのか。ああ、いや、それだけのはずがないか。

プラズマ球を見た頭の良い人は須らく、俺に対して違う感情を見せていたからな。

「思う所あってね、これからは真剣に軍人になろうかと思ってるよ。その矢先にこれだ、今までの馬鹿な自分との決別の意味も込めて、泣いた」

「……興味深い」

さいですか。でも俺にとっては慣れた儀式であり、初めての儀式でもある。

時に諦めの儀式であった事もあつたし、足掻くための儀式でもあつた。

今回は初めて、決別の為に泣いた。

悔しくて悔しくて、そんな思いをしたくない為に、今この状況で泣いたんだ。

実践であつたなら俺は何人の部下を殺しているのか解つたモンじゃないしね。

「ともあれだ、そろそろ移動しよう」

「そうね」

同時に、ドモル事に定評のある男の娘が突撃してきて俺に抱き付けてくる。

ぼ、僕、次は役に立ってみせますからあー！！ と泣き。

ダル気な彼は、

ま、今回の事はミリアリアの言う通り、良い経験になったって事かね。

そんな風に言っつて腕を組む。

2回生の彼女は

マリン先輩つてあんなに喋れるんだ。

なんてちよつとずれた感想を言っつたりだ。

敵方の人も、

泣くんじゃねーよ小僧、これからだろ。

真剣に軍人になるかー、俺もちよつと考えてみるかな。

悔しくて泣けるなんて ちよつと羨ましいね。

ロイとヒューズは本気モードだったから気にすんな。

てか、お前剣で銃弾弾いたよな？ やりかた教えてくれ。

とか色々言われた。

彼等に聞いてみた所、俺が泣き出してからずつと見てたらしい。

しかも俺つてば10分くらい泣いてたみたいで、その間ずつと俺を見てて、誰も声をあげるような雰囲気になれなかったとか……

ロ、ロイ……ッ！！ てんめーも泣かしてやる！！

ごめんシグルド！！ もう許して！！

つて言わせてやる！！ ちくしょう、泣ける。あ、いや、死ねる。

んで色々と話しながら集合地点に到着。

他の人達はすでに到着していて、俺達が最後だったみたいだ。遠くの人影に手を振ると、こちらに駆けてきた。

まあ、あのシルエットは一人しか居ない。

「ごめんな、ジーン」

脇腹と肩にペイントの跡が見える。

死亡認定は受けてないみたいだから、これはアレか本拠を制圧されたのか。

「いえ、こちらこそすみません。不甲斐なく拠点を落とさました」

「そっか」

「そちらは？」

「んー、一応その子が大将だったんだけど、2 m手前で負けた」

スピットファイアに目をやりながら口を開く。

彼女はジーンに会釈をして、集合場所まで行ってしまった。

「では、もう少し粘れば良かったですね……」

「いやいや、これは模擬戦だろ。そんなテロリストみたいなやり方で勝ってもね」

俺がそう言うとジーンは額に手を当てて、溜息を零す。

「貴方は……いえ、確かにやり方は後のない物ですが、それでも勝利は勝利です。戦場において綺麗に勝つなどありません。どんな手段であっても勝利条件を満たす事が大事なんです」

解ってます？ と首を傾げてくるが、解ってるけどさ。
本当、博打的な勝利とかどうなんだろ。

「解っていません。例え博打であれなんであれ、勝利条件を速やかに満たす事は、兵の損害を抑える事に直結します。それに倒れていった兵に“汚いやり方だから勝った気がしないよな”などと吹けますか？」

そりゃ無理だ。

どんな形であれ勝利したい。

死んだ人に、お前達のおかげで勝てたと言ってやりたい。

ああ、なんだそう言う事か。

「勝つ為ならば清濁飲み干せ、結果が全て、か」

「乱暴な言い様ですが、大方合っています。戦場での誇りとは勝利の二文字に集約されると言っても過言ではありません」

「どんな勝利であれか？」

「どんな勝利であれ、それが貴方や私が守りたい者の為に役立つのであれば、それが私達の誇りとはなりませんか」

守る為に矜持を捨てると言ってるような物だが……いや、矜持故に　と言う事か。

まだまだ、学ぶべき事が山ほどありそうだな。

「まあ、そんな事はいいんです」

「……え？」

俺の思いを返せよ。

ジーンの言葉に思う所があったんだぞ。

そんな事ってなんだよ。

「シグルド、もしやと思いますが、泣きましたか？」

ひいいい！！ お袋にリークされる！！

「いやいや、そんなまさか！！ 僕が泣くわけないじゃない？」

「……」

ジリジリと俺の目元を見て寄ってくるジーンさん。

ドバドバと冷や汗流しながら距離を取る俺。

「はっはっは！！ カートイス君、盛大に大泣きたらしいな」

「おい、んな大声で言っただけだよ」

ロイ！！ てめーー死にテーのか！！

今、俺が必死で！！

「やはり、つく、何故 私はシグルドに付いていかなかったの……」

いや、そんな悔しがる所じゃないですから。

ジーンさんは俺の恥ずかしい所を集めるのが趣味なの？ そうなの？

「しかし、君にちょっとしたお灸をしてやる為に企画したが、そこまで感じ入ってもらえるとはな、ホストとしては感無量だ。そう思わんかヒューズ」

そんな意図があったのね。

確かに何か企んでると思っていたが、ロイがそんな事を思ってると思わなかった。

「と言っても発案はヒューズだが」

「だろうと思っただよ！！　ちくしょう！！　こいつ！！」

「まあな、カーティスは脆い部分が多いからな。個としての戦力は大隊規模なんだがなー、精神面を勿体無いと感じている奴は多かったからな。これで一皮向けてくれりゃ俺としては大満足だな」

「あんたすげーよ。」

「あんたになら純ケツを捧げても、いや、やっぱ嫌だ。」

「冗談でも言いたくないセリフだ。」

「…大隊規模は言いすぎではないか？」

「馬鹿言っつな、殺す才能に関しては士官学校一だろ」

「つく、否定できんな」

「殺す才能、ね。」

「ロイならまだしも、ヒューズさんに言われると凄く重いな。」

「だが、殺す才能と生かす才能は反比例しない。」

「それは同一の物だからだ。」

「殺戮の才と殺害の才は違う。」

「殺戮の才とは、ヴァルカノン上級生のような奴の事を言うのだ。俺もその片鱗はある、プラズマブレイカーなどその最たる物だ。」

「しかしながらあれにも有効活用の仕方はある。」

「だが、ヒューズさんは殺す才といった。」

「それは同時に生かす才があると言ったのと同じだ。」

「そう苛めてやるな」

そんなセリフと共に颯爽と現れたのはミリアリア。
やっぱり格好いいな。

「ん？ ああ、君か。私の頭をぶち抜いてくれたな」

「戦場の習いだ、許されよ」

「もつともだが、まさか最後の最後で落とされるとは思わなかった
よ」

「つてお前 落とされたのかよ。」

「ミリアリアさんパネツす。」

「ミリーは最後に拠点まで駆けつけてくれまして、挟撃し、ロイ・
マスタングを落としましたんです」

「これはジーンさん。」

「いつの間に復帰したんだ。」

「さっきまでブツブツと悔やんでいたのに。」

「全く、動きは読んでいたつもりだったが、あの班が戻ってくるの
は予想外だったよ」

「シグルドと合流したのでね、彼なら敵本拠を狙うだろうと思ひ、
自軍の防衛に参戦したまでだ」

「ミリアリアが生きていたのは良い誤算でしたので、急遽 反撃を
行ったんです」

「ロイ・マスタングを落とすまでは良かったのだがな」

「ええ。あのまま殲滅出来る予定でした」

「ロイが落ちて浮き足立っている10名を銃撃してたらしいが、ジ
ーン・ミリアリア班の横からヒューズさんが強襲。」

ジーンは二発被弾し退却。
それによって弾幕が乱れ、本拠が落ちたんだそうだ。

5人でうだうだと喋っていると、選別班が到着。
今回の被害やらなんやらを報告してくれた。

赤班＞俺等の隊＜
死亡認定35名。

弾薬消費470発。

開始8時間後に本拠の陥落により敗北。

青班＞敵の隊＜

死亡認定21名。

弾薬消費620発。

敵本拠地の制圧により勝利。

もつと細々した報告があったのだが、簡単にこれだけだ。
弾薬の消費量の差が酷い。
俺達は銃撃が少なく、敵は良い感じに使い尽くす算段で消費している。

それだけの差ではないだろうが、この差が勝利を別けたような気がしないでもない。

死亡者数など10以上の差があるのはマジでショックだ。
本当に完敗した。

よし、明日から真剣にがんばるか！
と皆で意気を上げていたんだが、

「おっと、そうだカーティス君。罰ゲームとやらがあつたな」

「はあ？ 掃除洗濯だろ？」

「いやいや、君の主催していた訓練ではあつたじゃないか、それを
適応しよう」

俺が勝ってるならまだしも、負け戦で何故に適応しなければなら
んのだ。

ふざける。

「私は君に誘われ、今回の演習を提案しただけなのだがね。つまり、
この演習は君主催の訓練の延長戦と言う事だ。まさか自分で考えた
ルールを無視するなんて事は、ないだろうね」

……………こいつはあ！！

あんたつて奴は！！ マジデ死ねよ、氏ねじゃなくて死ねよ！！

「うむ。納得してくれたようで満足だ。と言つても他の子に罰ゲー
ムを適応させるのも不憫だお前一人にしよう」

ぐっぐぐぐ、くそ野郎め。

「さて、何にするかな……………そうだな、あれにしよう」

後日。

「いいか。後方支援とは地味だが、御覧の通り、戦争において最も重要な役割でもある。しっかりとその事を覚えておくように」

「「「はい」……と言う言葉を刻め！」「」

「……ごほんつ。では次に……となる、質問はあるかね」

拳手する俺。

「カーティス君、質問を許可する」

「トイレに行ってもいいですか？ ……と言う言葉を刻め！！」

「……」

耳を穿る教官。

「もう一度言ってくれ」

「トイレに行ってもいいですか？ ……と言う言葉を刻め！！」

「……次に行こうか」

はち切れんばかりの笑顔で俺を見ているジーン。

ニヤニヤと俺を見ているアルフォード。

俺から目をそらすミリアリア。

てかアルフォードは当初の予定と違い影が薄いのに、「……言う所
でばかりでしゃばりやがる。」

ちなみにロイは顔の形が崩れ、ヒューズさんは笑っていたが同時に申し訳なさ気な目をしてた。

ロイ、お前は怒らせちゃならん男を怒らせた。

お前はもう地獄を3週させても飽き足りない、地味にネチネチと俺の恐ろしさを教えてあげる。

これから一週間は靴を履くのに気をつけな、脱げなくなるぜ。

これから一週間は安眠できる日はないと思え、深夜にアフォンアフォンな声のテープを流してやる。

これから一週間は食事も満足に取れないと思え、世界の珍味をお前だけにプレゼントしてやるよ。

そんな感じで俺達の演習は終わった。

20話：敗北と涙と趣味と殺意（後書き）

左手だけで打ったぜ。
やりにくいにも程がある。

幕間：とある少佐の場合

シグルド・カーティス。

この名を耳にする度に思い描くのは、あの圧倒的な力。

錬金術の枠組みを超えているのではないかと思うほどの、極大の力の結晶。

新聞に載った一枚の写真は、それほどに見る者を圧倒した。

『士官学校に神話降る』の見出しで大々的に報道された、あの一枚の絵。

あれを成した生徒の名は公表されていないが、軍関係者にとっては周知の事実。

ある者は恐れ、ある者は狂喜し、ある者は希望を見た。

私は、まだ13の少年が成した奇跡に、破滅を見た。

成長する魔人とでも言えばいいのか、これから体が作られ、脳は更なる知識を貯めていく。

なるほど、恐怖に値するだろう。

多分に漏れず、私は恐れる側だ。

あれほどの力を有する者が、数年後に仕官として軍に所属する。それは軍人としては喜ぶべき事だろう。

しかし、それはその少年に殺戮を期待していると言つ事と同意だ。
それは人として恥すべき事だろう。

なにより、少年の域を出ぬ内にあれほどの力を振るうならば、成長すれば一体どれほどの力を得る。
それが恐ろしくてならない。

士官学校の成績を見ても驚嘆の一言。
ほぼ全ての分野に置いて、上位に食い込む異常性。

生まれを調査しても、上流階級の出と言つワケでもなく、ただの市民。
当然、家庭での学習も一般の域を出る事はなかった。

果てには、士官学校での必須授業を改定させると言つ変事まで起こした。

未知と言つ物ほど恐ろしい事はない。

シングル・カーティスと言つ人間は未知の塊である。

恐れるなと言つ方が無理な話だ。

しかしながら、彼に期待する者は意外なほどに多い。
上層部の者共は彼に絶大な期待を寄せている。

上に行くほど、期待が大きく。

下に行くほど、彼に夢を見る者が多い。

ある時、大将に彼に付いて聞いてみた、

「君の不安は解る。が、あれほど御しやすい人間も稀だ。理で釣り、縁で縛ればアレは身動きが取れんだろう。それにつけてもあの錬金術の腕、まさに時代に選ばれたような者じゃないかね。

陣が整えば、段階を上らせるのも容易に出来るだろう。

アレは甘い人間のようなからな。

はは、私の代にアレが生まれたのは天啓のようじゃないか」

そんな返答。

私には意味の解らない部分もあるが、嫌悪が先に出てしまう。

だからこそ私は未だに少佐止まりなのかもしれないが…

時代が彼を生み出したと言うのなら、この時代は一体何を求めて流れている？

東西南北で戦争が行われ、アメストリア国内にも暴動が起きる事がある。

時代が殺戮を求めていると言う事なのか？

だからこそその魔人が生まれたと？

たしかにあの力を使えば、千の人間を一瞬で殺せるだろう。戦争は終息を早め、自軍の死者も少なく済むかもしれない。

だが、それは、なんとと言う恐怖だ。

英雄と見る事など出来ない。

まさしく悪魔の所業ではないか。

一瞬で千を屠り、十度繰り返せば万を超える。

誇りもなく、覚悟もなく、ただ殺す為の人形。

ソワリとした寒気が背を這い回る。

この国の軍は一体、何をしている？

この国の要は一体どこにある？

要は軍、軍事国家なのだから当然だ。

しかし、軍その物と言える上級大将の言葉はアレだ。

この国は迷走しているのか？

どこへ？

国民を守るべき軍が迷走してどこへ行く。

国民を守るべき軍が、子供を殺戮兵器にしたてあげて何とする。

考えねばならないかもしれん。

軍、その物について。

私は驚くほどに、軍の行動、その意図を知らなかった。

後日、友人と集まり様々な考察を交えた。

数日後、友人が一人死んだ。

イシュヴァールのスパイに殺されたらしい。

怒りに飲まれ、私はイシュヴァールとの戦場に立つ。

何か大事な事を考えていたはずだが、いや、今は彼の仇を討たねばならない。

幕間：とある少佐の場合（後書き）

仕事できなくなつて暇すぎる。

暇すぎるので、ちよつと書いてみた。

仕事したくて堪らない。俺を助けてくれ！！

21話：俺と僧と鼠と帰郷

ロイに復讐をしつつ数ヶ月が経過した。

と言つても、ロイに対する復讐は3日ほどで飽きたんだ。

一日中野郎を見てるのはもう、物凄い苦痛でね。ジーン・アルフオードと一緒に嫌がらせしてただけど、それでも耐えられないのよ。

それにだ、何が悲しくて、ロイが告白される所を4回も見なければならん。

そんな経験ないぜ？

変人が定着しすぎてんのか、それとも歳の所為かは知らんけどさ。マジで他人が告白されてる所を見るなんて鬱陶しくしようがない。

ともあれだ、あれから3ヶ月。

俺は以前よりも真剣に授業・訓練を受けてる。

自主トレの量も増やしたし、座禅とやらも取り入れてみた。

結果はまだまだ現れてないが、将来役に立つと信じるところと思う。

あと、あの演習だが、これまで6度行っている。

いつも俺とロイは敵対し、それぞれメンバーを集めていく。

どこで聞きつけたのか、今回は俺を、いや、私を！！　って言うてくる生徒が増えた。

その事もあり100名まで増員したんだが、まだまだ増える一方

だ。

ちなみに、例の罰ゲームだが取りやめになった。
なんせ俺が勝っても、ロイが勝っても、お互いにしか罰ゲームを
与えない上に、内容が下らないのだ！！

一日フルチンで過ごせよ。とか
ナンパ100回しろ。とか

あの教官のツラを持ってこい。とか

ゲイバーでベロチューしてこい。とか

一ヶ月様付けで呼べよ。とか

お前のあだ名 花子にするから。とか

いろいろだ。

まあ、本当中身がないのだ。不毛だから止めようと話あったのは
昨日の事だったが……。

・
・
・
・

ともあれ、今日から夏季休暇！！

夏休みと言うと、歳を実感するから言わないよ。

とりあえず、セントラルの土産に中央饅頭・中央煎餅・中央激焼
酎を購入した。

何でもかんでも中央付ければ良いってモンじゃないぞ。
マジで。

もつと面白い土産物を探してたんだが……

「見つかったか、殺れ」

中央駅の地下をショートカットの為移動していると、こんな声を聞いてしまった。

しかも、これは俺に対しての声っばいなー。

見てみると、なにやらゴソゴソと爆弾を設置している人が、ひいふうみいよ……6人。

褐色の肌に赤目。

ああ、イシユヴァール人ですね。

セントラル大丈夫なんだろうか？

こんな所まで進入されるなんて、軍なにやってんの？

俺に向かって走ってくるのは2名。

一人の腕を取り、足をかけて回転させる。

頭から地面に落ちるのを横目に、二人目の腕を取り、外側に移動し顔面に肘を入れる。

一人目は気絶、二人目は焦点が合わないのかフラフラして座り込んだ。

まだまだ、だね。

「とりあえず聞いとくけど、何やってんの？」

「……………」

残った4名はすでに戦闘態勢。
手前から

俺

男 女

男

男

見たいな配置になってる。

イシュヴァールの僧兵は強いと聞いたが、一番奥の男はハンパないな。

唯一徒手空拳なんだが、どっこにも隙がない。

ただ突っ立ってるだけのように見えるが、どう攻めても今一イメ
ージが固まらない。

「もう一度聞く、何やってる？」

前列2名が徐々に間合いを詰めてくるが、一番奥の男が口を開く。

「これから死ぬ男には関係ない」

「ああ、そうだね。これから死ぬんだ、何やってても出来なくなる
か」

カッチーンと来たのか、前列の男が疾走。

ナイフを持っているようだが、錬度は並だ。

ロイでも対処できる程度だ。

突き出してくるナイフの刃を人差し指と中指で止め、捻る。

ナイフが折れるが、気にした風もなく、突きを放ってくる。

サイドステップで避け、側面から顎を一打。

それで終わり。

「なかなかやる」

「どうも、それで？ イッシュヴァールの僧ともあるう者が非戦闘員
轟く中央駅を爆破？ 僧侶とは思えない所業だ」

「だまれっ！！ もとは貴様等が始めた事だろうが！！」

これは前列の女性。

どうも俺の周りにいる女性は気の強い人が多い。
例外と言えばルーくらいではないだろうか。

あの子はあの子で変わってるが、タイプで言えば天然娘だし。

「報復の為、ここを爆破すると？」

「そうだ！！」

「イッシュヴァラが聞けば何と言っかな？ よくやったヨ、その調子
で人を殺しなさいネ、神の名の下にーってか？」

「お前っ」

？ 反応が薄い。

彼女のようなタイプは、もっと激怒すべき言葉だ。

「よせ」

「っぐ」

一番奥の男が声をかけ、女性はとりあえず喚かなくなった。
目は殺さんばかりに俺を睨みつけてるがな。

「確かにイシユヴァラ神がお聞きになれば嘆かれるだろう。しかし、例え教義より外れようと我等は守るべき者の為、少しでも敵戦力を減らさなければならん」

「なら駅なんて爆破するな、ここには戦争とは全く関係の無い人の方が多い」

「違う。例えそうであっても、中央のこの施設を爆破すると言う事に意味がある」

ああ、戦意の話か。

けど火に油になるとは考えなかったのか。

「なるほど、だが、焼け石に水、火に油って言葉を知らんのか」

「ならば返そう、太古の王に曰く・目には目を齒には齒を、とな」

クソみたいな話だ。

「子供を殺されたのだ、子供を殺して何が悪い。って事か？」

確か開戦理由は将校が子供を射殺した事だったか？

「……そうだ」

躊躇いはあるのか。

まあ、この国が起こしている戦争は開戦理由の殆どにグリさんのご同輩が関わっているからな。

エゲツナイ事でも平気でしゃがる。さすがグリさんの家族だ。

「どうしても決行^ゃと言うのなら、俺はアンタ等を皆殺しにしなきゃならん」

捕縛は無理だ。

一番奥の男が居なければ可能だろうが、アイツが居るだけで捕縛は不可能に近い。

「殺されるとは思わないのか？」

「ああ？ 殺されてやるワケにはいかないんでね。マジで殺しに行くよ」

俺は錬金陣を書いたカードを取り出し、その辺の鉄で軍刀を作る。

「…錬金術師か」

「いかにも」

「何故、お前のような子供が……平気で人を殺すなどと言えるのか」

「ここには俺の友達が居る、それじゃ不満か」

「…我等も守る為にここに居て、お前は偶然我等を見つけ、守る為に我等を殺すと言う」

因果な物だ。

そう吐き捨て、僧兵は手を上げた。

「やらんよ。負けるとは思えんが勝てると思えん。出来るならば見逃して欲しいが」

「僧長！！」

残った2人が声をあげる。

しかし、僧長と呼ばれた男は首を振る。

「無意味だ」

「なにがッ、何が無意味なのですか！！ あのガキを殺してここを爆破しましょう！！ それでいいじゃないですか！！」

「……」

俺も僧長も眉を歪める。

歪んでいる何てモンじゃない、狂ってる。

純正のイシュヴァール人の言葉ならば、だが。

「僧長さん」

「なんだ」

「知ってるか、最近の加工技術って言うのは凄くてね、目の色を変えるくらいなら簡単なんだ」

「……」

「だまれっ！！ お前、殺してやる！！」

「例えば、アエルゴ人は浅黒い肌に青い目が特徴だったかな」

「そうだな」

「肌の色を変える染色体もあってね、なかなか高価な物だが、国の援助があるなら大量に購入する事が出来る」

女性が駆け出そうとしてくるが、僧長の前に居た寡黙な僧兵が取り押さえる。

「味方だぞ！！ 何故、私を！！」

「黙れ」

俺は彼女に近寄り、目を見る。

コンタクト…ではないな。あれはまだ活用できるサイズじゃない。となれば、なんだ。

まあ、いい。

ハンカチを取り出し、彼女の肌を強く擦る。

褐色の肌から覗いたのは黒。

黒人とまでは言わないが、それに近い色だ。

アメストリでもイシュヴァールでも滅多み見れない色。

「なるほど、アエルゴさんもやってくれるじゃないの」

彼女は黙っている。

目を瞑り、口も開かない。

「イシュヴァールを支援してたつて言うのは聞いてるけど、まさかこんな事までしてくるとはね」

「なに？　すでにバレているのか？」

「ああ、ちやうちやう。俺の個人的な情報でね、軍はまだ知らないはずだ」

「そうか」

「ああ」

さつてこの人達どうするか、憲兵に突き出してもアレだな実験材料にされるのが関の山だろうな。

ふーむ。

どうせ里帰りするんだ、グリさんに預けるのも一興か。

「とりあえず、この人の見張りは頼みます」

寡黙な僧兵さんに女性を任せ、俺は僧長と2人で、気絶してる奴の気付けを行う。

行き成り俺を殺そうとした奴も居たが、僧長が説得し事無きを得た。

それから経緯を説明。

女性一人に対し、殺さんばかりの視線が集まるが。

「陵辱は無しですよ」

「そうだな。そんな事に意味はない」

僧長さんも同意してくれて助かった。

ぶっちゃけ捕虜レイプとか、さうとう軍規が緩んでる場所でしたか
無いだろう。

「それで、我等をどうする」

「それなんです、蜂起の時期が悪い。イシユヴァールの民にこんな事を言うのも失礼だとは思いますが、後10年は我慢してもらいたい」

「……長いな」

「ええ。ですが、これより10前後2年でアメストリアを崩壊させます。それまでは雌伏の時と置いていただきたい」

驚愕する気配が伝わるが、俺は続ける。

「それまでに俺は国軍大佐にまではなるつもりです。その時の助けとなってもらいたい」

「……近くに士官学校があったか」

「ですね、俺は一応上の覚えめでたいので、上がるだけなら問題ありません」

「……何故だ？」

まあ、疑問をもつてもしゃーないだろうが。

かなり切羽詰った状態なんだよね。

約10年の期間があるとは言え、グリさん情報だとそこでアメス

トリアは地図から消える。
それは俺としては簡便願いたい。

なら国を崩し、裏で操るボケを始末するしかない。
アメストリア式錬金術は使えなくなるかもしれないが、こんな外
法はない方がいい。

「いろいろあるんですよ」

「気になる所しかないな、信用するには足りん」

「ですよね！！ ですので、とりあえず皆さんを匿います。場所は
タブリスになりますよ、いいですか？」

「生き延びれるならどこでも良いが……少し話し合いたい」

まあ、そうだよな。

「なら、1時間後、ここに戻ってきますので、それまでに結論をお
願います」

「まてつ。憲兵を連れてくるつもりじゃ」

これは俺がノックアウトした人だ。

「そうなたら俺は嘘付き、貴方方は騙された愚か者って事になる
だけですな」

「信用できんっ」

「だから離れるんでしょ？ どうせ生きて帰るつもりは無かったん
でしょうから、賭けに出てみるのも悪くないと思えますが」

生きて帰れると思ってたなら、それはこいつ等が馬鹿なだけだ。
軍舐めすぎ。

「いい、行かせる。ただし、裏切ったなら我等は問答無用で自爆する」

りょーかい。と手を振り、俺は土産を買いに移動する。

一時間後、思わぬ土産をGETしての帰郷となった。
さて、こいつ等どう使おうか……
僧長さんくらいしか使えそうな人がいないわけだが。

21話：俺と僧と鼠と帰郷（後書き）

怒涛の更新は無理！！

左手だけで打つてると、なんかモチベ下がるとのよね。

22話：帰郷と母と友と天秤

「見なせい！！　ここぞ我が故郷！　タブリス！！」

私は、帰ってきたーっ！！

って叫びたいくらいに気合を入れて紹介した。

誰にって？

そりゃー

「そうか、それで何処に匿ってくれるんだ？」

お土産5名＋1にだ。

しかし、あれだなノリ悪いな。

大げさにはしゃげとは言わんが、もっとこうあるだろう？

「すまんが、そんな事をしている場合ではない」

そうですか、ならしょうがない。

「まあ、待ちなさい。匿う場所に行くのは、俺の実家に挨拶してか

ら

「…我等を突き出さないと保障出来るのか？」

お袋達が？

ありえないよ。むしろ国家転覆頑張つてと応援されるだろう。

「まあ、見てのお楽しみと言う事で」

ちなみに捕虜のお姉さんはアレから一言も喋ってない。

移動中もされるがまだ。

何考えてるのか知らんが、逃げるつもりなら遅すぎるぞ。
タブリスってのは別名魔窟だ。

いや、俺命名だが、あながち間違っちゃ居ないだろ。

ホームクルスは居るわ、キメラは居るわ、人体練成成功例は居るわ、それを作った主婦が居るわ。

しかも全員旅団規模なら壊滅させれるぜ。

手段を選ばなければだけどね。

あ、グリさん一派は無理か。

道すがら店の説明やら、ここで遊んで骨折ったやら、この家のネコは美人すぎて困る事やら、いろいろ話ながら自宅へと向かった。タブリスは変わらず、のほほんとしていたので安心したよ。

んで、無事帰宅したわけだが……

「この馬鹿息子が……っ!!!!」

何故に帰宅そうそうにブン殴られなきゃならない……

「素晴らしい正拳突きだ」

いや、そんな評価与えなくて良いですから。

てか上手い具合に脳を揺らしてくれたらしく、目の前が暗く……

暗転。

・
・
・
・

いやー解ってるねー。フ、歩き方だけを見ても解る。姐さんマジパネエっす！あのクソガキの育ての親は化物だった……、クソガキって言うんじゃないよ、ガン黒娘。これは民族の特色なんだ！！

なんて良く解らないBGMを聞きながら目を覚ました。
気絶するなんていつ振りだろうか。

頭を振りながら上体を起こす。

目に入ってくるのは、土産で買ってきた酒を浴びるように飲んで
いるお袋、あとイシュヴァラの民+捕虜だった。

親父は食い物運んでる。

「……………」

ゴシゴシと目を擦る。

「……………」

何度見ても景色は変わらん。

いつの間に打ち解けたんだ、とかはどうでも良い。

俺は無言でお袋に近寄る。

「ん？ シグルド目覚ましたんだね、おかえり」

バツと手を広げてくるので、とりあえずハグする。

「ただいま、母さん」

「うんうん。少し見ない内に身長も伸びてるね」

感無量だー！！　って感じで抱きしめてくる力が増える。
しかし、だ。

おい、お袋。

おまんは、何で酒飲んどんねん。

俺は抱きしめた格好のまま、手を伸ばし酒を奪い取る。

「シグルドはまだ飲んじゃダメだからね」

「飲まんって、これはお袋から取り上げたの」

「っな！！　シグルド！！」

「ただでさえ内臓がヤバイってのに酒飲むんじゃない」

まあ、買ってきた俺が言うのは何だが。

「いいじゃない、今日は久しぶりにシグルドに会ったんだ、無礼講
と行こうじゃないか」

「ダメだ。酒は百薬の長のなんて言うけど、それも量と種類による
つつの」

尚もダダを捏ねるお袋をあやしつつ、俺は酒を親父に渡す。

親父は何も言わず、酒を調理場の方へと隠しに行く。

てか、親父が止めてくれたら良かったんだけど、何で止めないの
さ。

「ところで、俺なんで殴られたわけ？」

グズグズしてたお袋だったが、尚もグズグズしつつ理由を話し出
す。

「ああ、あれはね、この人達見るからにイシユヴァール人だったからね。また騒ぎを起したと思って、教育的指導？」

またとか…いや、否定できねー。

確かに騒ぎ起しまくってる気がするもの。

「で、理由は聞いてくれたか？」

「ん？ ああ、セントラル駅爆破しようとしたらしいね、全くシグルドもヤンチャすぎるよ……するなら大總統府にしときなってアレほど…」

ちよ、おまつ…！

なんで俺が爆破するんだよ！！ しかも過激な発言すぎるし！！

「僧長さん。あとでオハナシしようか？」

「まて、私は包み隠さず話した」

「じゃあ、なんで俺が爆破犯にしたてあげられとるんじゃー！！」

グデつと俺にもたれ掛かってくるお袋を支えつつ、抗議する。

てか、俺は変人だと言われているが、そんな過激な事をするほど可笑しくなつたわけじゃないぞ…！

「全くシグルドは昔から私達に心配ばかりかけて、もう少し、大人しく、んー？ いや、今のままで良いよ。ずっと私に心配かけさせな。私が絶対守るからね、シグルド、私の息子なんだから……」

寝た。

どんだけ飲んだのかしらんが、寝た。

後、周りの視線が凄く生暖かくなった。

居た堪れなくなり、俺はお袋を部屋に運ぶ。

しかしまあ、お袋は変わらないな。

いや、ああ言った事を言葉にするようになっただけ変わったか。

昔なら影ながら守る事しかしなかったし。

言葉の上では俺を守るなんて事は一度も言わなかったような気がする。

・
・
・
・

お袋をベッドに寝かせる。

少しやつれた様に感じる、無理もないか。

なんせ俺は虎穴にいるようなもんだ。まわりは軍関係者ばかり、その上知識も実力もある錬金術師がわんさかいる。

筆頭は烈明の錬金術師とか言われる奴だが、面識はない。

その他にも多数の国家錬金術師が滞在している。

セントラルとは、そう言う所だ。

しかも軍学校にも錬金術師の卵が結構いる。

こちらの筆頭はロイだが、アルフォードもかなり上だ。

気付かれる事なんてないだろうけど、それでも一般の訓練生と比べると警戒してしまうのはしょうがない。

実の所、ロイへの第一印象はかなり悪かった。

出世欲旺盛、現士官学校上位の成績、イケメン、錬金術の知識の

豊富さ、錬金陣構成の緻密さ。

全てが俺に警戒を促せた。

今でこそ一緒にバカやってるが、あの反乱騒ぎがなければ、ロイが卒業するまで顔を合わせる事も回避していただろうと断言出来る。

仕官学校に居る錬金術師の事は、お袋には知らせていない。

ジーンとアルフォード経由での情報があるかもしれないが、それでも俺は知らせない。

お袋に負担が行くかもしれないと、そう僅かでも過った物は全て知らせない事になっている。

何故なら、医療に付いての知識を貯めれば貯める程、お袋は長くないと、そう突きつけられるからだ。

この国の平均寿命は80だが、お袋の場合50まで生きられれば良い方だ。

内臓の欠損と言うのは本当に、腹が立つ。

何故、腕や足じゃなかった。

この世界にはオーバーテクノロジーとも言える機械鎧オートメイルがあるのに、それなら、俺は技師になり、お袋の手足を作ってただろうに…

何故、目や舌じゃなかった。

俺がお袋の目になり、声になったのに。

現在の俺では補えない箇所ばかりが欠損している。

俺をこちらに招いた影野郎はこれを見越して、俺に能力を授けた
としか思えない。

何故、創造する力じゃなかった。
何故、治療する力じゃなかった。
何故、再生する力じゃなかった。

俺はベッドの脇に腰掛け、ほつそりとしたお袋の手を握る。
1年前に比べれば太くなっているが、それでもやはり細い。
体温は心地良い低温。
赤ん坊の頃は凄^いあつたかと思っていたけど、やはり女性の体
温は低い物なんだな。

「特殊な力があっても俺は……無力だな」

思わず頂垂れる。

声に出すと、無力^{それ}を実感する。

“ありとあらゆる物と契約出来る程度の能力”それは、言ってみれば絆の能力だ。

相互に干渉し合う条件がなければ、支配の能力だろうが。
あれがあるだけで、絆の能力になる。

今でも人に対しての契約は怖くて出来ない。

それは、俺が傷付くばかりではなく、相手が傷付くのが怖いからだ。

もし、訓練で大怪我をしたらどうなる。

もし、仕官した先で銃弾をあびたらどうなる。

もし、戦場で……死んだらどうなる。

それが怖くて怖くてしょうがない。

それでも、俺がこの能力に見出す希望は大きい。

お袋と契約したらどんな効果があるか。

先月まで体の状態が下の者に引きづられる事しか解っていないかったが、他の恩恵もある事が解った。

俺は他にくらべバランス感覚は異常とも思える程に高い。筋肉のしなやかさも異常、そう言って差し支えない。

それは子供の頃からそうだった。

だが、前世ではそうではない。

確かに標準以上を維持していたが、今ほどに異常な感覚はもっていなかった。

それが躊躇に見える場面は多数ある。

例えば、遺跡で刀を抜く時、グリさんに声をかけられた時の動き。

例えば、刀を抜いた時の跳躍距離。

例えば、グリさんに放り出された時のバランスの取り方。

例えば、反乱時の警戒範囲の広さ。

例えば、例の演習でビルから飛び降りた時の感覚。

どれも常人ではありえない事だ。

どこに瞬時の反応で大した負荷も無く、筋力を自在に操る人間がいる。

どこに10mも上の天井まで筋力のみで、飛び跳ねる事の出来る人間がいる。

どこに不意打ちで1m程の高さから落下して状態を整え、両足で着地出来る人間がいる。

どこに走っている途中で10mも先の、しかも物陰に居る人の気配を正確に把握出来る人間がいる。

どこに14m下に飛び降りるのに僅かも躊躇しない人間がいる。

どれだけ鍛えようとも超えられない壁と言う物が在る筈だ。

俺はそれを易々と超えている。

初めの内は体のスペックが高いのだと考えていた。

そんな筈は無い。

なんせ俺は俺だからだ。

あの影は言った。

“お前を人体練成しようとしている人間がいる”

俺は、これをそのままに受け止めていなかった。

ありきたりな特典でもあるだろうと思っていた。

しかし、影はいつたはずだ。

“お前を”と。

知識を蓄え、俺は確信した。

俺は俺、些かの変わりも無い。

育つ環境、食事の種類による肉体の成熟度の変化はあるだろうが、現代よりも劣るなどと言う事は、在り得ない。

軟弱していると言われていた現代だが、食事のバランスと肉体を鍛える技術は、この世界の遙か先を行っている。

武術を学んだ有無を排しても、今の俺の状態はおかしい。

ならば何だ？ 何が原因でこうなった。

そう考えて出た結論は…“契約”

上位が下位に引つ張られるデメリットにはかり目が行っていたが、猫の柔軟性とバランス感覚を得ていると考えると、今の俺の状態は

全て解決する。

それに、それを補強するように、ニヤンコは今も生きている。俺が3歳の時に契約してから11年だ。

あの時すでに生後1年は経過していたはずだ。にも拘らず、現在でもニヤンコは活発に動き、跳ね回っている。発情期も来るのが遅かった上、現在でも稀に致している。

これで俺は下位から上位への恩恵、その逆も在る事を確信した。

お袋にコレを適応した場合はどうだろう。

少なくとも、現在の状態よりもよっぽどマシになるはずだ。だが、“契約”には常にデメリットが付きまとう。

それは怪我と言う形であり、それは死と言う形である。

鳥が死んだ時、俺は死を免れた。

しかし、それは俺と鳥とでは規格が違ったからにすぎない。

確かに俺の腕には穴が開いたが、あれが額や胸であった場合、俺は死んでいただろうか？

答えは、否だ。

5歳の子供が腕を拳銃で撃たれば、その腕は一生使い物にならなくなる。

しかしながら、俺にその兆候は一切なかった。

それは緩和されている以上に、俺が上位で鳥が下位であったからだ。

下位からのフィードバックは、上位に損害が無い程度に緩和される。

ならば上位からのフィードバックはどうなるか。

恐らく、俺の死＝契約者の死だ。

その結論が、俺の生き物に対する契約を躊躇させる。

お袋を錬金術を用いて回復させる手段も思いついている。
後は、経験と手段が足りないだけだ。

だが、だが！！

目の前に危険な道を通らずとも、お袋を回復させうる可能性がある。
る。

お袋を目にしてから、俺は揺れている。

錬金術による、危険で確立されていない手術を行うか。

契約による、安全で、俺が国を諦めれば済む手段を行うか。

揺れている。

本当に、どうすればいいのか分からない程に。

「……つく……つく……」

ワケの解らない涙が零れる。

いや、解ってる。

今すぐにもお袋を助ける事が出来る可能性がある。

なのに、それは俺の絆を切り捨てる事に繋がる。

ジーンやアルフォード、ミリアリアにルー。ロイにヒューズさん。

俺が軍から離れば、その関係は壊れる。

ジーンは、苦笑いして、色々な物を諦めるだろう。

アルフォードは、静かに怒り、俺を殴るだろう。

ミリアリアは、関心も無くし失望するだろう。

ルーは、泣きながら俺を引き止めるだろう。

ロイは、やはり俺を冷笑しながら罵るだろう。

ヒューズさんは、笑いながら頑張れと言ってくれるだろうか。

同期の皆は俺を“目標”“理想”だと言った。

ロイとヒューズさんは、俺を鍛えてくれた。

お袋を目にするまで、この可能性は封じていたのに。

揺れる、揺れてしまう。

どうしたら良いんだ。

……どうしたら

22話：帰郷と母と友と天秤（後書き）

皆、趣味を仕事にするべからず。
趣味を仕事にするなら、新しい趣味を見つけておく事をおすすめする。

今日の内にもう一話投稿します。
時間は~~~~未定。

23話・信じる。

「どうすればいい……母さん、…あさん、助けたい、助けたい、の
に。どうすれば良い、俺は…」

息子が泣いている。

苦しそうに、悔しそうに、命一杯の涙を零している。

私が目を覚ましてから、4時間。

外にはすでに、朝を告げる太陽が昇り始めている。

どれだけ泣いていたのだろうか。

私を呼ぶ声はか細く、今まで見た事のない涙だ。

ベッドの隅は息子の涙で濡れて、手は痛いほどに握られ、息子の
苦悩の深さを思い知る。

止め処なく涙を流す目は、確りと私の顔を見ているのに、私が起
きている事にも気付いていない。

そればかりか、部屋の隅にはシグが腕を組んで息子を見ている。
どう考えても初めから居たとは思えない。

私の様子を見に来たか、シグルドの様子を見に来たか、その時に
見てしまったんだろう。

この子の泣いている姿を。

「…なんで、こんな……こんな能力ものなんだ……なんで」

すでに何度も耳に入れた言葉。

4時間の内の半分は、自身の能力に対しての恨み、そして悔いを

吐いている。

初めこそ心に突き刺さったが、長く聞いていると能力に不満があるのではなく、その内容に不満がある事が解る。

何故、私を治療出来る能力を貰えなかったのか。

この子は、そう嘆いている。

だが、私に言わせれば当然だった。

アレが対価を支払わせた相手の、しかも対価の治療を出来る能力を与えるはずがない。

アレの本質は奪う事にある。

アメストリスと言う国の錬金術は、ハッキリと異端だ。

今まで地殻エネルギーによる錬金術の行使を行ってきたつもりだったが、グリードの情報からそれは大きな間違いだと言う事を知らされた。

アメストリス式錬金術の使用するエネルギーは、命だ。

2000年に渡り殺戮の歴史を刻み続けてきたこの国は、大地に命を刻んだ。

血の紋などとグリードは言っていたが、何億もの人々の命を扱う術など悍ましくして仕方が無い。

そして、死した命が求める物は、やはり生ある命だろう。

アメストリス錬金術と言う物は、比較的簡単に扱う事が可能だ、それこそ頭の良い子供でも扱える程度には。

そして、ある一定の条件を満たすと、奪った分を取られていく。そしてアレと合間見える。

門のような物から出てくる黒い腕は、そこに行き着いた者の咎を清算するように様々な物を奪い。そして与えていく。

脳に刻まれる膨大な知識は、聖痕のような物だ。

ようは目印。

アメストリスからの逃亡を阻害する鎖でも良い。

だが、ダレがそんな事をして特をする？

答えは簡単だ、この錬金術を広めた初めの錬金術師。「東の賢者」と呼ばれる化物。

そんな奴が、生み出す能力を与えるわけが無い。

この子の今の姿は当然の帰結だったとも言える。

だが、異例とも言える結果を残した錬金術師が居る。私だ。

生み出す奇跡を成し遂げた私。

癒す奇跡を成し遂げるのは息子だ。

ポツリ、ポツリと聞こえる内容から、私に対する治療の目処も立っているようだし、その手法がなんであれ、私はこの子の信じた手段で私を救ってもらおう。

息子の晴れ姿を見て、私の孫を抱くまでは死んでも死にきれない。

だからこそ。

「めそめそ泣くんじやない」

「あ、え？」

パシんツと息子の頬を打つ。

「シグルドが信じた物を信じる、良いね」

横を向いていた息子が、ゆるゆると私に向き直る。

「なんだよ、それ」

困ったような泣き笑い。

少し見ない内に成長したようだ、本当にいろいろ。

「私達は信じる、そうだねアンタ」

「ああ」

シグが頷き、息子が慌てて振り向く。

「お、親父、いつの間に」

「さてな、7時間は居たはずだ」

「な、7時間……」

「そんなに泣いてたのかい」

「俺が知る限りではな」

うあ、気付かなかった。

そう言っつて頭を抱える息子。

全く、考え込むと没頭してしまうのは悪い癖だろう。

仕官学校でもたまたまに見かけるとジーンさんから聞いていたけど、

今回の最長だろっね。

「お前が何故、それほど悩んでいるのか俺には解らん」

シグは目を瞑って息子に話しかける。

「だがな、お前は誰の息子だ」

砂漠超えをした時にも聞いていたと言っ言葉。

残念ながらその時、私は気絶していたが。

「…シグ・カーティスとイズミ・カーティスの息子だ」

「なら、お前が信じた道を走りぬけ」

俺達はそうしてきた。

そうめて、シグは部屋から出て行く。

ドアから覗く廊下には、例の僧長が居て、目を閉じ腕を組んで壁にもたれ掛かっている。

その奥には、色黒の娘が居て、カクンカクンと頭を上下させている。

盗み聞きしていたワケで無いだろう。

シグルドに用事があったが、恐らく気を使ってくれたのだと思う。

「うわ、なんであいつら……あ、そうか、忘れてた…」

また抜けた事を言い出す。

頭を叩いて、活を入れる。

「ちょっとは悩みも晴れたかい」
「ん、だな。正直助かった。グルグルグルグル同じ事しか考えられなかったからさ」

照れたように頬を掻いている。

そんな仕草もここ最近は見れなかったからか、不思議と泣きそうになってしまう。

「でも、やっぱり母さんと親父は、凄いな。2人にかかれば何でも、解決しちまう」

「まだまだ未熟だって事だよ」

「ああ、」

敵わないよ。

ボスンと、気絶するように私の膝の上に倒れこんでくる。
これは寝たか。

しかし、この体制では寝違えるだろう。

僧長と色黒娘を呼びつけ、私のベッドで寝かせる。

「泣いていたのか」

「そうだね」

「……まだ13、だったか」

「ええ」

こんなに子供だったか…

僧長さんは疑問そうに呟く。

「早熟だね、頭も良いから親としては寂しいやら嬉しいやら」

「…子を持った事は無いが、そう言う物が」

感慨深そうに息子を眺めている。
色黒娘も今のシグルドを見て、少しばかり驚いているようだ。
何をそんなに驚く事があるのか。

「まだ、13？ この子が？」

「そうだよ」

「ははは、そんな子が国家崩壊を謡う？ これは喜劇じゃない」

確かにそう思ってもしかたがない。

だが、この子がダレの息子か知らないのか。

「私の息子がその程度 出来ないわけがない」

一息に言い切り、私もシグの後を追って部屋を出る。

今はゆっくり休みな。

激動に時代は、まだまだこれからなんだから。

私は部屋の外から「静かにしてなよ」と声をかけ、あとはもう一
直線に職場に向かう。

少しばかり遅い時間だから急がないとね。

23話・信じる。(後書き)

あえて23話としました。
理由はなんとなく。

24話：説明と俺と色々

「なんだ、これは……」

一枚の地図を眺め、僧長さんが声を震わせている。
ここはグリさん一派の基地。

とりあえず僧長さん以下3名を匿うために連れてきた。
と言つてもすでに夜なんだが……

夜までここに来れなかったのには理由がある。
俺だ。

お袋にはつられて、親父に活を入れられて。
その後、俺は寝た。
実に12時間ほど。

……
んでまあ、飯食つてんじや移動しようか。って連れてきたんだが

グリさんつたら挨拶も無しに、ノツケから国土練成陣の事をバラ
してくれました。

あのスパイさんも居る目の前で。

「あんだ、錬金術は出来るか？」

「……できん」

「なら解らねーか……おい、シグルド説明してやれ」

しかもだ、国土練成陣の意味と詳細については俺任せ。

全くこのグリードはマジで脳ミソぶちまけてやりたい……いや、ぶちまけても無駄か。なんせトカゲだし。

「おい。聞いてんのか」

催促され始めたので、テキトーに説明を始める。

「聞こえていますー。全くグリさんは短気でいかんよなー」

「お前は……久々にあったつてのに変わってねーな」

「いや、半年そこらで人は変わらないだろ」

「アホ抜かせ、1時間で激変する奴なんて五万という」

いや、まあ居るだろうけど、それってかなり少数派じゃね？

人はそんな変わる物じゃないし。

まあいいか。

「んで僧長さん。どの辺が解らんので？」

「…我がイシュヴァールがなにやらキナ臭い事に巻き込まれている事は解るが……ほぼ全て理解できん」

ですよね!!

俺も地図見せられても解らねーよ。

グリさんアホだろう。

「んむ、お察しの通り。イシュヴァール地区はかーなりマズイ事に巻き込まれています」

「……進行形なのか」

「イエス。ちなみにその印がある所では数百万単位での死傷者が出てます」

無論、イシユヴァールは 印ど真ん中だ。

「何故、それほどの死傷者が出るのか。答えは簡単です。軍がわざとそうなるように行動しているから」

「……何故だ」

当然の疑問だわな。

むしろここで疑問を覚えない奴は終わってる。

それが軍の行動方針なんだろ。で完結する奴はぶっちゃけ早く死んで欲しい。

「その丸印はグリさん曰く“血の紋”とよばれます」

複数の をなぞる。

「血の紋とは100万人以上の血で構築される練成陣の一部です。血と一重に言っても、それは命その物といっても過言ではありませんん」

100万人以上つてのはハツタリだ。

グリさんもどれほど殺せば血の紋が成立するのか知らなかった。

この役立たずが。と罵った事は記憶に新しい。

もちろんドツかれた。しかも硬貨した手でだ。

「……100、万」

「アメストリスと言う国は200年の歴史しかありませんが、この国は元は小さな弱小国でした。しかしながら『東の賢者』の発生によって国は変わります」

ほんとうに、歴史を紐解けばその変わりように戦慄するしかない。

「『東の賢者』によつて齎された錬金術。その圧倒的な力によつて小国は領土を拡大していきます。その際、隣接国を丸ごと殲滅する事も珍しい事ではありませんでした」

ついでの様には国を丸ごと滅ぼすなんてのは、日常茶飯事。

中期アメストリスの周辺諸国、その中でも血の紋の位置に来る地域では本当に悲惨な事になっていたらしい。

「2000年に渡り、そんな領土拡大方法を取っている国です。蓄積された血は一体どれほど大地に染み込んでいるか、想像するだけでも気分が悪い」

血の紋一つにつき100万人以上つてのはハツタリだが。

トータルで見た場合、100万では到底追いつかない量の人間が死んでいる。

「そして“血の紋”とはある練成陣を完成させる為に作られた物です」

「…それは？」

「“賢者の石”の製造の為、ですね」

5名の顔色はそれほど変わらない。

錬金術に詳しくない者が“賢者の石”などと言われてもピンとこないだろうね。わかるよ。

俺も今一わかんねーし。

「ちなみに、賢者の石ってのは錬金術の力を上昇させるアイテムです。その他にも使用方法があり。代表的なのは」

チラッとグリさんに目を向ける。
グリさんはいかにも「舐めんな、嫌に決まってんだろ」と言いたげな顔をする。

俺はそれをシカトし、カードを取り出して机を材料に剣を生成。

一瞬でグリさんの首を刎ねる。

「っ！？ 何をやっている！！！」

僧長さん以下4名が騒ぎ立てるが、俺はグリさんを指差し、口を開く。

「人造人間。ホムンクルスと呼ばれる……」

刎ね飛んだ首が更々と消え、胴体から首が生えてくる。

「命のストックを持つ、ある種の不死生物です」

「お前腕があがったな、剣線が見えなかったぞ」

ゴキゴキと骨を鳴らしながら身を起すグリさん

「まあねえ、俺も現状維持では満足できねーし、めっちゃ鍛えてるっ
ての」

俺は見慣れた光景に懐かしさを感じる。

しかしながら、僧長さん達には刺激が強すぎたのか、青褪めてい
る。

「グリさんは賢者の石を核に作られた、魔法生物みたいなもんで
して、現在で197歳。小指の先程度の賢者の石を核に使ってコレで

す

絶句しているのか、誰も反応を返してくれない。
少し寂しさを覚えつつ話を進める。

「ちなみに、グリさんの核になっている賢者の石精製に必要な人数は1万人程度ですね。」

「それも1万人の中の“強欲”部分のみだがな」

しかし、最低8名でも作れるのだから、かなり純度の高い“賢者の石”を使っている事に変わりはないだろう。

「話を戻しますが、たった一万人でこの化物が作れます。なら一つの紋に100万払うこの陣はどれほどの石となるのか？」

ぶっちゃけその賢者の石が出来たら欲しい。

出来ない事などなくなるだろう。

「…『東の賢者』とやらが黒幕か？」

お。話が早い。

僧長さんはやっぱり頭の回転がいいね。

「エレス・コレクト。正解です。実に2000年の計画的建国と侵略が行われています。現在の標的は」

俺は赤のペンを取り、丸印の上にチェックを入れていく。

「ここと、ここと、ここですね」

国境を二箇所と、最後にイシュヴァール。

三面戦争など自殺行為と言うにも生ぬるい。しかし、アメストリスの持つ軍事力はそれを可能にしている。

要はやはり国家錬金術師だ。あれは個人で10万の人を虐殺できる可能性を持っている。

「国境戦はハッキリと泥沼化しているのが一箇所、今の所穏やかに戦争しているのが一箇所。そして、イシュヴァールですが……」

俺は僧長と他3名を見る。

血が通っていないのでは、と思うほど青褪めているが、目だけはランランと輝いている。

まあ、これなら大丈夫か。

「血の紋を構築するにはまだ足りないようです」
「ッ」

息を呑む気配を感じつつ、地図に目を落とす。

「これまでの戦争の過程から考えるに、そろそろ殲滅戦に移ると思います」

「…殲滅だと!？」

「ええ。多分早くて2年、遅くても5年以内にはそうなるはずですよ」
「つく」

民族に対する戦争で、アメストリスが殲滅戦に移行しなかった戦争は稀だ。

国対国ではそうそう殲滅戦になどならないが、民族に対しては違う。

なんせ人員の絶対量が違うのだ。

国に対する場合は勝手に被害が増えるが、民族を相手にした場合
はゲリラ戦法を使ってくるので狙った所に血が集まらないのだ。
故に最後は殲滅になる。

「現在の所、血の紋に必要な命の量の半分にも達していないと思わ
れます」

これは本当。

あの場所での戦闘は50年程前に一回あったが、それほど被害が
拡大しなかったのと、他国の攻勢が強かったのが重なり、一度和睦
したので。

他にも理由がありそうだが、考えるだけ無駄だ。

「殲滅戦に移行した場合の被害は…8万人以上になるでしょう」

イシュヴァール人だけだな。

アメストリス軍人を合わせれば量は何倍にも跳ね上がる。

なんせ無能な指揮官を配属するだけで被害は拡大する。

そして、それを助長するようにイシュバールの僧兵は屈強だ。

「ちなみに、現在は国家錬金術師は参戦していませんが、アレが参
加するだけで被害は鰻登り。一夜で都市一つ壊滅させる事など朝飯
前です。あれは…」

「ふざけるなっ！！！」

俺のセリフを遮るように怒声があがる。

僧長さんではなく、後ろに控えていた僧兵だ。

「我々を、人をなんだと思っている！！ 8万だと？ それがいシ
ュバールの総人口の何割だと思っている！！！」

「フ割強ですね」

「解っていないながら……解っていないながら放置するのか!」

んな事俺に言うなよ。

解っててもどうしようも無い事って結構あるんだけど。

「俺に出来る事は『逃げる』と言う事だけです」

なんせ権力も何ももってないのだ。

どうしようもない。

「なんと言う恥知らず!! かならず神のお怒りを買っただろう!!
イシユヴァラの民は……」

続ける言葉は途中で途切れた。
僧長さんがブン殴ったからだ。

「黙れ」

「しかし、僧長!」

「黙れと言った」

「つぐ」

「すまん」

「いえ」

むしろ、こんな話を冷静に聞いているのが凄い。

腸煮えくり返っているだろうに、表情からは何も察せない。

「つまる所、我等は逃げれば良いわけだな」

「ええ。対処としてはそれが一番です」

「……それが我等にとってどれだけ耐え難い事か、解って言ってい

るのだな」

すまんが、俺には解らん。

土地など命に比べれば些細な事だと思っている。

「正直な所、土地に拘る事に理解を示せません。ですが、イシユヴアラの民にとって大事な物だと言う事は臆気ながら解ります」

「……」

「それでも、俺は逃げると言います」

僧長は椅子に深く腰掛け、目を瞑る。

彼の頭脳は目まぐるしい速さで回転し、耐え難い葛藤が渦巻いているのだらう。

「……説得してみよう」

数分瞑目していた僧長は目を開いてそう言うてくれた。

「だが、我等の土地に対する価値は、君の母に拘る気持ちに似ている。説得は難航するだらう」

なるほど。なら逃げれないか。

俺なら逃げない。何としても敵を殲滅するだらう。

「お願いします」

「解った」

ぶつちやけこの人達にはそれほど期待していない。

説得出来ずに死んでも、俺はなんとも思わないだらう。

精々国土練成陣の完成が数ヶ月遅れる。その程度の期待しかして

いない。

「ちなみに、この話は他言無用です。説得される時にもそれは心がけてください」

「ああ」

「そっちのスパイのねーちゃんも他言すれば即座に殺すから、そのつもりで居てくれ」

一度コクリと頷き、顔を伏せる。

恐らく地図を見ているのだろう。

なんせ、血の紋はアエルゴの一部にもある。

そこでは小競り合いが続いているが、いつ戦端が開かれても可笑しくはない。

色々思っ事があるのだろう。

その後、僧長さん達をグリさん一派に組み込み、一応匿う形はとれた。

帰国は数ヶ月後にするらしいが、その際5名にはグリさんの手下が監視に付く事になっている。

まあ、時間稼ぎをしてくれて、尚且つ生きていてくれたら儲け物だ。

スパイのねーちゃんはアエルゴに返すわけには行かないのでイシユヴァール組と行動を共にするようだ。

俺と言えば、その後の数十日を家でダラダラと過ごした。

久しぶりの手料理やらなんやらを食べてかなり満足の行く休暇だった。

24話：説明と俺と色々（後書き）

ながらく留守にしている、申し訳ない。

とりあえずゲーセンで格ゲーを極めてきました。大学以来いつてなかつたけど、まだまだ捨てたもんじゃない。

今回の話はほぼ、説明の回。特に言うべき事はありませんが、筆ののりが悪い感じ、修正はしませんが……
微妙だなー。

幕間：ジーンさんの場合

人生と言う物は私にとって、選んで歩く険しい荒地では無く。遠い、遠い先まで見通せる数本の平地でした。

どの道に進めばどのような結果が有り、それが私にどんな利を齎すのか。

その全てが理解出来ました。

私の中に流れる血は、4種。

4つの血が混ざり、絡み、私に利と害を与える事も予測できた。

私を見る目は第一に懐疑。

第二に拒絶。

第三に虐待。

ほとんどの場合は、その単純に過ぎるルーチンを巡り、私に害を与える。

どのような反応を返せば、ルーチンから脱する事が出来るか、どの反応を返せば、彼等を私の利に組み込む事が出来るか。

すべてが理解できました。容姿をも武器に使えば、操れないモノなどいなかった。

それは、とても詰まらなかった。

人の心の機微すらも、私には手に取るように解る。

10を超える頃には私の生まれた街で、私の意図通りに操れない人間など居なかった。

親ですら、私の意のままに操作できる。

彼等が私に親としての愛情を持っていない事に気付いたのは、たしか7歳の頃。

その時の私の感情は、無だった。
何もなかったのです。

ああ、そうなのですね。

それが真つ先に浮かんだ感想。

それからは、全てを私の望んだ通りに動かすのに些かの躊躇もなくなりました。

ですが、それも4年も続けば退屈で死にそうになる。

そこからは“ミチ（未知・道）”を探して歩き回った。

錬金術・機械鎧・料理・薬学・数学、ありとあらゆる学問に手を染め、私の出した結論は…

つまらない。

全てが決められた道筋を通り、想定された結果に帰結する。
確かに私の知らない物もあるにはある。

しかしながら、私の探している“ミチ”とはそれではない。

私は私の与り知らぬ感情を探しているのです。

身を熱くするような感情を。

思わず笑ってしまいそうになる激動を。

心を振るわせる感動を。

私はそれを探している。

軍士官学校に入ったのは単純に、この意のままに操れる檻から出たかったから。

もしかしたら、軍の専売の学問であれば私に新しい何かを与えてくれるかもしれない、そんな想いも僅かに抱きながら。

そして出会った“ミチ”は、私に大きな感動を与えた。

入学式。

それまでの期待を幻滅させるような一週間を経てやってきた、宴の日。

私は、初めて、驚愕と笑みを得た。

シングル・カーティス。

彼の成績すらも私の予想範囲外であつたにも関わらず。

その独特の雰囲気は全てを圧倒していた。

彼の名が呼ばれ、壇上に登る姿は普通の少年。

しかし、彼は原稿用紙を一瞥し、そのまま手を離し足元にはら撒く。

慌てる教員。

彼はそれを意にも返さず、自己紹介を行い。

「皆さん、背後を御覧下さい」

そう言った。

私は、驚きと興味を持って背後を見る。
しかし、そこには何もなく、大勢の人々が私と同じように首を捻
っているのが見えるばかり。

「皆さん、俺を見て下さい」

言われ、何がしたいのか理解の外にあるままに壇上に目を向ける。
そこには満面の笑みを浮かべたシングルドの姿。
そこに至って理解した。

ついで、込み上げてくる笑いを自覚した。

なんて事だろう！！

操る側に居た私が！！ 私が、操られていた！！

これを、笑わずに何を笑えばいいのか！！

「俺にはコレだけの人々を動かす力がある！！ 皆もそれだけの力
を得る為にここに来た！！ 素晴らしい学校生活にしよう！！ と
言う事で俺に清き一票を！！」

ハハハハハハハと笑う彼を見て、私も笑う。

素晴らしい。貴方はなんて、素晴らしい。

初めての“ミチ”との遭遇だった。

その後、私がどれだけの勇気を振り絞って彼に声をかけたか、彼
は知らないだろう。

ドキドキと高鳴る胸。

初めて私が手を伸ばす、荒地。

私を選ぶ、私の上位者。

彼以外に私の上に立つ者は居ない。

私自身がそう決めた、初めての相手。

彼に魅了され、彼に声をかけるだけでアレだったので、ア
レは告白だったのかもしれませんが。

彼の反応は、また私の予測を裏切り「君さ、熱あるんじゃない？」
や「いやいや、狂ってるからー」など、私に様々な想いを想起させ
る事ばかり。

微妙に、不満な気持ちも抱きつつ。ああ、これも初めてかしら。
などと私は感動する。

それから、本当に楽しい事ばかり。

錬金術の講師に、逆に講義してみたり。

銃剣の講義で講師を圧倒して見せたり。

彼ほどに、私の予測を軽々と上回る人間は知らない。

軍事訓練の際、彼の言った扇動の言葉など、私に熱く煮えたる
理解不能の思いすらも発生させた。

彼は凄い。

シグルドは、本当に凄い。

たまに抜けている所もあるけれど、それすらも私にある種の感動
を呼び覚ます。

彼と出会ってから、私の世界は確実に色を変えた。

彼と出会ってから、私の人生は見通しが効かなくなった。

嬉しい。なぜこれほどに嬉しいのか理解出来ない。
でもそれがまた、嬉しい。

私に理解出来ない事がある。

世界は広がり続ける。

その果ても無く、シグルドを中心に私の世界は広がり続ける。

夏季休暇など、無ければ良いのに。

こんな退屈な場所に戻るなど、今の私には耐えられない。

まるで薬を切らしたヤクチュウのように、私はこの夏季休暇の終わりを切望する。

退屈で退屈で退屈で、数十日が数年なのではとすら感じる程、退屈だった。

持ち帰った日記を読み、場面を想像しながらニヤケる事。

あるいは、これからシグルドの巻き起こす騒動を想像し、どんな風に期待を裏切ってくれるのか、それを予想する。

それだけが、この退屈から脱する方法だった。

そして、夏季休暇は終わり、私は見慣れたセントラル駅に降り立つ。
つ。

鞆を足元に置き、久しぶりな風景を見渡す。

どの場所にも思い出がある。

楽しい事、嬉しい事、悔しい事、悲しい事。

全てが全て、私の知らぬ感情だった。

今の私は当然のように感受している、その感情。

数年前の私が見れば、どう思うだろうか？
羨ましがれる？ 先の見えない人生など意味は無いと罵る？
解らない。

ああ、また解らない事が出来た。

そうして、少し浸っていると何やら騒ぎ声が聞こえてきた。

「ちょーーっ！ なんでアンタが居るんですか!?!」

「ああ、婦人に頼まれてな。見送りだ」

「ぶふーっ!! ダメやる!! 母さんチョイスがイカレてるやる
!!!」

見れば、私の切望する人物。

私は気付かれないように接近する。

「ああ、婦人からはお前が無事付いたら戻るように言われている」

「いや、おまつ、拒否してよ」

「拒否権があるとも思っているのか……」

「あ、すみません」

双方ともにシヨンボリしている。

しかし、あれは誰なのでしょうね。

ワクテカがとまりますん。

ポンツとシグルドの肩に手を置いて一言。

「お友達ですか?」

ビクツと体を揺らし、シグルドの顔から汗が滴る。

面白い。

「ジ、ジーンさん。はは、いやーははは。そう、そうなのです、友達です」

参ったなー。と頭を？く姿を見て、なぜか苛めたくなる。

「それは良かった。私にも紹介してください」
「え、いやー」

と言葉の接ぎ穂を探しつつ、思案している。
ついで、汗がとまり、もういや。とでも言いたげな表情に。

「紹介しましょう！！ 我が母の下僕一号！！ イシュヴァールの僧長さんです」

「……君な」

僧長さんの疲れたような姿を目にしつつ、私は目を見開く。
予想外、想定外、キチガイ。

いえ、最後のは……いえ、あながち間違っではいませんが。

「シグルド、貴方は馬鹿ですか、阿呆ですか」

「んー、いやな。イシュヴァールの民って強いよ。俺の護衛に雇ったのさー」

すげーだろ！！ と笑う姿は何の不安もないよう。

貴方は、本当に……

「しかし、バラしても良かったのか？」

「ああ、ジーンなら問題ないでしょ。ぶっちゃけイシュヴァラの民の1人や2人居た所でセントラルが揺らぐワケもないしね」

「いや、俺が心配しているのは……まあ、いいか。君が問題ないと
言うのならそうなのだろうな」

僧長さんとやらは、はああ。と溜息を付く。

「まあ、もう帰るんだろ？」

「そうだな、用事は果たした」

「おう。んじゃ避難がんばって下さい」

「善処しよう」

ではな。

と手をあげ、列車の中に消えて行く。

じゃなーと手を振っているシグルドの手を掴み、私は笑う。

「シグルド？」

「は、はい？ なんでしようジーンさん！！」

ギギギギギギとやたら時間をかけて振り返る彼に、満面の笑み
を向ける。

「ひいい」と声をあげているが、私はそれを無視して続ける。

「色々、本当に色々聞き出さなければならぬようです、そうです
ね」

手始めに、貴方の人脈からでも聞き出しましょうか。

「ああああ、ジーンさん！！ お願い！！ 手加減して！！」

「それは貴方しだいでしょう？」

いーいーやーいーいー！！ と叫ぶシグルドを補導しつつ士官学校に

向かう。

あはははは、貴方は本当に、なんて、楽しい。

幕間・ジーンさんの場合（後書き）

健全だ。俺は健全だと聞いている。

「色々、本当に色々聞き出さなければならぬようです、そうですね」

「色々、本当に色々聞きださなければならぬようです、そうですね」

修正

なんだ「ようです」、普通に笑ってしまった。

25話：俺と友達と皆と俺

やあ僕だ。

ジーンに手を握られて町の中を補導された僕だ。

町の人達に凄く暖かい目で見られた僕だ。

今、尋問されてます。

「それで、あの方とはどこで出会ったのですか」

「えっと…」

「この時勢、あの民族と関わる事の危険性は解っていると思っただのですが？」

「…はい」

「どこで拾ってきたんです？」

「いや、犬猫じゃないんだから」

「吐け」

「sir・yae sir!!」

ちくしょーっ！！ こんな事なら疑われても良いから誤魔化せば良かった！！

と言う訳で、僧長さん以下4名の事を吐かされました。

駅を爆破しようとした事、中にスパイがいた事、今は知人に匿って貰って居る事。

「はあ……人に迷惑をかけてはダメでしょう」

「え？ いや、はい」

なんだ？ お姉さんのポジションなのか？

それはどつちかと言うとルーの位置だろ。

「貴方が匿っていればもつと楽しそうなのに……」

……俺には聞こえなかったから。

何も聞こえなかったからあー！！

そんな感じでジーンさんの部屋で尋問された。

グリさんの事は誤魔化しつつ、僧長さん達の事を話す。

まあ、見逃して避難しろと忠告した、くらいの物だが。

じゃが、それでも全容をしりたがるジーンさんにどう誤魔化すか考えていると、ルーが帰ってきた。

扉を開けて一言。

「……うう……。勉強してきたのに」

だった。

ワケが解らん。何を勉強してきたのよ。その悲しそうな表情はなんなのよ。

わーん。と泣きながら駆け出すそれを見送りジーンと向き合っ。

「何だったのさ」

「あの子の事はよくわかりません」

2人して首を傾げ、とりあえずお開きになった。

ジーンも氣勢を削がれたらしい、ルーグッジョブと言わざるを得ない。

んで、俺の部屋に移動中に士官学校に帰ってきた面々と再会。

アルフォードの場合。

「おっ、久しぶりだな。シグルド!!」

「よっす!!」

シユタつと手を上げて再開を祝す俺等。

しかしだ、アルフォード君。君はどれだけ筋肉つければ気が済むのかね。

休暇前の2割増しで暑苦しくなってるじゃないか。

「おうよ。これで憧れのアレが完璧な形で出来るぜ」

「…親父に憧れすぎだろうが」

「はは、筋肉の至高の存在に憧れずしてどうすんだ？」

いや、まあ、あの筋肉は確かに凄いが……

「しかしアレだな、シグルドは筋肉モリモリしないよな」

「ああ、俺は母さん似でな、筋肉は付いてるけど、モリモリ目立つ事はないね」

「もったいねえ。絶対才能あるぜ」

いや、あるだろうけどね。

ぶっちやけイライナイよ。

「まあいいか、とりあえず見ろやシグルド!!」

フンツ。と掛け声を欠けて上着を弾け飛ばすアルフォード。

「見たかこの究極の筋を！！俺の時代が来たぜ！！メルツエー
ー！ルツ！！」

誰だよメルツエル。

お前着々と背景の道を歩いてると何故気付かないんだ。

「単純馬鹿が、空気と同化せねば気付かないか……」

ミリアリアの場合

ルーの頭を撫でていた所に遭遇。

俺に気付いたのかそれを中止し、俺に向かって一言。

「久しいな」

薄い笑みを浮かべて言うものだから少し硬直した。

だって格好良すぎるんだもの。

「ああ。久しぶり、休暇楽しんできたか」

「楽しくはなかったが、そうだな、この環境の有り難さは骨身に染
みたよ」

よく解らんが。まあ、色々あったようだ。

「んでナニしてんの」

「ああ、ルーがワケの解らん事を泣き喚いていたのでな、とりあえ

ず落ち着かせている所だ」

ワケの解らんことって……

淒く気になるな。

「ワケの解らん事って何よ？」

「さて、私には理解できんよ。迷惑になるだろうと黙らせただけなのでな」

…そ、そうですか。

ちよっと怖いと思ってごめんなさい。

「やはりお前の周りに居れば、退屈とは無縁だと再認したが」

「それまた微妙な評価を」

「ジーンも私と同じような気持ちだとは思っがな」

まあ、ジーンさんはね、本当俺をおちよくる事に人生かけてるよ
うな気がするしね。

もう諦めてるヨ。

ルールーラーの場合。

「んでルーは何で泣いてたん」

「うーシグ君が、非行に走っちゃっから」

この人はマジでワケが解らんな。
どの辺が非行なのよ。

「えー、何故そう思ったのでしょうか」
「だって!!! この本に書いてあったの!!!」

そして差し出してくる本には「性の事ならなんでも御座れ、これで貴方もテクニシャン」

「……すまん。ミリアリア、俺の目はイカしてるらしい」
「いや、私の目にも同じ物が見えているはずだ」

これを見て、なんで俺が非行に走ったと思うんだ。
いや、それ以前に、この本はお前のキャラじゃないだろ。

「これ、誰に貰った？」

「え？ えつと、休暇前に教官の人から貰ったわ、実戦は休暇が終わったら見てあげるからって」

「……なんで俺の非行と繋がる」
「だって、この本に書いてあるシュチエーションは非行なんだって教えて貰ったわ」

俺とミリアリアは本を奪って中身を見る。

縄で締め上げられた誰か、ベッドの柱にくくりつけられた縄、首輪。

ああ、身に覚えがあるな……

「なんでさっきは逃げたのさ」
「ジーンちゃんとシグ君は、そうなんでしょう？ 子供がしちゃいけないのよ」

「興味深いな」

「……頭いてえ」

とりあえず、俺とジーンの誤解は良いとしてもだ。

「この本誰からもらった？」

「だから教官からよ」

「名前は？」

「えっと、教官よ」

ああ、あの嫉妬豚か。

「ミリアリア」

「任せておけ、地獄とは死後ではなく現世だと身に刻んでやる」

「俺も混ぜてくれよ」

「フ。構わんぞ」

この本に書いてあるのはウソっぱちだと教え、お開きになった。
ミリアリアはジーンと相談して例の教官を生き地獄に落とすらしい。

こえええ。

こええけど仕方ないね。

ロイの場合

「焼かせろ」

「再開一言目がそれとはマジパネエっす」

「良いから焼かせろ、新作ができあがったのだ」

俺は逃げた。

周りこまれた。

「ツチ、身体能力もあがってやがる!!」

「いつまでも肉弾戦が弱いなど思ってもらっては困るな」

自然な動作で手袋をはめ、なにやら筒状の何かを取り出すロイ。

「準備はいいか？」

最寄の蛇口を捻り、野郎を水まみれにしてやった。

「アッー!! なんと言う事を!!」

「無能が!! 水対策してから出直せ馬鹿野郎ウー!!」

逃げた。

あいつに関わるのはちょっと控えよう。

ストレス溜まってそうだし。

ヒューズさんの場合。

「おう、久しぶりだな!!」

「ご無沙汰してますヒューズさん」

尊敬してます。マジで。

「しかし、ご機嫌ですね。良い事でもあったんですか？」

「はっはっは聞いてくれ!!」

「なんです？」

「彼女が出来た!!」

「マジっすか!？」

「おうとも、見てくれ、極めつけの美人だと思わないか」

ゴソッと取り出した10枚以上の写真の束。

…え？

多すぎだろ常考。

この人もやつぱは少しおかしいのかもしれぬ。

「これは…」

「それはだなあ…」

「はっはっは、…」

「あー早く休暇こねーかな」

そんなやり取りを1時間程。

「……もしかして、ロイにも話しました？」

「おう、もちろんだ。でもアイツ知らんうちに消えててな、俺に嫉妬でもしたんだろう」

「ハハハ、そうですか。ハハハ」

そりゃストレス溜まるわな。

その後少し話して分かれた。

個性的なのが多すぎる……

「その筆頭が何いってやがる」

パシンと頭を叩かれ、ああ、俺その筆頭なのかと、少し上機嫌になりこの日は終わった。

さて、明日からはまた慌しい訓練生生活だ。
適当に気を引き締めていこう。

25話・俺と友達と皆と俺（後書き）

ちくしょう!!!

事前に宣言していたのに約束を破ってしまった。

恥ずべき事じゃなからうか!! すみません! 風呂で寝てしまいました、朝まで。

ともあれ、短編書くのがちょっと楽しくなってきた、どうしよう。

26話：暇と俺と巨乳と大佐（前書き）

皆様の応援のおかげでPV数100万越えました。
目を疑ったがマジらしい。驚いた。

26話：暇と俺と巨乳と大佐

さて、休暇が終わり、訓練生活が始まったわけだが、特に面白い事はなんにもなかった。

いつものように馬鹿な事して、いつものように誰かにどつかれて

そんな日々だ。

「なあなあ」

「なんです?」

「最近、暇じゃね?」

「……この状況の何処が暇なのか疑問が付きませんか?」

ん? と思い周りを見渡す。

とりあえずは食堂なんだが。

まず見えるのはロイ。

あの野郎は俺に錬金術を完封されたのがよほど悔しかったのだろ
う。

新作として、炎筒なる物を開発してきやがった。

名の通り、炎の筒なのであるが、あれはどう見てもレーザーブ
レードだ。

白い炎を筒から50cmほど放出し、鋭い刃の形をとる。

な? レーザーブレードだろ?

焼き斬る事に関してアレ以上の兵器はないだろうが、制御が難し
いらしく、今暴発して焼けている。

俺で試し切りしに来たと言うのだからコイツはアホに違いない。

次に目に映るのは、アルフォード。

俺の隣で茶をしばいて居たのだが、何故かロイの爆発に巻き込まれて気絶。

ほんとう不憫としか言いようが無い。

んでオーデイエンスが俺達から距離をとって見ている。

「いやさーマンネリって言うのかねー。なんか暇なんさー」

「確かに、いつもの事と言えばそうですね」

「うんうん。こうやってノンビリ茶飲むのもいいんだけどね」

「久しくなかったですね」

「ああ、なんでか何処でも騒ぎに巻き込まれてたからなー」

銀行強盗に巻き込まれる事1回。

爆破テロに巻き込まれる事4回。

学校に発生した変態をシバク事19回。

訓練場を破壊する事5回。

教官に追いかける事32回。

教官を左遷に追い込む事7回。

美女に迫られて御仕置きされる事1回

よくもまあ、こんなに頑張ったよ俺。

「ほぼ自業自得ですが」

「ですねー」

ズズツと茶を啜る俺とシーン。

しかし、研究もレントゲンはほぼ完成し、後は実地経験と培養施設の確保を残すばかり。

レントゲンは割かし簡単に完成したんだが、あれは俺しか使えない技術だろう。

それに製機のレントゲンは、いつか機械鎧技師が開発してくれるだろ。

あの人達あんだけ高度な技術があるのになんで他に目がいかないんだ？ マッドなのか？

「そうだジーン」

「？ なんですか」

「前の夏季休暇さ実家に帰っても暇だつて言つてただろ？」

「ええ。暇で暇で死ぬかと思いましたね」

「家に遊びに来ないか？ 実家タブリスなんだけど」

ジーンは、なぜかビクンツと体を揺らし立ち上がる。

立ち上がり方もあれだ、ガバツと言うのかガタツと言うのか、そんな感じ。

「えーと、嫌だった？」

「いえ、是非にお願いしたいです」

フウ、私とした事が、うんたらかいたら。

聞き取れない事を言いつつ着席。

まあ、ジーンさんにも色々あるんだろう。

決定しているメンバーはジーン・アルフォードだ。

ミリアリアとルーはまだ聞いてない。

ロイとヒューズさんは残念ながらお袋に近づけるつもりは無い。

アルフォードもちよつとヤバイかと思つたが、こいつにとって錬金術は大して関心を持つ技術では無いらしいので声をかけてる。

「しかし、何故突然そんな事を？」

まあ、大した理由はないのだが。

「いや、ニヤンコがなーあの子なんでか俺よりもジーンの事好きみたいだからな」

「…ニヤンコのお守りですか？」

「純粹に招待したいってのもあるけどな」

ニヤンコは何故かジーンの部屋に住み着いてるのだ。

うっかり視点を借りてエライ物を見たのも記憶に新しい。

ジーンはスレンダーだが、けして胸が無いわけではなく、着痩せするタイプって言うのか。それだった。

ルーは、もうねメロンって言うのはあの子の為にあるんだと思うよ。

見た瞬間吹いたが、5分ほど鑑賞してしまった。

ごめんよ。

「どうしたんです？ 顔を真っ赤にして」

「ん？ ああ、なんでもないデス。ちよつと恥ずかしい場面を思い出しまして」

「それは五万とあるでしょうね」

おまつ！！それは言いすぎだろう！！

精々3万と言え！！

「ところで、うん？」

なにやら食堂が騒がしくなってきた。

バタバタと退室していく者多数、背筋を伸ばして食事をする者少数。

「なんででしょう？」

「さあ、大方誰かが裸コートで外歩してるんじゃないね」

「あの集団は根絶したと思っていましたが」

「手緩かったのかも」

「ミリアリアと対策を協議しましょうか」

「だなー。美観を損ねるしな」

あれは酷かった。

ロイが悪ふざけで出した罰ゲームが癖になったアホが居たのだ。

ロイとしては以前の裸コートをみれなかったから、一度くらい見てみたい程度の提案だったらしいんだけどな。

規模が可笑しかった。

40人の裸コート集団、しかも全部男だ。

見苦しいなんて物じゃなかった。

提案したロイも青褪めるような見晴らしでね、ロイは後悔してたよ。

——〇>…なんでこうなった。

って言ってたな。

しかもそいつ等の半数が悪癖に目覚め、それになんのカリスマを感じたのか知らんが、30名ほどが便乗した。

一夜にして脅威の変態集団の出来上がりだ。

責任を感じたのかロイを筆頭に俺の家臣団で撃滅したが、まだ残

存部隊がいたようだ。

後で手を打っておこう。

“ロイ・マスタング訓練生、マース・ヒューズ訓練生、シグルド・カーティス訓練生、ジーン・ノルメ訓練生。至急校長しつに集合して下さい。繰り返します……”

雑談を続けようかと思っただら放送で呼び出された。

周りの視線が俺達に寄せられる中、ジーンを顔を見合わせる。

「なんかしたっけ？」

「いえ、心当たりはないですね」

「銀行強盗に便乗したのバレたかな」

「それは考えずらいですね、綿密に細工しましたし」

「じゃあ、テロのドサクサに紛れて教官闇に葬ったのは？」

「それこそバレようがないでしょう」

「だよな。じゃあなんだろ」

「施設破壊の序でに封鎖地区に溜まり場を作った件では？」

「いやいや、あの施設を破るのはそれこそ国家錬金術師並の腕がいるぞ」

「……やはり心当たりは無いですね」

「ですよね」

“お、俺はナニも聞いてない、聞いてナイ、キイテない、キイテナイ……”

“お前等そんだけやって心当たりないとか……”

“……仕官って何だろう”

なんか周りがザワツクのを感じつつ、とりあえず移動を開始する。

「ロイ・マスタングはどうします?」

「あ。引きずっていいこうか」

「お願いします」

「任された」

ロイの着ている制服の襟を掴んで歩く。
ぐえつとか聞こえたが、些細な事だ。

出口に差し掛かり、何故か俯いて震えている生徒の肩に手を乗せる。

「君、アルフォードの快方しとてくれないかな」

「じ、自分がでありますか!?!」

「であります」

「sir yes sir!!」

「頼みます」

まあ、放置でも大丈夫だとは思うが、一応な。
友達だし。

「しかし、マジでなんなんだろうな」

「行ってみなければなんとも言えません」

「ま、そうなんだけどな。メンバー的に良くない予感がするけど、
どう思う?」

「私が入ってるので大丈夫でしょう」

「……」

俺以上の危険物がナニを言ってやがりますか。

「何か?」

あ、その流し目ちよっと色っぽいな。

「んや、ヒューズさん入ってるし大丈夫か」

「ええ、私も入ってますし」

「だな、ヒューズさん入ってるし」

「私が…」

「ヒューズさんが…」

などと言い合いをしつつ、校長室に到着。

コンコンと扉をノック。

「シングルド・カーティス訓練生、出頭しました」

「ジーン・ノルメ訓練生、出頭しました」

“はあ……入りたまえ”

溜息つくなよ校長。

幸運が逃げていくぞ。

扉を開けると3名の人物が目に入ってきた。

まずはヒューズさん。

直立不動で目だけでロイを見て苦笑いしている。

次に校長。

やつれた表情で俺を見て、次いでなんでか腹を押さえてる。

最後に軍人。

こ、こいつは……いや、なんだあの有り得んモノは。

硬直して軍人を凝視する。

青の軍服を押し上げる、圧倒的存在感。

更には、少し低めの身長がソレを殺戮兵器へと変えている！！
目を惹きつけて止まないその在り方、誰もが望み、しかし敵わぬ
と諦める、そんな唯一の物。

馬鹿な！！ そんな馬鹿なサイズがあつていい筈がない！！

「貴方は何を……」

ジーンさんが俺の背中にボスンと当たり、不満を述べているが、
俺はそれにも気を配れない。

何故、あんな存在が許される？

何故、こんな不平等が許される？

俺はジーンのそれを見る。

次に軍人のそれを見る。

ジーンのを……

パンツと頬をはつられた。

「え？ なして？」

「…き、機能美と言う物を知らないんですか？ シグルド。大きければ良いなんて、それは猿の言う事だと解らないのですか？」

「ふむ。確かに大きければ良いと言うものじゃないな」

「そうですね。確かに大きければ色々出来るのかもしれませんが、
将来酷い事になる事は決定事項でしょう」

「道理だな」

「解ってもらえて安堵しました」

「だが、それでも一夜の夢を見たいと願う。それはとても尊い事だ
と思いませんか？ ヒューズさん」

「おまつ！！ 無茶振りすぎるだろ！！」

サーセン。

ジーンさんがちょっと普段と違うからパニックだったんだ。ちよつと涙目で俺を睨みつけてくるなんて、反則じゃない？俺にどうしろというのさ。

「興味深いですね、マース・ヒューズ。どうなのです？」

ハイライト消した目でヒューズさんを映すジーン。

あくまでヒューズさんを映してるだけであつて、見ているわけじゃないのが凄い。

どうやればそんな風を感じる目が出るんだ。

「いや、愛があれば大小なんざ意味がないだろ？ そうだろ？」

「…愛」

ジーンはスツと俺に視線を送ってくる。

「愛してます」

「私も愛してますよ」

反射的に答えてしまったが、まあいいか。

動物的本能の成せる業だろう。ニヤンコを恨めばいいのか褒めればいいのか……。

「ん。ごほん。き、君達、良く集まってくれた」

胃を押さえて立ち上がる校長。

やっと話が始まるらしい。

「こちらは、オリヴィエ・ミラ・アームストロング大佐だ。君達の訓練にご興味を持たれ、視察と言う形で今回足を運ばれた。挨拶なさい」

そのアームストロング大佐はコメカミの欠陥がエライピクピクしてるんだが。

持病でももってんじゃねーの？

まあ、いいか。

挨拶だ。

「マース・ヒューズ訓練生であります。国軍大佐殿からご興味を持たれるとは感無量であります」

「……ジーン・ノルメ訓練生です」

そこで皆の視線がロイに集まるが、皆目を逸らしていく。多分、居ない事にしたんだろう。

「シグルド・カーティス訓練生であります。一つ質問をよろしいでしょうか」

「……許可する」

冥府の淵から聞こえる声ってのはこう言つのなんだろう。めっちゃ怖い。

髭おっさん程ではないが、流星の威圧感だ。

「その胸はシリコンなんでしょブヘッ！！」

バキンッ！！ と頬に拳をお見舞いされた。

「貴様等、いい度胸だ！！ 表へ出る！！ 私直々に手解きしてやるうではないか！！」

俺はへたりと座り込み、大佐殿を見上げる。

鬼じゃなかるうかと思うような形相だ。

ミスった。あれは聞いたやダメだったか……。

「その青二才は捨て置け！！ 貴様等3人は徹底的にしごいてやるう！！」

パンツ！！

と扉を乱暴に開けて出て行く大佐。

どうしようかとジーンを見れば、笑っていて。

ヒューズさんを見れば、まあこつなるわな。と呆れていて。

校長を見れば、なんか錠剤をやばいくらい飲んでた。

「ほれ、いくぞ」

「さあ、いきましよう」

「はい。てか胸の事は聞いたやまずかったか？」

「常識的に考えてマズイだろ」

「シグルドに常識を求めるのはやめておいた方がいいですよ」

「そうだな」

「やっぱマズかったか。だって錬金術でバストUPしてるのかと思うと好奇心が止まらなくてねー」

「それは……」

「確かにあの胸は男のロマンの集大成だが、俺はグレイシアの胸に勝る物は知らないな」

「誰ですか」

「俺の彼女だつての」

「ああ…リア充が」

そんな感じで大佐殿と模擬戦が始まりました、とさ。
俺目立ちすぎじゃないか？

26話：暇と俺と巨乳と大佐（後書き）

そろそろ仕事復帰します。

手が臭い…

27話：剣と剣と俺と大佐

さて宇宙人の如く拘束されて引きずられて来た校庭。

佇むは軍刀に手を添え待ち受ける、一人の武人。

彼女の右手には三本の軍刀。

こちらを見る目は、先ほどの憤怒が嘘のように凜ぎ、その目に感じるのは冷徹な意思只一つ。

その立ち姿は軍神のように感じる。
なるほど。

この人は強い。

情けなく引きずられていたのを止めてもらい、立ち上がる。

俺は2人に待ってもらい、一人で彼女の元に歩いていく。

「先の無礼は謝罪します」

「そうか」

「遺恨無く、と言うのは無理かもしれませんが、一人の武人として
ご教授願いたい」

「ほう。私は3人をシゴクと言ったはずだが」

「俺とのシアイの後で良ければ」

大佐の眉がピクリと震える。

同時に三本の軍刀を投げ捨て、剣を抜き放つ。

俺は殺気なんて物は出せないが、闘気のような物なら出す事が出

来るから、それに反応してくれたんだろう。

「獲物はあるのか？」

「ええ、ここに」

俺は両手を前に伸ばし、以前に大總統殿に貰った軍刀を轉移させる。

少し材質を弄り、以前見つけたアラハバキに近い性能を保持している。

と言っても、あれには遠く及ばないが。

「何をした？」

「何って錬金術ですよ」

サラツと言ってみたが、彼女には通じないらしい。

鋭い目が苛烈に俺を貫き、引き結ばれていた唇は耐え切れぬと言う風に歪に歪む。

「練成陣を不要とする錬金術か？」

「いいえ、まあタネはありますが、教えるつもりはありませんよ」

「いい度胸だ」

俺は軍刀を抜き放ち、鞘を腰のベルトに差込み、両手で正眼に構える。

対する彼女は半身になり、軍刀の切っ先を地面スレスレにまで落とす。

お互い無言で睨みあう。

チリチリとした緊張感が首筋を這い回り、思わず笑みが零れる。

彼女も同じなのか、その顔には薄い笑みが張り付いている。

と言っても表現するなら肉食獣のソレだ。

俺も同じような表情だろう。

「貴様等は力によって、我を確立させると言ったらしいな」

どうしかけるか探っていると、彼女から声をかけられた。
ちよつと意外だ。

しかし、声をかけられたなら答えなければな。

「ええ」

「貴様にとって力とはなんだ」

なにを簡単な事を。

「力とは屈服させる為の物です」

「ほう。面白いな」

「貴女にとって力とはなんです？」

「純粹な序列だ」

「なるほど」

年齢でもなく、性別でもなく、只々力の大きさが順位を決めると。
だが、それは

「獣の理論ですね」

「独裁者の理論よりは幾分ましだろう」

痛い事を言ってくれる。

確かに俺の言っている事はそう言う事だが。

「ま、どちらの言い分も力の一側面としては普通な物ですよね」

「そうだろうな、力の価値など様々だ」

知・文・武・血・学・術・運。

様々な力と言われる形がある。

俺が言っているのは、中でも武に重きを置いた考え方だ。

彼女が言っているのは、全てを平等に見た考え方だ。

純然たる力を纏めれば、それは正しく獣の置く序列になる。

弱肉強食。

弱きは敗れ、強きが勝つ。

自然の法則そのままだ。

血が高等であつても、知・武・学が追いつかなければ血は無価値となり、敗者となる。

知・武・学が高等であつても、運が無ければ敗れ、忘れ去られる。

階級から言つても彼女は純粹な力を篩いにかける者だ。

俺とは立ち位置が全く違う。

「問答はもういいですか」

「ああ、お前の力を見せて貰おうか」

言い終わると同時に、俺は駆け剣を振り落とす。

ギャリンッ

耳障りな音。

アームガードと刀身を巧みに扱い、流された。

流石に上手い。

彼女はそのまま手首を捻り、剣を薙ぎ払ってくる。感心している暇もなく、俺の首に迫る剣をサイドステップで避ける。

が、息を付く間も無く腰の入った突きが追撃してくる。

「ツツ」

しかも狙いは頭だ。

首を捻り、かわす。

右頬を掠めて行く刀身に冷や汗を流しながら、間合いを、

「下がるか、未熟者」

喉に衝撃、はあ！？ と脳内で驚きつつ突き飛ばされる。衝撃をバネに間合いを取れたが、咳き込みたくてしょうがない。それほど強い衝撃ではなかったが、痛みはある。

「前に出ぬ内は、私に一太刀たりとも入らんぞ」

ヒュンヒュンとX字に切り払い、フェンシングのように構え切っ先を此方に向けてくる。

「強い、ゴホツ、ですね」

「当たり前だ。貴様とは立っている場所が違う」

首筋に薄い切れ込み、頬にも刀傷、喉の違和感は意識を裂かれる。俺は一太刀しか繰り出してないのに、相手には4回も行動させてしまった。

防御、薙ぎ払い、突き、喉へのおそらく掌底。

これが経験の差って奴か？

肉体的なスペックは恐らく俺の方が上なのに、全然動きに追い付いてない。

二刀にするか？

一瞬それが頭の隅を過るが、却下する。

二刀って奴は、極端だ。

後の先を取る事に重点が置かれている型、それが圧倒的な手数で翻弄する型。

後者なら良いかもしれんが、俺ではまだ扱いきれない。

負けないかもしれないが、勝てないだろう。

「錬金術使ってもいいですか？」

「私は貴様の力をみせると言ったはず、出し惜しみなどするな」
「……」

なんて自信家だ。

度肝抜かせてやる。

俺はポケットからカードを取り出し、駆ける。

その途中でカードを大佐に向けて投擲。

手で打ち払われ、地面に落ちるが、構わない。

カードを発動させ、そのまま切り上げる。

大佐はバックステップするが、そこには土の壁がある。

驚いた表情も何も無く、大佐は俺の切り上げに剣を合わせるように振り落としてくる。

刃と刃が交わり、火花が散る。

俺は力任せにに切り上げ、空いた腹を蹴られ、蹴り飛ばされた。

腰の入っていない撃ち下ろしと蹴りだが、それでも距離が出来たのはマズイ。

すぐさま体制を整え、追撃してくる刃を流す。

初めに俺が去れた技術そのままに。

大佐が僅かに目を細めるのを見つつ、手首を捻り、首目掛けて薙ぎ払う。

大佐は流された力の方向へ、半ば倒れこむようにして前転し回避。起き上がりざまに俺の太股を斬りつける。

俺は流石に脚を失うわけにはいかず、土の壁を作り、剣線を鈍らせ、その間に体を回転さつつ前方に避ける。

一拍遅れ、足のあった場所を剣が通りすぎる。

俺は回転の力を利用し、腰に挿していた鞘を左手に抜き、大佐の頭目掛けて薙ぎ払う。

それは大佐が少し体を後ろに逸らすだけで回避されたが、前髪の束を斬り払う。

そこから覗く目は曇りなく苛烈な色で俺を見ている。

ゾワリと背筋が粟立つ。

恐怖と言うよりも、これは畏怖だろう。

あと、少しの憧れか。

一瞬、そう見惚れたのが悪かった。

大佐は跳ねるようにして俺に接近する。

脇の位置には右手があり、左手は刀身に添わせ、身を低く俺に跳ねて来る、その姿。

俺は何とか体を捻ろうとするが、体制が悪かった。

足は着地の寸前の状態。

両手は振りぬぎ、戻すのに時間がかかる。

身を擦るには両の手の位置が悪すぎ、ステップ出来るほどの地面との接触はない。

「うっわ……（これ見越してたんなら怖すぎる）」

続きを言えるわけも無く、大佐の突きが放たれ、俺の右肩を貫いて行く。

遠くで俺の名を叫ばれているが、俺は大佐に見惚れていた。

俺の返り血で頬を塗らしたその表情。

一滴の慈悲もなく俺の肩を貫いたその行い。

何よりも、未だ油断なく俺を見据えるその獣の目。

なるほど、強いはずだ。

彼女は完成された軍人だ。

スピットファイアでも彼女の足元にも及ばない。

一拍遅れ、俺の肩から剣が抜かれる。

「ギツッア」

激痛に声をあげる。

膝が折れ、咄嗟に鞘を手放し肩を押さえる。

間を空ける事なく、俺の首筋に剣が添えられる。

「……………」

俺は彼女を見上げ、目が交差する。

未だに冷徹な色の目だ。

俺はその目を見ながら、

「負けました」

負けた。

彼女はX字に剣を振り、血糊を落として再度刀身を手袋で拭う。
手袋はそのまま脱いで捨てている。

俺は背後に駆け寄る気配を感じつつ、少し落ち込む。

以前も軍人と手合わせした事があるが、これほど一方的ではなかった。

成長していないなんて事は無いと思うが、流石にこれは気落ちする。

彼女に触れたのが前髪だけなんて情けないにも程がある。

「訓練生にしては中々の錬度だ」

上から降ってくる声に、顔を上げる。

「それはどーも」

初め小柄だと思ってたが、今見上げてみると、これほどデカイ人は久しく見なかったと感じる。

胸ではなく、人として。

「しかし、剣術は慣れんようだな」

バレてたか。

確かに俺は剣を使うが、それ以上に慣れ親しんだ武術は他にある。

「まあ、慣れてないって訳じゃないんですけどね」

そう言った所でジーンが俺の腕を取る。

「大丈夫ですか」

「ん。肩以外は問題ないっぽい」

「そうですか。……服を脱いでください」

「は？ あ、いや了解」

俺は上着を脱ぎ、シャツの肩部分を剣で斬り破る。

ジーンは血をハンカチで拭う。

俺はそれを横目に見つつ、続きを言う。

「俺は徒手空拳の方が得意です」

「何故そちらでこなかった」

「理由としては現状、剣で何処まで行けるのか試したかったからです、見事に負けましたけど」

フンと不機嫌そうに鼻を鳴らされる。

まあ、実験台にしたような物だから当然か。

「一応言っておくが、錬度で私と並ぼうとも決して貴様は私には勝てん」

ドカツと地面に座りながら彼女は続ける。

「貴様の剣は軽すぎる。確かに才を感じるが、貴様が振り下ろす剣には覚悟がない」

「覚悟、ですか」

「ああ」

「それは人を殺す覚悟ですか？」

それならもう終わってるのだが。

「いや、背負う覚悟だ」

あー、そつちに行きますか。

「おお、やっぱり派手にやられたな」

駆け寄ってきたのはヒューズさん。

救急箱片手にジーンの横で屈みこむ。

「なかなか察しが良いな、確かヒューズだったか」

「ッハ」

「卒業後私の部隊に来ないか」

「お誘いは嬉しいですが、すでに任地は決定しております」

「なら気長に誘うとしよう」

大佐も目が良いね。

俺も出世したらヒューズさん欲しいわ。

なんだかんだ言って万能形だしな。

消毒の痛みに耐えつつ、2人を眺める。

「話を戻すが、貴様には覚悟が無い」

「命を背負う覚悟、ですよ」

「違う、意思を背負うのだ」

「……意思」

「私の背には倒れて逝った数多の英霊の思いがある。私を助け、私をここまで登らせた意思が」

「それは命を背負うのとは違いますか」

「命と意思は全くの別物だろう」

「いや、まあ、そうなんです」

違うのは解るが、やっている事は同じだと思っただよな。

つまり部下か同僚かは知らんが、それらを背負うと言っ事だろ？

同じにしか思えない。

「なに、貴様も仕官となれば解るだろう」

「はあ」

「今の貴様では潰れるのが落ちだろうがな」

それは力チンと来るな。

「そうつすか？」

「決意が無い、覚悟が無い」

「決意も覚悟も決めているつもりです」

「それはどんな覚悟と決意だ。部下数百を失うかもしれん覚悟か？

親しい同僚を死地に送り込むかもしれん覚悟か？」

「それは……」

全く違う。

お袋や親しい誰か助ける決意で、見ず知らずの死体を弄ぶ覚悟だ。

「貴様は軍人として決定的に弱い」

「……」
「夢想家のように綺麗事を並べたてん気概は買うが、それだけだ」

「……」
「錬金術の腕もそこそこのようだが、目を引く技術は模倣と初めの剣を取り出した技術のみ」

ぼろくそに言われておるな。

「カーティス訓練生、私の部隊に來い」

「はあ!?!」

行き成り飛んだ!!

どんな思考してんのかさっぱり解らん。

「潰してしまうには些か惜しい」

歪に切りそろえられた前髪を弄りながら、そう言ってくる。

まあ、嬉しいっちゃ嬉しいんだが。

「嬉しいで…」お断りします「…何故に……」

なんでかジーンさんが答えてしまった。

「お前は？」

眉を歪め、初めて目にしました的な視線でジーンを見る大佐。

「おや、名乗っていたはずですが、若いのに痴呆とは御可哀想に」

「そうだったか、痴呆に覚えにないが、一番つまらなそうだったの
で記憶に残らなかったのだろう」

「随分と柔な脳みそをお持ちのようで羨ましい限りです」

「そうか、ところでカーティス、私の部隊に來い」

「っ！ だからそれは断るとっ！！」

大佐はほぼシカト。ジーンは軽々しく扱われちょっとキレぎみ。

……

……

…

どうしてこうなった。

スツとヒューズさんに目を移すと、いなかった。

10mくらい離れた所で胡坐組んでこつちを見てる。

俺と目があったが、ニヤケて返された。

意味が解らん。

「ならお前も私の部隊に來い、それで問題ないだろう」

「いいでしょう。それならば異存ありません」

「使えなかつたら即斬り殺すぞ」

「私が？ ジーン・ノルメが使えない？ 寝言は寝て言う物です」

「いい度胸だ。他にも連れてきたい者が居たら事前に言っけて置け」

「言われるまでもありません」

で、なんでか勝手に話が進んでる件について。

「それで、貴女の部隊はどこに展開しているんです」

「さてな、以前は西に居たが……今は休暇中だ」

「ではどこに配属されるか不明だと？」

「おそらく東だろうが、北もキナ臭いので決めかねているようだな」
「ならば東を押します、おそらく面白い物が見れます」
「ほう。上申しておこう」

ジーンさんはそんなに俺とイシユヴァールの関係が知りたいか。
っても卒業まで後3年あるんだからそれまでに終わるかもしれない
ぜ。

有り得んだろうけど。

「引き抜きは可能でしょうか？」

ジーンさんは何を言っておられるんでしょう。

「学校からか？」

「ええ」

「出来るだろうが、今の私にそれだけの権限は無い」

「ならば上に掛け合えば良いです。シグルドの噂は広く広がっている
ので嬉々として受け入れると思います。無理ならばゴニョゴニョ
すれば」

「フン。例の空を焦がしたと言う錬金術か」

ゴニョゴニョってなんだよ。

それは当然だろうって顔でゴニョゴニョの部分のスルーするなよ。

「ええ」

「考慮していてやろう。しかし、1・2年は無理だと思え」

「それくらいならば問題ありませんね」

「最低限卒業規定をクリアしておけ、さもなければ話すら持ち上が
らんぞ」

「ええ、承知しています」

俺の出番ないね。

俺は後は包帯を巻くだけの状態で放置された傷をみる。

……包帯巻こう。

ニャンコ大丈夫だろうか。

その後はジーンとアームストロング大佐の間で密約の応酬が繰り広げられ、俺は全てジーンに任せて校舎に戻った。

ヒューズさんも一緒に入ったわけだが、ヒューズさんはロイを回収して寮に帰った。

俺はジーンの部屋に向かい、泣き崩れているルーと対面。

前脚の右関節部分を血に濡らし、ぐったりとしたニャンコを回収。錬金術でその治療を行う。

ルーに抱きつかれたが、まあ、役得なので堪能してから退室する。

ニャンコは血が足りてなかったので、俺の部屋に連れて帰り、保存しておいた血で輸血してとりあえず一命を取りとめた。

しかし、やっぱり契約は面倒くさい縛りがある。

これさえ無ければめちゃくちゃ沢山使い道があるんだが……上手くいかないモンだ。

抜け道さえ見つければ使用方法も広がるんだけど、まだまだ難しい。

ちなみに翌日。

校長から呼び出され、

いつでも卒業試験を受けてくれたまえ。

穏やかな笑顔で、そんな言葉を頂いた。

部屋に居たのは、俺とジーンとアルフォードとミリアリア。

なんとなく予想は付いてたが、ルーは外したのな。

しかし、大佐の部隊に所属するのは決定事項か……凄く嫌な予感
しかない。

27話：剣と剣と俺と大佐（後書き）

仕事に集中してて間が空きました。

日曜も丸一日寝てました。ごめんなさい。

実はオリヴィエさんはアンスパっぽくしようかと思ってたんですが、この2人を合わせると格好よすぎたので却下しました。

あと、俺にはこの人を書ききる技量が無い事に気付いた。個人的に違和感ありまくりなオリヴィエさんになってしまった。ちくしょう

……

しかし、アクセスが一日でPV10万越えてる日があるんだが、何事だ。

28話：宴

校長やら教官に「いつ卒業試験うけるのかな」とニコヤカに聞かれる昨今。

俺達は進級の、ヒューズさんとその他に取っては卒業の季節が巡ってきた。

ちなみに校長その他に対しては「@2年は居ると思いますよ」と答え、適当に絶望させている。いやね、厄介払いのように卒業する事を進めてくる教員って何よ。

確かに俺は少しはしゃぎ過ぎたかもしれないが、そんなねえ？
邪険にしなくてもいいじゃない。

「少し？ すまんが私の耳は壊れているようだ。どう思う、ヒューズ」

「便乗してた俺等に何か言えるとも思ってたんか、ロイ」

現在、卒業祝いと進級祝いを兼ねて、町の飲み屋にいます。

って、おまつロイ！！

お前が一番はしゃいでたんじゃ！！ 俺はただ騒動を起したただけなの！！ それを拡大して言ったのは間違いなくお前だろうが！！

「ロイ・マスタングが介入しなくとも、いずれ拡大していたと思いますか？」

「いや、そうかもしれないけどね。フォローくらいしてよ」

「無理です」

「そうですか…」

俺の味方って居ないのかよ。

「はっは。シグルドの無茶はフォローできねーなっ、ここにいるメンバーは皆理解してる奴だけだぜ」

これは現在浴びるように酒を飲んでる筋肉。

最近は筋肉の発育具合に不満があるのか、自棄酒染みててちょっと引く。

お前はどれだけ筋肉付けければ気が済むのだね。

「確かに、お前の無茶を諫めようと言う常識人はこの中には居ないな」

グラスの中の氷をカラントと鳴らし、ニヤリとした笑顔を俺に向けてくる彼女はミリアリア。

俺、ジーン、アルフォード、ミリアリア、ヒューズさん、ロイだ。ちなみにルーはと言うと。

「酷い！ 酷いよジーンちゃん！！ 私だけ仲間はずれなの？ なんだなの！？」

「馬鹿だからです」
「うっ」

「胸に栄養が偏っているからそうなるんですよ？ もう少し勉強出来るようになれば、推薦するのも吝かではありませんが」

「うっ。がんばるっ！！ がんばるからねっ！！」

そんなやり取りがあり、現在猛勉強しているらしい。

一人だけ外されたのがよほど堪えたらしい。

でもまあ、このメンバーに付いてくるには突出して頭が良いか、めちゃくちゃ戦闘に強いか、でないは無理だ。無駄に死ぬ事になる

だろう。

「さて、今回は祝いの為だけに集まった訳ではない」

ロイが立ち上がり、なにやら演説を開始した。

こいつはたまにアホみたいな事を言い出すが、今回はそうで無い事を祈ろう。

「私達はもう一月もすれば配属される訳だが、君達は大佐殿から目をかけられているとは言え、まだ士官学校で学ぶ事も多いだろう」

大佐からスカウトされている事はかなり有名だ。

校長が大々的に発表してくれたからなんだが、あの校長ハゲないだろうか？ そろそろマジで鬱陶しくなってきた。

「諸君に聞きたい、今持っている理想の国家像を、どんな国家を夢みているのかを！！」

決まった。って感じで目を閉じるアホをみつつ考える。

理想の国家ねえ。

お袋が安全で、親父が安全で、俺が安全で、ジーンが安全で、アルフォードが安全で、ミリアリアが安全で、ルーが安全で、ヒューズさんが安全な国家だ。

考えてみてわかったが、やっぱり国崩壊させるしかないみたいだ。アメストリスに居る限り、誰の安全も確保されてないし。

この国マジで終わってるわ。

「ロイの理想の国家ってなんなのさ」

「良くぞ聞いてくれた！！ 私は人民を守り、人民を導く、それが国家の単純にして明快な方針だと断言する。十の内の十を救ってこそ国家。誰も無為に苦しめない国こそ理想だ。そう思わんか」

「……どこの衛宮士郎だよ」

「？ エミヤシロ？ なんだそれは」

あ、ミスった。

「ああ、すまん。東方での、正義の味方って意味だ。」

そうか。と言いつつ、正義の何たるかを語たり始めるロイ。

そのテンションの高さに少し嫌気がさし、初めから俺の隣で飲んでいるジーンに声をかける。

「あいつ酔ってね？」

「ええ。完璧に出来上がっているようです」

「だよな」

「でなければ、あんな妄想を声高々に叫べるわけありませんし」

なかなか厳しい。でもまあ、確かに妄想にしか聞こえない。

あるいは理想的すぎるか。

「理想も時には必要だろうさ」

俺の隣にミリアリアが腰掛ける。

両手に花だね。両方とも特大の棘があるけど。

「そつでしようか？」

「ああ。理想なくして夢は語れんよ」

「夢ねえ」

「ふむ。シグルドには夢はないのか？」

「もちろんあるけどな。でも理想と言っには俗物的すぎる理由からだな」

「…興味深いな」

「ええ。少し突っ込んで聞いてみたいですね」

「つまらない夢だよ」

「…有り得ないでしょう」

「だな。お前の夢がつまらないなどと、アメストリスから戦争がなくなる位には有り得ん事だろう」

お前等、酷すぎじゃね？

しかもミリアリアは少しマズイ発言だし。

「貴方の夢を聞かせて下さい。非情に興味があります」

ジーンは腕を絡めてしな垂れかかってくる。

肩に頭を乗せてくるのはアレか、乙女を気取ってるのか？

……だ、騙されないからな！！俺は、騙されない！！

「私も興味がある。聞かせろ」

グラスに酒を注ぎ足し、俺に差し出してくる。

とりあえず受け取り、少しだけ飲む。

「これ、きつつ…」

「フフ、子供には早かったか」

いや、まあ、体がこれだからな、酒に対しても、タバコに対しても免疫さがってるからな！。どんな酒でもキツイのよ。

「てか、俺生まれて始めて酒飲んだかも……」

「ハハ、始めての酒が私の酌とは、冥利に尽きよう」

嬉しい事は嬉しいんだが、お袋にバレたら折檻ものだろう。

後でジーンとアルフォードに口止めしなくては。

「さあ、シグルド。私の酌で飲みなさい」

ジーンは腕を組んだまま、器用に酒瓶を傾けて、俺のグラスに酒を注ぎ足す。

いやいや、まだ入ってますから。

止める間も無く、トクトクと注ぎ足され、しかも溢れた酒が零れていく。

しかし、それを気に止める事もなく、ジーンは注ぎ足し続ける。

って、

「ジーンさん！？ もう一杯なんですけどー！　むしろ零れてるのに気付けよー！」

「大丈夫です。始めては私の酌にして置いてください」

「はあ！？」

これはまさかと思うが、酔ってる？

「うかつでした。まさかミリアリアに先を超されるなど、ジーン・ノルメ、一生の不覚。さあ、シグルド、飲み干してください。それで帳消しでしょう」

「いやいや、何言ってるのか解らないんですが！？」

「ハハ、いやいや、ジーンがこの程度の事に嫉妬とは」

「何に対する嫉妬なんだよ……」

「うん？ 初めての飲酒の酌を取られた嫉妬ではないかな」

「どんだけピンポイントに嫉妬してんだよ……」

「解らんでもないがな、ジーンの独占欲など、日常的に見れるだろう？ まさか自覚していないなどと呆れた事を言っつなよ」

いや、それは知ってるが、度が過ぎてないか？

初めての飲酒の酌ってマジで局地的すぎるだろ。

「まあ、酔いの勢いで更に増している事は否定しないが、それでもジーンの独占欲は強い。それが仮に初めての喫煙だったとしても、今のジーンならフィルターに嫉妬するようなイカレタ女だぞ」

「それはまた、局地的すぎるナ……」

「見ている方は面白いがな」

愉快気に笑ってるが、俺としてはマジで簡便して欲しいよ。

酒飲んだら箍が外れるのは普通だが、ジーンはちよつと怖すぎる。

「シグルド、私のお酒が飲めないんですか」

ジーンが、据わった目で俺を凝視してくる。

ちよつと潤んでるのにドキドキするが、女性はそのへん自在に操れるらしいのであまり動揺はしないな！。

「いや、飲みますよー」

「全部飲んでください」

「りょーかい」

流石に一気に飲みはキツイのでチビチビと酒を飲む。

それを満足気に眺め、ジーンは再度俺の肩に頭を乗せる。

「で、貴方の夢とはなんですか」

「あ、戻るのね」

「当然れす。いえ、です」

「はっはっは」

「私を笑うと人誅が下りますが、どうでしょうミリアリア」

「ふふ、気をつけよう」

堪えきれないとばかりにミリアリアは笑みを噛み殺しつつ、俺に話を促してくる。

と言ってもだ。こんな所で言うような夢じゃないし、さわりだけ話そう。

「夢って言ってもな、本当普通の事だぞ」

「中身を聞いてるんです」

「あーうん、第一にお袋の体を治す事だな」

「ああ、なにやらお体を壊されて居られるのでしたか」

「そそ」

「それだけなのですか？」

「いや、あとは皆安全に暮らせませすようにって所かな」

「皆とは？」

「この店に居るメンバーと両親。あ、ルーもか」

「つまり私をですな」

「……」

これは、そうとう酔ってる、のか？

いや、素面でも言いそうな気はするんだけどね。

もういいよ、好きに言ってくれて、二度とジーンに酒は飲ませないから。

ってオイ!!! 笑い転げてんじゃねーぞミリアリア。

「いや、すまん。ははは、いや、面白い」

「面白い。じゃねーよ、なんなのこのジーンは」

「何、好かれている証拠のような物じゃないか」

それは解ってるが、ぶつとびすぎじゃねーか？

かなり怖くなってきた。

「ええ、シグルド。愛していますよ、あと3年も待てば十分子供も作れますし、その時に奪いに行きます」

「……」

「ははははは！！」

何を奪いに来るか解らないのが……って解るわ！！ ナニをだろ！？ ジーンさんどこまで人生設計して生きてんだよ。

3年って俺は17か？

いやいや子供作れるだろうけど、恥ずかしげもなく宣言するなよ。あと、ミリアリアは笑いすぎだ。

しかし、ジーンもミリアリアも素面では見れない表情ばかり出してくる。

新しい一面を見れるのは嬉しいが、酒はマジで怖い。

特にジーンには二度と飲ませないようにしよう。

「シグルド、私を愛していますか？」

「愛してるよ」

「私も愛しています」

フワリと笑い、ジーンは俺の膝に倒れこんだ。

まあ、寝たのですね。

ズリズリと動き、ジーンを膝枕する。

「ったく。酒は魔物とはよく言ったモンだよ」

「ははは、いや、酒は良いな。ははは」

「お前はそろそろ落ち着けよ、過呼吸で死ぬぞ」

「はははゲホツゴホツ。。。くくく」

そこまでして笑いたいなら俺は何も言わないよ。

でもね、報復はするから。

ミリアリアの恥ずかしい写真をバラ撒いてやるから。絶対な。

などとアホな事を計画していると筋肉が近寄ってきた。

「なんだ、ジーンは寝たのか？」

「まあね。さっきまでぶっ飛んだ事言ってたけど、パタッと寝た」

「お前以上にぶっ飛んだ奴はいないけどな」

「それは、もういいって、それよりどつたのさ、さっきまでロイと喋ってなかったか」

あの演説を聴いてたのはコイツとヒューズさんだけだ。

チラリと目を向ければ、キラキラした目で語り合うヒューズさんとロイが見える。

「まあな、しかしありやダメだな」

「ん？ 正義の国計画か？」

「ああ、理想論しかもってねーなありや」

「ロイが？」

「おお」

意外だ。

ロイも科学者の端くれ、現実的な物の見方が出来ると思ってたが。

「私は聞いてなかったが、どんな内容だったんだ？」

「纏めてみるとだな、アメストリスは正義、錬金術の力で民を守る、軍を支えるのは国家錬金術師、私は軍を支える一柱になる。なんてモンだ」

ありや。

力に溺れたかマスタング。

「ふむ。具体案などは？」

「少佐までは国家資格で登れるからな、大して不安はないみたいだぜ」

あらま、マスタング君、そりゃ軍を舐めすぎだ。

あの傑物アームストロング大佐が茨の道だと評価する場所だ。舐めてかかれれば痛い目を見る。

「マスタングには付けんな」

「だな。これから戦場を経験してどう変わるかによるが、今のあいつに付くのは自殺行為だろ」

酷評だが、俺も同意かな。

ロイは、俺が求める英雄にはなれそうにない。

今の一番有力候補はアームストロング大佐だが、うーん。彼女は苛烈すぎる気がするんよね。

まだ時間はあるから観察してみるけど、彼女でファイナルアンサーのような気がしないでもない。

「お前はどんな国にしたいんだ？」

不意にアルフォードが聞いてくるが、俺の答えは一つだ。

「安全に暮らせる国だ」

「そりゃ無理だ。お前も夢想家になるのか？」

「今はジーンがこれだから言わないけどな、俺だって色々手を打つてんのさ」

アルフォードとミリアリアの眉が跳ね上がる。

ワクテカしてる表情を見れば解るが、やっぱり動乱が好きらしい。

「くはは、これだからお前の周りに居るのは飽きん。次の休暇が待ち遠しいな」

「お、ミリアリアも参加する事にしたのか」

「ああ、以前は暇で暇でしょうがなかったのな。せつかくの誘いだ乗る意外あるまい」

「だよな、俺も同じ理由だな。こいつの親父さんに会うのも楽しみなんだが」

いや、お前等休暇中に内容話すの決定事項みたいに話し進めんないつかは話すだろうけど、流石に早すぎるぞ。

なんだかんだ言っただけで話しそつな気がするけど、まだ時期尚早だよ。

ともあれ、俺は周囲の音から気をそらし、膝の上で幸せそうに眠っているジーンのを髪を梳く。身じろぎするが、苦しそうなソレではなく、甘えるような仕草でマジで抱きしめたくなる。

あーでもこれお袋が知ったらどう思うだろうか。

ちょっと気になるが、多分大丈夫だろう。

ジーンとお袋、仲よかったし。
問題ないだろう。

いろんな旗を立てつつ、祝賀の宴は進んでいく。
ロイ達との士官学校最後の宴。

いろいろな想いを抱きつつ、俺の士官学校一年目はそろそろ幕を
閉じる。

28話・宴（後書き）

俺自身、今酔ってるので後で書き直すかも、ごめんよー!!

お知らせ

お久しぶりです。

突然ですが、『俺、練成されたんだ』を練り直したいと思います。

切欠としては、この作品を読んだ友人の一言と、誤字脱字を見直そうと読み直した事です。

友人に「お前、手抜きすぎだろ」と言われました。

實際手を抜いていたと言うよりも、「イズミさんに子供をあげたいついでにちょっと色を付けてみるか」と言う思いつきで書き始めた作品でして、最初と最後は決めていたんですが、中身の設定をいい加減にしすぎていました。

友人に言われた時は、大して堪えていなかったんですが、誤字脱字をチェックする為に1話から読み直していて、物凄く恥ずかしくなりました。

誤字脱字が多いのは別に、これは確かに全力だしてないな。と感じる部分が多数あったのが理由です。

私自身が物を作る事を職にしているからなのか、読み直せば読み直すほど納得できず、作品の評価が高い事も相まって、羞恥で死にたくなるぐらいです。

例えば、自分で納得のいかない作品。

完成度の全てに納得の出来ない作品を、何かの企画に出品し、そこで高評価を得た。

その悔しさと言っんでしょうか、それに似た感じの感情が生まれています。

作品を壊したくて、隠したくて本当むちゃくちゃにしたい衝動がふつふつと……。

それくらい感情が揺れてます。

それでも一応完成させようと何度も筆をとったのですが、続きが書けませんでした。

3日ほど悩みましたが、イズミさんに子供をあげたい。だけを残して後の全てを書き直そうと思っています。コメディになるのかシリアスになるのかは不明ですが、数ヶ月は復活しないと思われま

す。真に勝手な事情で本当に申し訳ないですが、少し時間を下さい。

基本的にオリジナルキャラクターはそのままだと思いますが、色々変わる関係もあると思います。

この作品は削除せず、評価の対象外にしておくに止めておきます。

(2010年4月4日0時に対象外に設定を変えます)
本当勝手で申し訳ない。

おろろー。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1381j/>

俺、練成されたんだ。

2010年10月9日10時54分発行